

一般国道17号
六日町バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

北沖東遺跡
長表東遺跡

2006

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道17号

六日町バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

きた おき ひがし 遺跡
北 沖 東 遺跡
なが おちて ひがし 遺跡
長 表 東 遺跡

2006

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道17号は、新潟と関東を結ぶ主要幹線道路としての役割を担っています。また、地域経済・日常生活を支える基盤施設としての役割も果たしています。しかしながら、近年、道路交通量の増加や車両の大型化に伴い、南魚沼市（旧六日町）周辺では交通渋滞や交通事故など、生活環境に悪影響を与える様々な問題が増加しています。これらの問題を解消し、円滑な交通の確保と都市機能を活性化するために、南魚沼市竹俣から南魚沼市庄之又間を結ぶ延長5.1kmで、六日町バイパスの建設が計画されました。

本書は、この六日町バイパスの建設に先立ち、平成16・17年度に発掘調査を行った北沖東遺跡と、平成17年度に発掘調査を行った長表東遺跡の発掘調査報告書です。

調査の結果、北沖東遺跡では古墳時代後期の溝、杭列、水田の可能性のある区画、自然流路が検出されました。自然流路には木道を渡してある場所が確認できました。遺物は古墳時代後期の土師器、木製農具、杭や平安時代の土器などが出土しました。北沖東遺跡から出土した木製農具や杭列は、この地域が水田などの生産区域であったことを示す貴重な資料になるものと思われます。長表東遺跡では弥生時代から古墳時代の土器が出土しています。また、両遺跡の周辺に位置する県史跡飯綱山古墳群や平成15年度に発掘調査をした余川中道遺跡との関連も注目されます。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な協力とご援助をいただいた南魚沼市教育委員会、ならびに地元住民の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例 言

- 1 本報告書は、新潟県南魚沼市小栗山字北沖19番地3ほかに所在する北沖東遺跡、および新潟県南魚沼市小栗山字長表322番地3ほかに所在する長表東遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道17号六日町バイパスの建設に伴い国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が委託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 4 埋文事業団は掘削作業等を株式会社みくに考古学研究所に委託して発掘調査を実施した。
- 5 整理作業および報告書作成に係る作業は当該年度に行った。
- 6 出土遺物および調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。
- 7 遺物の注記は、北沖東遺跡の平成16年度分については「北オキヒ」、平成17年度分は「05北オキヒ」、長表東遺跡については「05ナヒ」とし、出土地点や層位を続けて記した。
- 8 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 9 遺物番号は種別に依りなく通し番号とし、本文および観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 10 引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に[]で示し、巻末に一括して掲載した。
- 11 遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セピア스에委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。また遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコンCOOLPIX995）で撮影し、遺構写真同様デジタル化して編集を行った。なお、図面作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。
本文・挿図：テキスト形式・Excel形式のデータ・トレース原図・貼り込み版
遺構図面図版：デジタルデータ・レイアウト図・文字データ
遺物図面図版：トレース図（北沖東遺跡平成16年度分、個別）・トレース原図（個別）・拓影・レイアウト図
写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図
- 12 本書の執筆は、飯坂盛泰（埋文事業団調査課班長）、山崎忠良（同班長）、笹川 隆（同主任調査員）、島津賢男（同主任調査員）、入江清次（同主任調査員）、實川順一（株式会社みくに考古学研究所）、桑原 健（同）がこれにあたり、編集は飯坂・山崎が担当した。執筆分担は以下のとおりである。
第1章…笹川・入江 第2章・第3章1B・3A4）・3B3）・第4章1C…入江 第5章1A・2C…笹川
第3章1C・2A・2B・2D・第4章2…島津 第5章3A1）～3）…飯坂
第4章1A・B…桑原 第4章3…實川 その他…山崎
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる（敬称略 五十音順）。
安立 聡 池田 亨 金子 拓男 佐藤 重一 野田 豊文 藤原 敏秀
国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所 南魚沼市教育委員会 南魚沼市役所

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
A 北沖東遺跡	1
B 長表東遺跡	1
2 調査と整理作業	3
A 調査と体制	3
1) 試掘調査	3
2) 北沖東遺跡の本発掘調査	4
3) 長表東遺跡の本発掘調査	5
B 整理と体制	5
1) 北沖東遺跡	5
2) 長表東遺跡	6

第Ⅱ章 遺跡の環境

1 地理的環境	7
2 歴史的環境	9

第Ⅲ章 北沖東遺跡

1 調査概要	12
A グリッドの設定	12
B 基本層序	13
1) 市道東側	13
2) 市道西側	13
C 遺構・遺物の検出状況	15
1) 平成16年度調査	15
2) 平成17年度調査	15
2 遺 構	15
A 概 要	15
B 記述の方法	16
C 平成16年度調査	16
1) 川 跡	16
2) 杭 列	18
3) 性格不明遺構	20
D 平成17年度調査	21
1) 溝・川跡	21
2) 杭 列	22
3) 木 道	24
4) 土 坑	24
5) 性格不明遺構	25
3 遺 物	25
A 平成16年度調査	25
1) 概 要	25
2) 土 器	25
3) 銭 貨	26
4) 木 製品	26
B 平成17年度調査	28
1) 概 要	28
2) 土 器	28
3) 木 製品	28

第IV章 長表東遺跡

1 調査概要	30
A グリッドの設定	30
B 基本層序	30
C 遺構・遺物の検出状況	31
2 遺構	31
A 概要	31
B 遺構各説	32
1) 溝・川跡	32
2) 土坑	33
3) ビット	34
4) 杭列	35
5) 性格不明遺構	35
3 遺物	36
A 概要	36
B 土器	36
1) 弥生時代	36
2) 古墳時代	36
C 木製品	37
D 銭貨	37

第V章 まとめ

1 周辺の遺跡動向	38
2 遺跡周辺の湧水地点	40
〈要約〉	41
〈引用・参考文献〉	42
〈観察表〉	43

挿図目次

第1図 北沖東遺跡 試掘確認調査のトレンチ位置図	2
第2図 長表東遺跡 試掘確認調査のトレンチ位置図	2
第3図 北沖東遺跡の本発掘調査範囲と平手川の旧流路	7
第4図 北沖東遺跡周辺の土地利用（明治時代）	8
第5図 長表東遺跡周辺の地形	8
第6図 遺跡の位置と周辺の遺跡	10
第7図 北沖東遺跡 グリッド設定図	12
第8図 北沖東遺跡 基本層序	14
第9図 遺構の略称	16
第10図 ナスビ形農耕具の部位名称	27
第11図 長表東遺跡 グリッド設定図	30
第12図 長表東遺跡 基本層序	32
第13図 周辺の遺跡と湧水地点	39

表目次

第1表 北沖東遺跡 層序対応表	13
第2表 4B11・16・17のビット群一覧表	34

図版目次

【図面図版】

- 図版 1 北沖東遺跡 遺構全体図
図版 2 北沖東遺跡 H16年度遺構全体図(1)
IV～VII層
図版 3 北沖東遺跡 H16年度遺構分割図(1)
IV～VII層
図版 4 北沖東遺跡 H16年度遺構個別図(1)
IV～VII層
図版 5 北沖東遺跡 H16年度遺構分割図(2)
IV～VII層
図版 6 北沖東遺跡 H16年度遺構分割図(3)
IV～VII層
図版 7 北沖東遺跡 H16年度遺構分割図(4)
IV～VII層
図版 8 北沖東遺跡 H16年度遺構個別図(2)
IV～VII層
図版 9 北沖東遺跡 H16年度遺構全体図(2) VII層
図版 10 北沖東遺跡 H16年度遺構分割図(5) VII層
図版 11 北沖東遺跡 H16年度遺構分割図(6) VII層
図版 12 北沖東遺跡 H16年度遺構分割図(7) VII層
図版 13 北沖東遺跡 H17年度遺構分割図(1)
図版 14 北沖東遺跡 H17年度遺構個別図(1)
図版 15 北沖東遺跡 H17年度遺構分割図(2)
図版 16 北沖東遺跡 H17年度遺構個別図(2)
図版 17 北沖東遺跡 H17年度遺構分割図(3)
図版 18 北沖東遺跡 H17年度遺構分割図(4)
図版 19 北沖東遺跡 H17年度遺構分割図(5)
図版 20 北沖東遺跡 H17年度遺構分割図(6)
図版 21 北沖東遺跡 H16年度土器・銭貨
図版 22 北沖東遺跡 H16年度木製品(1)
図版 23 北沖東遺跡 H16年度木製品(2)
図版 24 北沖東遺跡 H16年度木製品(3)
図版 25 北沖東遺跡 H17年度土器・木製品(1)
図版 26 北沖東遺跡 H17年度木製品(2)
図版 27 北沖東遺跡 H17年度木製品(3)
図版 28 北沖東遺跡 H17年度木製品(4)
図版 29 長表東遺跡 遺構全体図
図版 30 長表東遺跡 遺構分割図(1)
図版 31 長表東遺跡 遺構分割図(2)
図版 32 長表東遺跡 遺構分割図(3)
図版 33 長表東遺跡 遺構分割図(4)
図版 34 長表東遺跡 遺構個別図(1)
図版 35 長表東遺跡 遺構個別図(2)
図版 36 長表東遺跡 遺物

【写真図版】

- 図版 37 北沖東遺跡 遺跡通景・遺跡近景
図版 38 北沖東遺跡 H16年度調査区
図版 39 北沖東遺跡 H16年度SD6周辺・基本層序
図版 40 北沖東遺跡 H16年度溝(1)
図版 41 北沖東遺跡 H16年度溝(2)・作業風景
図版 42 北沖東遺跡 H16年度溝(3)
図版 43 北沖東遺跡 H16年度杭列(1)
図版 44 北沖東遺跡 H16年度杭列(2)・
性格不明遺構ほか
図版 45 北沖東遺跡 H17年度調査区
図版 46 北沖東遺跡 H17年度溝(1)
図版 47 北沖東遺跡 H17年度溝(2)
図版 48 北沖東遺跡 H17年度溝(3)
図版 49 北沖東遺跡 H17年度杭列(1)
図版 50 北沖東遺跡 H17年度杭列(2)・木道・
土坑
図版 51 北沖東遺跡 H17年度性格不明遺構・
遺物出土状況
図版 52 北沖東遺跡 H16年度土器・銭貨
図版 53 北沖東遺跡 H16年度木製品(1)
図版 54 北沖東遺跡 H16年度木製品(2)
図版 55 北沖東遺跡 H16年度木製品(3)
図版 56 北沖東遺跡 H17年度土器・木製品(1)
図版 57 北沖東遺跡 H17年度木製品(2)
図版 58 北沖東遺跡 H17年度木製品(3)
図版 59 北沖東遺跡 H17年度木製品(4)
図版 60 長表東遺跡 遺跡近景・基本層序・溝(1)
図版 61 長表東遺跡 溝(2)・土坑(1)
図版 62 長表東遺跡 土坑(2)・ビット(1)
図版 63 長表東遺跡 ビット(2)・杭列・
性格不明遺構
図版 64 長表東遺跡 遺物

第1章 序 説

1 調査に至る経緯

現在、一般国道17号が通過する南魚沼市中心部では、上越新幹線や関越自動車道等の高速交通体系の整備に伴い、交通量が増加し慢性的な交通渋滞を引き起こしている。一般国道17号六日町バイパスは、交通混雑の解消と良好な生活環境の確保を目的に、南魚沼市竹俣から南魚沼市庄之又間の5.1kmで計画されたものである。

建設者（現、国土交通省）は一般国道17号六日町バイパスの着工に向けて、県教委に南魚沼市余川字坂之上から小栗山字長表地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団が平成12（2000）年12月6日に分布調査を実施したところ、調査地点が扇状地に位置するため、ごく少量の土師器・須恵器が表採されたのみであった。しかし同様の扇状地に位置する坂之上遺跡や来清東遺跡、来清西遺跡が現地地表下0.3～1.5mで確認されていることから、扇状地でも遺跡が存在する可能性があることが判断された。また扇状地における土砂の堆積は現地表からは判断できず、採集遺物の有無では遺跡の存在は判断できないため、流路部分を除いた全域にわたり試掘調査による遺跡の存在確認が必要であると県教委に報告した。

A 北沖東遺跡

国土交通省の依頼を受けて、県教委は埋文事業団に調査を委託し、埋文事業団は平成15（2003）年11月に南魚沼市小栗山内・余川地内の107,810m²（未買収地13,860m²を含む）を対象に試掘調査を実施した。調査の結果、長表東遺跡・北沖東遺跡・藤塚遺跡が新たに発見された〔田中2004〕。北沖東遺跡に関しては、古墳時代後期の土師器とともに多くの木製品が出土した。その結果37～48T周辺7,800m²について本発掘調査が必要であると県教委に報告した。

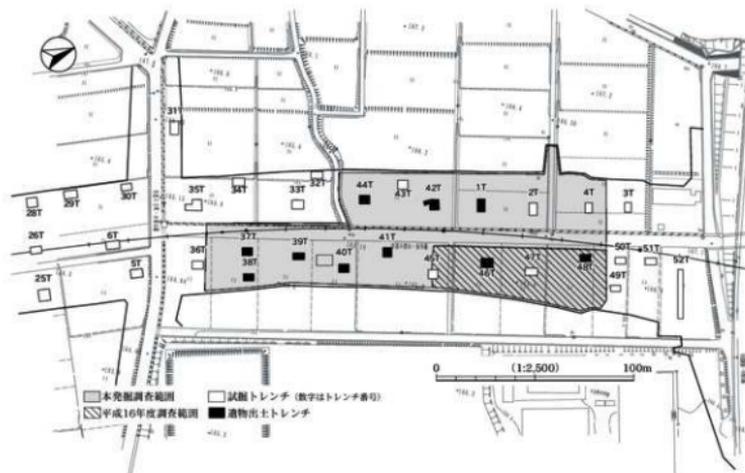
その後国土交通省の依頼を受けて、県教委は埋文事業団に調査を委託し、埋文事業団は平成16（2004）年5月に平成15年度に調査できなかった南魚沼市小栗山内13,780m²を対象に試掘調査を実施した。調査の結果、北沖東遺跡周辺では、1Tで木製品、2Tで杭列が確認された。この結果、1・2T周辺2,100m²を加えた9,900m²について本発掘調査が必要であると県教委に報告した。

国土交通省・県教委・埋文事業団の三者で調査工程について協議し、遺跡北側2,300m²について平成16年度に本発掘調査を行うことを決定した。また平成16年度試掘調査の結果を受けて、遺構・遺物の確認できない市道西側の600m²（32・33T周辺）については本発掘調査必要範囲から除外した。その結果本発掘調査必要面積は9,300m²となり、平成16年度に調査する2,300m²を除く7,000m²については平成17年度に本発掘調査を行うことを決定した。

B 長表東遺跡

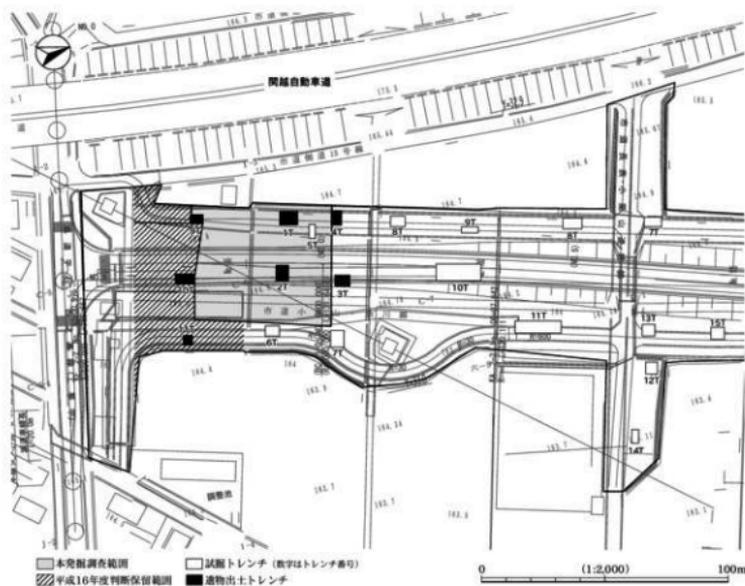
国土交通省の依頼を受けて、県教委は埋文事業団に調査を委託し、埋文事業団は平成15（2003）年11月に南魚沼市小栗山内・余川地内の107,810m²（未買収地13,860m²を含む）を対象に試掘調査を実施し

1 調査に至る経緯



第1図 北沖東遺跡 試掘確認調査のトレンチ位置図

(1T～6Tは平成16年度調査分、ほかは平成15年度調査)



第2図 長表東遺跡 試掘確認調査のトレンチ位置図

た。調査の結果、長表東遺跡・北沖東遺跡・藤塚遺跡が新たに発見された〔田中2004〕。長表東遺跡に関しては、遺物は1Tで弥生土器、2Tで古墳時代後期の土師器が出土したが、遺構は検出されなかった。この結果1・2T周辺の1,600m²について本発掘調査が必要で、隣接する未買取地5,050m²（STA92～95+10m）の試掘調査の結果を待って本発掘調査範囲を確定する必要があると県教委に報告した。

その後国土交通省の依頼を受けて、県教委は埋文事業団に調査を委託し、埋文事業団は平成16（2004）年5月に平成15年度に調査できなかった南魚沼市小栗山地区内の13,780m²を対象に試掘調査を実施した。調査の結果、長表東遺跡周辺では、9Tで古墳中期から後期の土師器、10Tで弥生中期の土器、11Tで木製品が出土したが、10・11Tからの遺物の出土量は少ない。また遺構は検出されなかった。この結果、比較的遺物が多く出土した9Tまでの965m²を追加した2,565m²について本発掘調査が必要で、それ以下の1,835m²は判断保留範囲とすると県教委に報告した。

国土交通省・県教委・埋文事業団の三者で調査工程について協議し、平成17（2005）年9月より本発掘調査を行うことを決定した。なお平成17年10月に埋文事業団は、県道平石西之裏線を挟んで長表東遺跡に隣接する5,623m²を対象に試掘調査を実施した。調査の結果3Tから杭が出土したが、遺構は検出されず、本発掘調査は不要と判断された。長表東遺跡の本発掘調査と平成17年度試掘調査の結果から、平成16年度試掘調査で判断保留とされた1,835m²についても本発掘調査は不要と判断された。

2 調査と整理作業

A 調査と体制

1) 試掘調査（第1・2図）

北沖東遺跡と長表東遺跡は平成15年度試掘調査で新発見され、平成16年度試掘調査で調査面積が追加された。そのため試掘調査に関しては年度ごとにまとめて記述する。

平成15年度

平成15（2003）年11月4日～11月26日に埋文事業団が実施した。対象範囲107,810m²に任意にトレンチを設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認する方法が採られた。157か所のトレンチ調査では、4地点で遺物包含層を確認、遺構・遺物を検出した。37～48トレンチの範囲では古墳時代後期の内面黒色土師器杯、木製品、近世陶磁器等の遺物を検出し、このうち40トレンチでは、現地地表下1mの地点で川跡（幅1.2m）とそれに伴う6本の杭列を検出し、さらに同一検出面から木製農具が出土した。木製農具は形態的特徴から古墳時代中期～後期に位置づけられ、県内では初の出土例である。この結果、古墳時代後期の遺物の分布が見られる37～48トレンチ周辺の7,800m²について本発掘調査が必要であり、遺跡名を「北沖東遺跡」と呼称することとした。

また1・2T周辺では、現地地表下30～50cmで弥生～古墳時代の遺物包含層を確認した。出土遺物は弥生土器、古墳時代後期の土師器で、遺構は検出されなかった。この結果、1・2T周辺の1,600m²について本発掘調査が必要であり、遺跡名を「長表東遺跡」と呼称することとした。

平成16年度

平成16（2004）年5月17日～5月19日に埋文事業団が実施した。対象範囲13,780m²に任意にトレンチを設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認する方法が採られた。調査の結果、北沖東遺跡周辺では1Tで木製品、2Tで杭列が確認され、1・2T周辺の2,100m²を本発掘調

2 調査と整理作業

査必要範囲に追加した。

長表東遺跡周辺では9・10Tで現地地下35cmで弥生～古墳時代の遺物包含層を確認した。出土遺物は弥生土器（栗林式）、古墳時代中期～後期の土師器で、遺構は検出されなかった。試掘調査の結果、9Tまでの965m²を本発掘調査必要範囲に追加した。

調査体制

	平成15年度	平成16年度
調査期間	平成15（2003）年11月4日～26日	平成16（2004）年5月17日～19日
調査主体	新潟県教育委員会	新潟県教育委員会
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	黒井 幸一（事務局長）	黒井 幸一（事務局長）
管理	長谷川二三夫（総務課長）	長谷川二三夫（総務課長）
庶務	高野 正司（総務課班長）	高野 正司（総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（調査課長）	藤巻 正信（調査課長）
調査指導	田海 義正（調査課国土交通省担当課長代理）	山本 肇（調査課試掘確認調査担当課長代理）
調査担当	尾崎 高宏（調査課班長）	滝沢 規朗（調査課班長）
調査職員	田中 一徳（調査課嘱託員）	片岡 千恵（調査課嘱託員）

2) 北沖東遺跡の本発掘調査

平成16年度

9月6日に現場に入り、9日から重機による表土除去作業を開始した。9月27日には作業員55名体制で、人力による包含層掘削と調査区中心から東西南北に残したベルトによる土層の調査を開始した。また包含層掘削が終わった地点から遺構精査、同発掘を行っている。出土遺物の大半は木製品（杭）であり、遺構精査により検出された杭列に伴うものと考えられた。遺構は杭列のほかには川跡が数条検出されている。包含層や確認面は地点によって色調・土質が変化し、北側では洪水堆積によると思われる礫層が堆積し、土層堆積状況は一定していない。調査が進展するにつれ、遺物が希薄であることが確認された。このため、調査区南端から南方向に約12m、300m²分を調査することとなった。10月8日にこの拡張部分の調査に着手、南側に調査を進めるにつれ、土質はますます脆弱になり、湧水も見られ、遺構確認面の乾かない状態が続いた。この拡張区においても杭列が検出された。11月上旬にはⅦ層までの調査も概ね終了し、11月3日には遺物展示会を開催し、同日に完掘写真を撮影した。その後、16GⅦ層で一部確認されていた川跡の調査を行うこととなり、作業員28名体制で杭列の抜き取り作業とともに、Ⅶ層の遺構精査を行った。SD9と名付けた川跡は人為的に成形されたと思われる中流域と、自然流路と考えられる下流域からなり、上流域には新たに杭列が検出された。また15Gでは平成15年度試掘調査で検出されたものと同様の木製の農具が出土した。11月18日にはⅦ層の完掘写真撮影を行い、19日には平面図測量も終了した。その後残務処理を終え、11月26日に現場から撤収した。

平成17年度

平成17年度調査区は平成16年度調査区の南側と市道を挟んで西側の7,000m²である。6月6日から重機による表土除去作業を市道東側（六日町中学校側）から行き、順次、市道の西側（魚沼丘陵側）に移った。7月4日には作業員40名体制で、市道東側から包含層掘削を開始した。その後、包含層掘削が終わった地点から遺構精査、同発掘を行った。7月中旬には木道等の調査を行い、7月末には市道東側の調査を概ね終了した。調査の終了した市道東側の南半について、バイパス工事の関係から早期の引き渡しを国

土交通省から要求されたため、8月9日に完掘写真を撮影し、8月12日に引き渡した。8月から市道西側の包含層掘削を開始したが、遺構・遺物が希薄であったため、8月25日から重機による筋掘りを行った。その結果、市道西側の南半は高植土層が堆積し、安定した遺構確認面は認められなかった。その後9月9日に航空写真撮影を行い、9月16日に残務処理を終え現場を撤収した。9月20日には調査区を国土交通省に引き渡した。

調査体制

	平成16年度	平成17年度
調査期間	平成16(2004)年9月6日～11月26日	平成17(2005)年6月6日～9月16日
調査主体	新潟県教育委員会	新潟県教育委員会
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	黒井 幸一 (事務局長)	波多 俊二 (事務局長)
管理	長谷川二三夫 (総務課長)	長谷川二三夫 (総務課長)
庶務	高野 正司 (総務課班長)	長谷川 靖 (総務課班長)
調査総括	藤巻 正信 (調査課長)	藤巻 正信 (調査課長)
調査指導	田海 義正 (調査課国土交通省担当課長代理)	田海 義正 (調査課本発掘調査担当課長代理)
調査担当	飯坂 盛泰 (調査課班長)	山崎 忠良 (調査課班長)
調査職員	菅川 陸 (調査課主任調査員) 實川 順一 ((株)みくに考古学研究所調査研究室室長)	島津 賢男 (調査課主任調査員) 入江 清次 (調査課主任調査員) 實川 順一 ((株)みくに考古学研究所調査研究室室長)

3) 長表東遺跡の本発掘調査

8月1日から重機による表土除去作業を開始した。9月12日からは作業員40名を投入し、調査区南側から包含層掘削を開始したが、遺構・遺物が希薄な状態が看取された。9月下旬になり、調査区北西側の微高地に調査が進むと、大型の土坑等の遺構や遺物が確認された。3Dの周辺では弥生時代後期～古墳時代の土器が少量まとまって検出された。その後10月13日に航空写真撮影を行い、19日には現場作業を終了した。10月21日に残務処理を終え現場を撤収、28日には調査区を国土交通省に引き渡した。

調査体制

	平成17年度
調査期間	平成17(2005)年8月1日～10月19日
調査主体	新潟県教育委員会
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	波多 俊二 (事務局長)
管理	長谷川二三夫 (総務課長)
庶務	長谷川 靖 (総務課班長)
調査総括	藤巻 正信 (調査課長)
調査指導	田海 義正 (本発掘調査担当課長代理)
調査担当	山崎 忠良 (調査課班長)
調査職員	島津 賢男 (調査課主任調査員) 入江 清次 (調査課主任調査員) 實川 順一 ((株)みくに考古学研究所調査研究室室長)

B 整理と体制

1) 北沖東遺跡

平成16年度整理作業

遺構図面の整理、出土遺物の水洗・註記作業は、調査現場で発掘調査と併行して実施した。平成16年

2 調査と整理作業

12月～平成17年3月に、遺物の復元・写真撮影、図版作成、原稿の執筆等、本格的な整理作業を埋文事業団で行った。

平成17年度整理作業

遺構図面の整理、出土遺物の水洗・註記作業は、調査現場で発掘調査と併行して実施した。遺物は図化できる最低限の復元を行い、実測・拓本作業は9月～10月に行った。11月から図版作成、原稿の執筆、遺物写真撮影等、本格的な整理作業を埋文事業団で行った。

整理体制

	平成16年度	平成17年度
整理期間	平成16(2004)年12月1日～平成17(2005)3月31日	平成17(2005)年11月1日～平成18(2006)年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会	新潟県教育委員会
整理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	黒井 幸一 (事務局長)	波多 俊二 (事務局長)
管理	長谷川二三夫 (総務課長)	長谷川二三夫 (総務課長)
庶務	高野 正司 (総務課班長)	長谷川 靖 (総務課班長)
整理総括	藤巻 正信 (調査課長)	藤巻 正信 (調査課長)
整理指導	田海 義正 (調査課国土交通省担当課長代理)	田海 義正 (調査課本発掘調査担当課長代理)
整理担当	飯坂 盛泰 (調査課班長)	山崎 忠良 (調査課班長)
整理職員	笹川 陸 (調査課主任調査員) 實川 順一 ((株)みくに考古学研究所調査研究室室長)	鳥津 賢男 (調査課主任調査員) 入江 清次 (調査課主任調査員) 實川 順一 ((株)みくに考古学研究所調査研究室室長)
作業員	桑原 健・今成京子・小野塚紀子・貝瀬あゆみ 桑原淳子・富沢由美子(以上、(株)みくに考古学研究所)	桑原 健・今成京子・貝瀬あゆみ・桑原淳子 寺口由美子・富沢由美子(以上、(株)みくに考古学研究所)

2) 長表東遺跡

整理作業

遺構図面の整理、出土遺物の水洗・註記作業は、調査現場で発掘調査と併行して実施した。遺物は図化できる最低限の復元を行い、11月から実測・拓本作業、図版作成、原稿の執筆。遺物写真撮影等本格的な整理作業を行った。

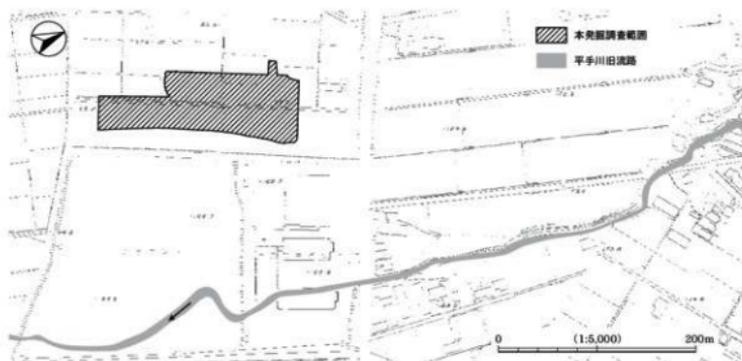
整理体制

	平成17年度
整理期間	平成17(2005)年11月1日～平成18(2006)年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会
整理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	波多 俊二 (事務局長)
管理	長谷川二三夫 (総務課長)
庶務	長谷川 靖 (総務課班長)
整理総括	藤巻 正信 (調査課長)
整理指導	田海 義正 (調査課本発掘調査担当課長代理)
整理担当	山崎 忠良 (調査課班長)
整理職員	鳥津 賢男 (調査課主任調査員) 入江 清次 (調査課主任調査員) 實川 順一 ((株)みくに考古学研究所調査研究室室長)
作業員	桑原 健・今成京子・貝瀬あゆみ・桑原淳子 寺口由美子・富沢由美子(以上、(株)みくに考古学研究所)

第Ⅱ章 遺跡の環境

1 地理的環境

北沖東遺跡・長表東遺跡が所在する南魚沼市の旧六日町は、新潟県中越地方南東部の六日町盆地に位置する。旧六日町周辺の地形を概観すると、六日町盆地の中央には魚野川が南北に流れ、魚野川右岸は越後山脈から三国山脈に連なる標高1,500～2,000mの起伏の大きい山岳地帯であり、谷筋から広大な扇状地が広がっている。この山岳地帯は南北方向の稜線と東西方向の稜線とが、交互にほぼ直行する形で屈曲しながら連なっている。これは地質構造とともに、第三紀末以降の隆起運動や大構造線の存在等に基づくものと考えられる。一方左岸は標高800m前後の起伏の小さな魚沼丘陵が位置し、魚野川に注ぐ小規模な河川に伴うやや傾斜の大きな扇状地を形成している。また魚沼丘陵の尾根筋が平行して流れる信濃川中流域（十日町盆地）との分水嶺であり、六日町盆地と十日町盆地との間には、標高500～700m程度の峠道（清水峠・八箇峠・柳屋峠）が位置する。魚沼丘陵の形成時期については、更新世中期（50～15万年前）と推定され、激しい隆起運動の結果南北方向の断層が生じ、東側が陥没し丘陵と並行して六日町盆地が形成された〔波辺・荒川1981〕と考えられている。水系についても上記の地形の特徴を反映し、兩岸には顕著な違いがみられる。右岸の五十沢川以北では、北から佐梨川・水無川・宇田沢川・三国川が群馬県境主稜から流下し、上流部は多くの溪谷を刻み、V字形の峻険な谷地形を形成している。一方、左岸の魚沼丘陵から魚野川本流に注ぐ諸溪流は、丘陵線にいずれも直行し、東流する鎌倉沢川・平手川・庄之又川等の全長約4～5kmの短い流路の河川である。これら地形的な特徴は、遺跡の立地にも大きく関与していると考えられ、魚野川左岸には多数の遺跡が点在し、古くからの人々の営みの痕跡が認められる。旧六日町では、魚沼丘陵東麓に飯綱山古墳群・蟻子山古墳群等県内有数の古墳群を擁し、南魚沼地域での中心的な役割を果たしてきたと考えられる。また近世に至っては三国街道の宿場町として栄える等、現在まで関東



第3図 北沖東遺跡の本発掘調査範囲と平手川の旧流路

（六日町役場平成9年修正1：2,500「六日町村大字六日町之内三番字川原寄全圖 明治30年調整」
「余川村ノ内二拾九番字木之目坂全圖 調整年不詳」を一部改変して作成）

経済圏とを結ぶ要衝地としての役割を担っている。

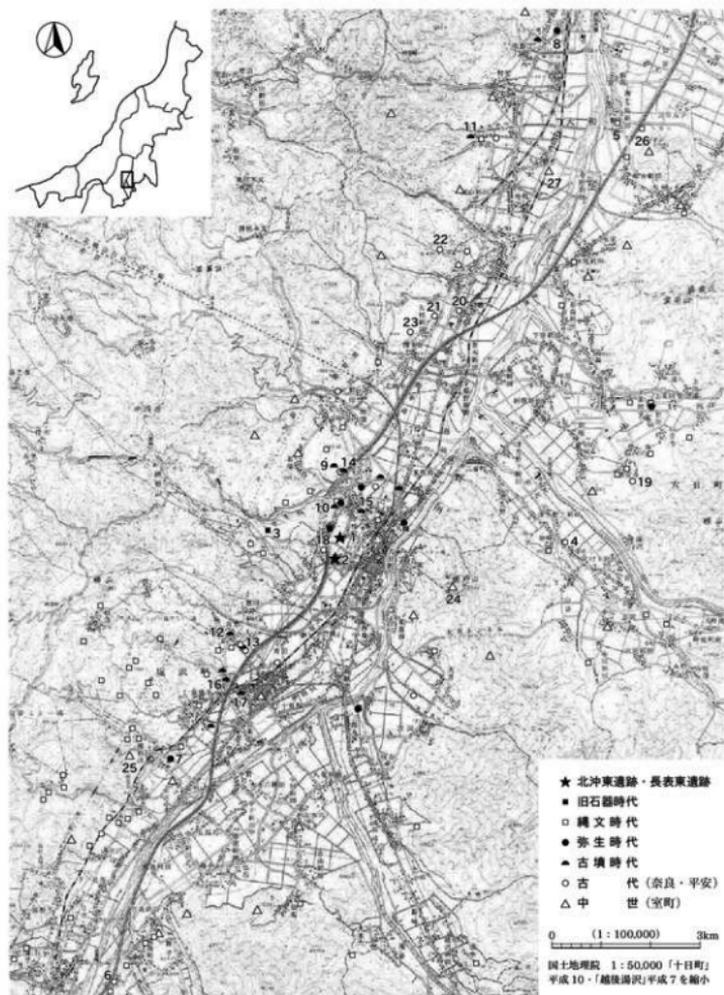
南魚沼市小栗山は、六日町の西方、魚沼丘陵樹形山の裾部に広がる集落で、平手川（旧余川沢川）と鎌倉沢川の両河川により形成された扇状地の側端に位置している。鎌倉沢川は大正13年に、また平手川は昭和47年に北側を流れる近尾川とともに流路変更の工事が行われ、それ以後破堤による被害を免れるようになったが、両河川はかつて市の中心部の伊勢町西端で合流していたため、雪解けや豪雨時にたびたび洪水の被害を周囲にもたらした〔余川誌編集委員会1990〕。地元の方々の話によれば、遺跡周辺でも以前から河川の増水による洪水の被害をたびたび受けており、沼地となっていた場所も多かったということである。北沖東遺跡周辺では、明治時代後期に調整された土地構成図によれば（第4図）、平手川は現在の六日町中学校の校地内を蛇行しながら南に抜ける流路であったことが確認される。更に詳しく見れば、北沖東遺跡の東側に河川跡と見られる原野が南北方向に伸びており、この付近の河川がしばしば流路を変えていたことが分かる。一方、北西側の水田は北東―南西を向いており、扇状地形を反映する。これらのことから考えれば、北沖東遺跡の東側は河川による自然堤防で標高は高く、そこから西側に向かって傾斜し遺跡周辺で低平になり、魚沼丘陵に向かってなだらかに上っていくという当時の地形が復元できる。遺跡立地当時の水環境を考えれば、河川や湧水により水利という面では恵まれていたが、低平地であるため、ひとたび大雨が降れば河川は氾濫し、浸水被害をもたらしていたことが推測される。長表東遺跡周辺では魚沼丘陵から十二沢川が東流し、小規模な扇状地を形成する（第5図）。遺跡はこの扇状地の末端に位置し、地盤は周辺に比べやや高く、微高地状となっている。また南魚沼地域は日本有数の豪雪地帯であり、最大積雪量も2～3mに達し、積雪日数は年間130日前後である。この雪は山腹に雪崩地形を形成するだけでなく、融雪水が洪水や地滑りを引き起こし、地形にも少なからず影響を及ぼしている〔小林1977〕。

2 歴史的環境

北沖東遺跡・長表東遺跡は、魚沼丘陵から流れる庄之又川が形成した扇状地と鎌倉沢川が形成した扇状地に挟まれた低地に立地する。両遺跡の所在する南魚沼市を含む魚沼地方は、その地理的位置から古くから群馬県や長野県方面とも密接な関係を持っていた。そこで南魚沼市を含む魚沼川流域の旧石器時代から中世の遺跡を中心に概観する（第6図）。

旧石器時代の遺跡では上ノ台遺跡（1）（3）が確認できる。樹形山から延びる丘陵上に位置し、ブレード等が表採されている。

縄文時代の遺跡は多数確認でき、中でも中期～後期の遺跡が多い。縄文中期の魚野川上流域における遺跡分布については段丘上に立地すると指摘されているが〔高橋1992〕、縄文時代全般を通じても段丘上や丘陵上等に立地する傾向が認められる。皆沢川の氾濫原縁辺に立地する宮下原遺跡（4）は中期中葉～後期初頭の集落で、竪穴住居や敷石住居、埋喪等の遺構が検出された。土器は中期中葉～後期初頭のもので出土し、石器では磨石や打製石斧が目立つ。田川の形成する扇状地の末端に立地する柳吉新田下原A遺跡（5）では、竪穴住居や掘立柱建物、配石等が検出されるとともに、中期前葉～後期中葉の土器、磨石や打製石斧等の石器、線刻絵画のある粘板岩が出土している。中期前葉～後期中葉の集落と考えられる。また、飯上山の形成する扇状地端部に立地する五丁歩遺跡（6）は中期前半の環状集落である。出土した土器には関東系の製作技法を用いた土器があり、群馬県三原田遺跡等特に北関東との関連が指摘されている。このほかにも、信州や東北地方との関連をうかがわせる土器も出土した〔高橋¹³⁾1992〕。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	北沖東遺跡	古墳・平安・中世	10	鹿嶋山古墳群	古墳	19	二栗塚跡	奈良
2	長表東遺跡	弥生・古墳	11	名木沢古墳	古墳	20	宇沢七塚遺跡	平安
3	上ノ台遺跡 (I)	旧石器	12	乃良古墳	古墳	21	赤ノ木宮跡	平安
4	宮下原遺跡	縄文	13	跡塚1～4号墳	古墳	22	天池宮跡	平安
5	柳古新田下原A遺跡	縄文	14	余屋遺跡	縄・弥・古・平	23	天神南宮跡	平安
6	五丁歩遺跡	縄文	15	余田中道遺跡	古墳	24	坂ノ城跡	室町
7	治長寺遺跡	弥生	16	米沼西遺跡	弥生・古墳	25	神沢城跡	室町
8	水口遺跡	弥生	17	米沼東遺跡	弥生・古墳	26	大崎城跡	室町
9	鴫子山古墳群	古墳	18	長表遺跡	弥生・奈良～中世	27	跡田遺跡	室町

第6図 遺跡の位置と周辺の遺跡

弥生時代になると、遺跡数は縄文時代に比較して減少するものの、一部で縄文時代の遺跡と重複するものも確認できる。遺跡の立地では扇状地や低地部への進出が認められる。清長寺遺跡(7)では弥生土器数十点が、一水口遺跡(8)では弥生土器のほか玉類も表採されている。また長表遺跡(18)では栗林式土器が一定量出土している。

古墳時代になると、集落等の遺跡は弥生時代と同様、丘陵縁地の扇状地等に立地し、丘陵上や丘陵末端等には古墳が造営される。古墳の多くは群集墳である。中期以降、魚野川流域には古墳が造営され、新潟県内でも古墳の多い地域の1つとなっている。県史跡の蟻子山古墳群(9)は90基を超える古墳からなり、丘陵上に立地する。蟻子山古墳群と平手川を挟んで南側約1kmの丘陵上には飯綱山古墳群(10)が立地する。飯綱山古墳群からは、短甲や鏡、玉類が出土している。このほか名木沢古墳(11)・万貝古墳(12)・糠塚1～4号墳(13)は扇状地に、上山古墳・南山古墳群は丘陵先端に立地する。

蟻子山古墳群の立地する丘陵の裾部には金屋遺跡(14)が位置する。金屋遺跡は古墳前期～後期の集落で、竪穴住居等が検出された。また余川中道遺跡(15)では竪穴住居のほか、土器集中遺構が検出された。この土器集中遺構からは供献土器のほか石製模造品が出土しており、集落とそれに伴う祭祀場と考えられる。同様の状況は来清西遺跡(16)・来清東遺跡(17)でも確認できる。

古代の南魚沼市周辺は『和名類聚抄』によると、魚沼郡に当たる。魚沼郡には加瀬・那珂・苜上・千屋の4郷が確認でき、旧六日町～旧塩沢町は加瀬郷に相当する。古代の遺跡は扇状地とともに丘陵上にも分布する傾向にある。扇状地に位置する長表遺跡(18)では溝3条が検出され、遺物では土器や須恵器、木製品が出土した。遺物量に比して、墨書土器の割合が高い点が注目される。金屋遺跡(14)は竪穴住居や掘立柱建物¹が検出され、土器や須恵器とともに少量ながら灰釉陶器も出土した。丘陵上に立地する三蔵庵跡(19)は寺院跡の可能性がある。魚沼郡内の須恵器窯跡は魚野川左岸の丘陵部に寺尾七塚窯跡(20)・朴ノ木窯跡(21)・天池窯跡(22)・天神南窯跡(23)が確認できる。寺尾七塚窯跡(20)・朴ノ木窯跡(21)は丘陵裾部に位置し、7世紀末の須恵器が表採されている。また群馬系の杯蓋が認められる〔田村2002〕。天池窯跡(22)・天神南窯跡(23)は丘陵中腹に位置する。9世紀前半の須恵器が表採され、天池窯跡(22)では、杯の底部切り離し技法に糸切りとヘラ切りが見られる〔田村2002〕。

中世になると丘陵上や沖積地に城館が分布する。巻機山からの尾根が六日町盆地中央にのびた先端に位置する坂戸山には、国史跡坂戸城跡(24)が所在する。南北朝期、魚沼地方に勢力をもっていた新田氏を越後守護上杉氏が駆逐した後、上杉氏の家臣長尾氏が坂戸山を根拠とした。慶長3(1598)年、上杉氏の会津転封に伴い、堀氏が入城する。その後、慶長15(1610)年堀氏が高遠に転封となり坂戸城は廃城となった。現存する城郭施設は16～17世紀初頭に築かれたもので、丘陵のほぼ全域に分布する。坂戸城は丘陵上の城郭部分と丘陵西麓の居館部分からなり、石垣も残存している。また魚野川と登川の合流点から約2km魚野川本流を遡った丘陵上には、県史跡榊沢城跡(25)が所在する。榊沢城は坂戸城の支城としてその配下²が在番した。坂戸城や周辺の山城は越後と関東を結ぶ三国街道沿いに位置する一方、越後府中と三国街道を結ぶ峠道をおさえる位置にある。このほか魚野川と田川の合流付近、海山系からのびる丘陵上には大崎城跡(26)が所在し、南東側の丘陵下には大崎館跡が位置する。御館遺跡(27)は魚野川氾濫原の微高地に立地し、掘立柱建物や井戸枠を伴う井戸等が検出された。遺物は中世の陶器や漆器、中国陶磁器等が出土した〔池田1992〕。このほか三国川の流域に刑部屋敷跡、魚野川と登川の合流点付近に塩沢大館跡・木六館跡等が確認できる。

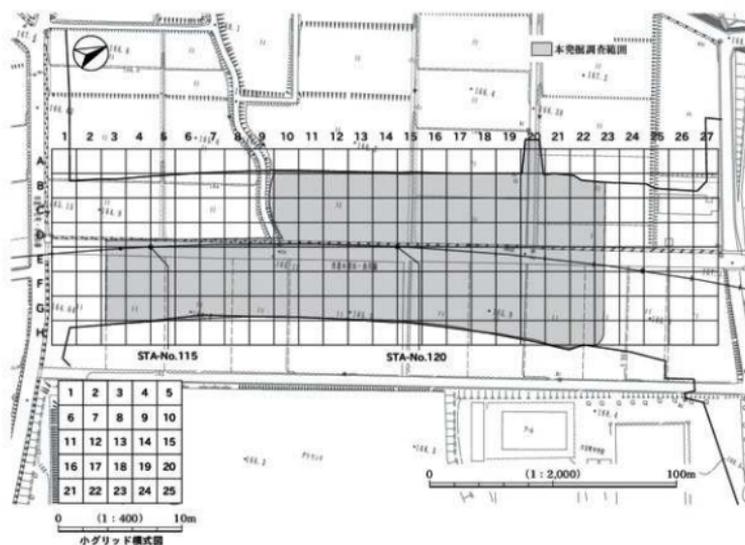
第三章 北沖東遺跡

1 調査概要

A グリッドの設定 (第7図)

グリッドの方向は、六日町バイパスの法線と一致するよう、センター杭を基準にしている。STA-NO.115 (5E杭, X=118179.910・Y=33041.755) を基点とし、STA-NO.120 (15E杭, X=118272.600・Y=33079.175) とを結ぶ線を南北軸、それと直交して基点を通る線を東西軸とする主軸を設定した。南北軸は真北から約22度東偏している。

この主軸を基に、1辺が10mの方眼を組み大グリッドとした。大グリッドは南北軸を南から北に算用数字順、東西軸を西から東にアルファベット順とし、両者の組み合わせで、例えば「16F」のように表示した。小グリッドは大グリッドを2m方眼に25分割し、南西隅を1(基点)にして算用数字順で表し、「16F25」のように大グリッド表示の後に付して呼称した。



第7図 北沖東遺跡 グリッド設定図

B 基本層序 (第8図)

遺跡は魚沼丘陵から流れる庄之又川が形成した扇状地と鎌倉沢川が形成した扇状地の間の沖積低地に位置する。現況は水田で、遺跡北東部の田面が標高約165.7mで高く、南に向かい徐々に低くなり、遺跡南部の田面は標高約163.4mである。遺跡は市道を挟んで2か所に分かれるが、市道の東側(六日町中学校側)と西側(魚沼丘陵側)では土層の堆積が異なるため、基本層序は一応区別しておく。なお、第1表に層序の対応を示す。

1) 市道東側

層序は以下に示す通り11層に区分できるが、I～III層は粘質土層、IV層以下は砂質土層、腐植物を含む粘質土層、シルト層が交互に堆積している。V層から上位で中・近世の遺物が出土する。遺物包含層は明確ではないがVI・VII層で古代の遺物が出土し、VI～VIII層で古墳時代の遺物が出土した。遺構確認はVII層、VIII層で行ったが、河川の氾濫等による土砂流入のため各層とも少量の遺物を含む。

- I a層：暗灰黄色粘質土 粘性あり。しまりあり。
- I b層：黄灰色粘質土 粘性あり。しまりあり。
- II層：黒褐色粘質土 粘性あり。しまりあり。炭化物を含む。灰白色土をブロック状に含む。
- III層：黄灰色粘質土 粘性あり。しまりあり。灰白色土をブロック状に含む。
- IV層：オリーブ黒色砂質土 粘性なし。しまりあり。
- V層：黒褐色粘質土 粘性あり。しまりあり。腐植物を多く含む。
- VI層：暗オリーブ褐色粘質土 粘性あり。しまりあり。炭化物を含む。古代の包含層。
- VI'層：青灰色シルト 粘性ややあり。しまりなし。
- VII層：灰色シルト質土 粘性なし。しまりあり。炭化物を含む。古墳時代の包含層。遺構確認面。
- VIII層：灰色砂質土 粘性なし。しまりあり。遺構確認面。
- IX層：オリーブ黒色粘質土 粘性あり。しまりあり。

2) 市道西側

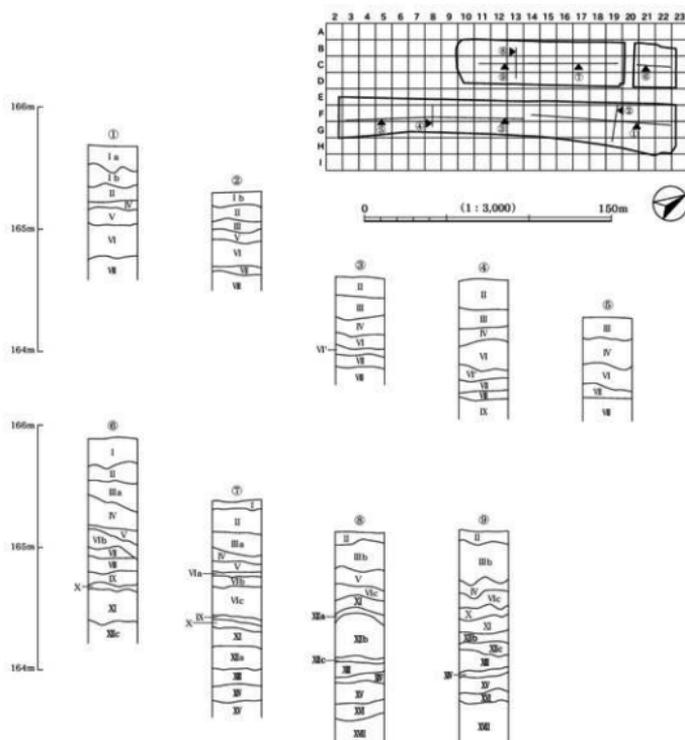
層序はさらに細分され22層に分けられる。包含層のVII・IX層は安定して堆積せず、南側では堆積しない。IV層以下では粘質土層とシルト層の互層となる。V～VI層とXII層以下は腐植物を多く含む。遺構確認面はXIII層である。

- I層：灰色土 粘性なし。しまりややあり。
- II層：黒褐色土 粘性なし。しまりややあり。
- III a層：黒褐色土 粘性ややあり。しまりややあり。
- III b層：黒褐色土 粘性ややあり。しまりなし。灰色シルトを少量含む。
- IV層：灰色シルト 粘性なし。しまりあり。灰色砂をやや多く含む。
- V層：褐色粘質土 粘性ややあり。しまりなし。腐植物を多く含む。
緑灰色粘質土をやや多く含む。
- VI a層：青灰色シルト 粘性なし。しまりややあり。腐植物を多く含む。
- VI b層：暗褐色粘質土 粘性ややあり。しまりあり。腐植物を多く含む。

市道東側	市道西側
VI層	VII層
VII層	IX層

第1表 北沖東遺跡 層序
対応表

1 調査概要



第8図 北沖東遺跡 基本層序

青灰色シルトを全体的にやや多く含む。

- VIc層：緑灰色シルト 粘性ややあり。しまりなし。腐植物を多く含む。
- VII層：オリーブ黒色土 粘性ややあり。しまりあり。炭化物を含む。古代の包含層。
- VIII層：灰色シルト 粘性なし。しまりややあり。灰オリーブ色砂を多く含む。
- IX層：灰色シルト 粘性なし。しまりややあり。黄褐色砂を多く含む。古墳時代の包含層。
- X層：暗緑灰色シルト 粘性ややあり。しまりなし。灰色シルトをやや多く含む。
- XI層：灰色粘質土 粘性あり。しまりなし。
- XIIa層：暗赤褐色粘質土 粘性ややあり。しまりなし。黒褐色粘質土を少量含む。
- XIIb層：暗赤褐色粘質土 粘性ややあり。しまりなし。腐植物を多く含む。
- XIIc層：褐灰色粘質土 粘性ややあり。しまりなし。腐植物をやや多く含む。
- XIII層：灰褐色粘質土 粘性ややあり。しまりややあり。腐植物をやや多く含む。遺構確認面。

- XIV 層：灰色粘質土 粘性ややあり。しまりややあり。
 XV 層：黒褐色土 粘性ややあり。しまりなし。腐植物を非常に多く含む。
 XVI 層：緑灰色シルト 粘性ややあり。しまりなし。
 XVII 層：黒褐色シルト 粘性なし。しまりなし。腐植物を非常に多く含む。

C 遺構・遺物の検出状況

1) 平成16年度調査

平成16年度調査では、古代（平安時代）の遺構確認面であるⅦ層と古墳時代の遺構確認面であるⅧ層の2面で調査した。Ⅶ層の調査では、調査区北よりの22列と中央部19F～16Gで川跡を検出した。流路は概ね南北または北西-南東方向を向く。またG列を中心に杭列の集中が見られた。杭列は治水・水利目的のものや畦畔に伴うものと考えられ、水田の存在が予想された。遺物は木製品（杭・弓等）のほか土師器（甕・椀）・須恵器（杯・杯蓋）が出土しているが、生産域の可能性もあり、出土量は少ない。Ⅷ層の調査では川跡と杭列が検出されたが、Ⅶ層のように北側には集中せず、全て20列以南の検出である。検出された杭列は川に伴うものであり、SD9の右岸15G3からは木製農具（50）も出土していることから、平安時代以前から既に水田を中心とした生産域だったと考えられる。遺物は土師器が少なく、木製品（農具・部材・杭等）、特に杭が多い。

2) 平成17年度調査

平成17年度調査では、古墳時代後期頃の溝・川跡、杭列、土坑、性格不明遺構等が検出された。特に市道東側の調査区11・12・13列で畦畔と水田跡と思われる遺構（05SX8・10・13）が検出され、生産域の可能性が高まった。杭列は畦畔や川跡に沿って検出されたり、川の分流地点に集中して検出された。南北方向に延びる列がほとんどであるが、11列では東西方向に延びる杭列も検出された。川跡は9・10列では東西方向に延びるが、8列以南では南北または北西-南東方向に延びる。遺跡の南端では5条の川跡が見られた。17年度調査では、16年度に検出されなかった土坑が2基、ビットが1基検出された。さらに8Fで検出された05SD9に架かる木道や、05SA5に関連があると思われる12Fで検出された杭で固定された部材のように、木を多用した遺構も検出された。遺物は古墳後期の土師器（甕・杯）・木製品（農具・杭等）が出土しているが、平成16年度調査と同様に土器の数は少ない。

市道西側の調査区では、農道より北の区域で溝2条、農道より南の区域で溝1条、杭列1基が検出された。遺物は腐植物層の中から土師器が出土したが、南へ行くにしたがって腐植物層の堆積が厚くなり、遺構・遺物ともに非常に希薄な状況であった。

2 遺 構

A 概 要

北沖東遺跡は試掘確認調査の結果にもあるように、明確な遺物包含層は確認しにくい状況である。その理由として、前述のように、河川の氾濫に伴う断続的な土砂の流入が続いたことが挙げられる。そのため、地点によっては少量の遺物を含む層が複数堆積する複雑な層序を示している。

平成16年度調査では、Ⅶ層を古代（平安時代）、Ⅷ層を古墳時代の遺物包含層とした。報告に際しても

古墳時代の遺物包含層までに検出されたIV～VII層検出の遺構と、古墳時代の確認面として考えられるVIII層検出の遺構に分けて扱う。検出された遺構数はIV～VII層では、川跡7条、杭列5条、性格不明遺構1基である。またVIII層では川跡が2条、川跡に伴う杭列が1条であった。川跡は一部が人為的に掘削されたと考えられるSD9（VIII層検出）を除き、ほかはすべて自然流路であると考えられる。流路は概ね南北もしくは北西-南東を向いており、当時の地形の様子が復元できる。杭列は水の流れに伴うと考えられるものと、畦畔補強に用いられたと考えられるものがある。出土土器から判断すると、遺構の時期はSD4が古墳時代、SD9・34が古墳時代後期、SD1が古代（平安時代）となる。

平成17年度の調査では、上層で近世の遺物を含む遺構が検出されたことや古代の遺構・遺物が希薄だったことから、VIII層の調査のみを行った。検出された遺構は溝4条、川跡11条、杭列5条、木道1基、土坑2基、ビット1基、性格不明遺構6基である。そのうち近世の遺構は溝1条（05SD4）、性格不明遺構2基（05SX2・3）で、それ以外は古墳時代後期の所産と思われる。16年度の調査と同様に川跡の流路は概ね南北、北西-南東方向を向くが、3条検出された溝（05SD1・6・24）は西-東方向を向く。

なお、遺跡は庄之又川の扇状地末端に立地し、遺跡周辺の標高は北西側が高く南東側が低いこと、平手川の旧流路も北から南に流れていたことから、今回の調査で検出された川跡も北から南、北西から南東に流れていたと推測する。

B 記述の方法

遺構の説明は溝・川跡、杭列、土坑・ビット、性格不明遺構の順に記載し、図面図版、写真図版も同様の順に掲載する。記述にあたっては、調査年度、遺構略号、遺構番号を組み合わせて示した（第9図）。遺構名は整理中に変更したものもあるが、遺構番号は検出順をほぼ反映している。平成16年度調査分の2つの検出面は、図面図版の全体図、分割図にも反映させ、本文中で検出層位を記載した。なお、杭列で木取りの記述の際に、自然木の先端を加工したものとして幹・枝と呼称しているが、便宜的に径が5cmを超えるものを幹、それ以下のものは枝として扱っている。

遺構の種類	略号
溝・川跡	SD
杭列	SA
土坑	SK
ビット	P
性格不明遺構	SX

遺構名の表記例
 05 SD 9
 ↑
 調査年度
 ↓
 遺構略号
 ↓
 遺構番号

第9図 遺構の略称

C 平成16年度調査

1) 川 跡 (図版2・7・9～12・38～42)

SD1 (図版3・4・40)

22G、22H、23GのVIII層で検出した。遺構精査の際、不整形のプランが広範囲に広がって川跡として扱うこととした。主軸は北側でN-10°-W、南側でN-45°-Wを指す。22Gと23Hの境界付近で川幅は狭くなり、そこから屈曲して主軸を変え川幅も広がる。排水用暗渠に左岸のほとんどが切られるため、全体の形状は不明である。断面形は残存している南西側を見る限り弧状で、立ち上がりは緩やかである。規模は長さ9m、22H10付近での深度は浅く4cm程度を測り、東側に向かうにつれて深くなる。底面は概ね平坦である。覆土は炭化物を含むオリーブ黒色粘質土で、覆土下位には白色砂粒の薄い堆積が確認できる。出土遺物には古代（平安時代）の土師器がある。

SD2 (図版3・4・41)

21G、21H、22Gに位置する。VIII層を徐々に掘り下げながら精査を繰り返した結果、溝状のプランを

確認した。主軸はN-25°-Wを指す。断面形は弧状を呈し、北端部分の立ち上がりは不明瞭であるが、そのほかでは緩やかである。底部はやや起伏がある。規模は長さ6.2m、幅1m前後を測る。深さは21G24付近が最も深く、22cmほどを測る。覆土は3層に分層され、1層は包含層由来の灰色粘質土、2層は暗緑灰色砂質土、3層はオリブ黒色粘質土である。1・3層には灰色や白色の砂粒を含む。北から南に延びるSA15（杭列）が、このSD2の周囲だけは検出されないことから、関連が想起される。

SD4（図版3・4・40）

22HのⅦ層で検出した。主軸はN-43°-Wを指す。断面形は弧状を呈する。流路はほぼ直線的で、長さは6.5m、幅は0.26～1.26mを測り、東に向かうにつれ幅が広がる傾向にある。深さは北西側で深く、東に向かうにつれて深くなる。平均すると10cmほどである。覆土は単層で、SD1と同様に、しまりのないオリブ黒色粘質土であり、黄褐色細砂を含む。出土遺物には古墳時代の土師器がある。

SD5（図版3・4・40）

22G、22H、23GのⅦ層で検出した。緩やかに東に湾曲する遺構である。検出時、北東側に隣接するSD4と同一の遺構かと思われたが、覆土の堆積状態が異なるため、それぞれ別の遺構として認定した。断面形は台形状に近く、立ち上がりは緩やかである。規模は長さ8.5m、幅はほぼ一定しており平均0.8m程度、深さは10cm前後を測る。覆土はオリブ黒色粘質土の単層で、1～5mmほどの炭化物粒子を含む。底部にはSD4と同様に黄褐色細砂の堆積が見られる。

SD6（図版6・7・40）

16G～19FのⅦ層で検出した。主軸はN-3°-Wを指す。覆土がⅦ層由来のため平面形の確認は困難で、精査を繰り返すことで南北に直線的に延びていくことが判明した。断面形は、上・中・下流とも弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。上・中流では底面にやや凹凸があるのに対し、下流部では平坦になる。規模は長さ36.5m、幅約0.5～1.7m、深さ8～12cmを測る。覆土は単層であるが、上・中・下流で覆土が異なる。上流はごく薄い緑灰色粘質シルトを層状に含む灰色粘質シルト（C-C）、中流はオリブ黄色砂をブロック状に含み、薄い炭化物層が見られる暗オリブ灰色粘質シルト（B-B'）、下流は灰白色中粒砂（A-A'）である。また上・中流には植物遺体が多量に含まれる。上流部19Fでは針葉樹の芯持材を加工した弓（21）が出土した。SD6の調査時には、上・中流の右岸にSA19、中流左岸にSA31が検出されており、関連があるものとする。出土遺物には木製品（21）がある。

SD20（図版3・4・41）

22GのⅦ層で検出した。北から南に緩やかに湾曲する遺構である。断面形は不整弧状を呈する。一部排水用暗渠に切られ全容は明らかでないが、規模は長さ約10m、幅0.3m前後で、深さは8cm前後を測る。覆土は灰色細砂を多量に含むオリブ黒色粘質土である。遺構内、あるいは左岸に沿うようにSA15（杭列）が検出されたが、杭先端の深度や残存する長さから、SD20との関連は否定できないものの、時期差があるものとする。

SD22（図版3・4・41）

22G、23GのⅦ層で検出した。主軸はN-33°-Wを指す。断面形は弧状を呈し、遺存する南西側の立ち上がりは緩やかである。南北方向に不整形プランをもつ遺構で、北側は調査区外に延び、また中央を排水用暗渠に切られるため全容は不明である。規模は長さ7.8m、幅1.2～1.7m、深さ22cmを測る。覆土は粘性、しまりのある黒褐色粘質土で、黄褐色細砂をブロック状に含む。

覆土の土質、覆土中に混入している黄褐色細砂の存在等から、SD1・4・5・22は同時期に形成され

たものと考えられる。

SD9 (図版10～12・41・42)

14G～19FのⅦ層で検出した。流路は19Fから南下して18F付近で幅広となり(上流)、17G付近では幅をやや狭め(中流)、16Gで再び幅を広げながら南西方向に屈曲し、15Gで分岐して一方は南西に、もう一方は南に向かう(下流)。主軸は上流から中流がN-3°-W、下流がN-37°-Eを指す。長さは南北方向が約38m、そこから南西方向に21mで、計59mを測り、遺跡の中では最も大規模な遺構である。なお流路のほとんどはⅦ層検出のSD6と重なり、比較的長い期間に渡ってこの地点に水の流れがあったことが分かる。

SD9は覆土の堆積状況や底面、川岸の状況等から上・中・下流でそれぞれに特徴をもつ。上流は左岸に杭列を伴う。幅は1.4～2.9mで、深さは18F15付近で74cmを測る。断面形は半円形を呈し、杭列を伴う左岸の方がやや急な立ち上がりを見せる(B-B')。底面は概ね平坦である。また18Fでは左岸を中心に、傾倒し横倒したと思われる杭が多数見られる。覆土は7層に分層でき、下層から粘質土、砂質土、粘質土が堆積し、下層では粘性が増し、水分含有量も多い。6層に見られるにぶい褐色粘質土もしくはオリブ黄色粘質土は、上・中・下流を問わず最下層部に見られる傾向がある。

中流は幅が狭まり1.4m前後を測り、南に直線的に伸びていく。断面形はV字状を呈し、底面は平坦で、立ち上がりは急傾斜である(F-F')。その掘り形から人為的に成形された可能性が高いと思われる。覆土は10層に分層され、上流の覆土と同様に上層は地山由来の粘質シルト、中層は細粒砂、下層は黄褐色または赤褐色の粘質土になる。

下流では再び拡幅し16G15～20付近(A-A')で約3m、最も幅の広い15G10～15付近(C-C')では4.7mを測る。そこから分岐する2本の支流は1.6～2m前後の幅になる。断面形は16Gで漏斗状、15G以南の分岐する流路はいずれも弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。底面は平坦で、分岐点以南は木製品の一部や流木が河床に散在する。また15G以南は地盤が軟弱で、覆土も地山も水分を多く含み、覆土と地山の判別がつきにくくなることから、一帯が沼地状を呈し常時湛水していた可能性もある。

以上、上・中・下流の特徴を述べたわけだが、特に中流は人為的に成形された可能性があり、人に管理された川としての機能が考えられる。出土遺物は古墳時代の土師器(1～3)で、底面付近から出土した。

SD34 (図版10・42)

20GのⅦ層で検出した。主軸はN-44°-Wを指す。東側と西側の平面形は不明瞭である。断面形は半円形に近い。規模は長さ7m弱、幅1.2～2.5mほどを測り、右岸の中央部付近には2本の杭が打ち込まれている。覆土は3～5cmの礫を多量に含む灰色砂を主体とする。出土遺物は古墳時代の土師器(4・5)で、覆土中位より下から出土した。

2) 杭 列 (図版2・3・5～10・43・44)

SA15 (図版3・5・8・43)

20G～23FのⅣ～Ⅶ層で検出した。22G周辺ではSD20左岸に並行して、21G以南では南北方向に直線的に配している。主軸はN-8°-Eを指し、長さは約48mを測る。杭の総本数は149本で、枝・幹の先端に加工を施したものが圧倒的に多く、全体の71%を占める。残存する杭の平均の長さは49.4cm、最長のもの130cmを測る。比較的残存長の長いものが多く、Ⅶ層上に50～60cm突き出しているものが目立つ。先端はV字状に加工されたもの、鉛筆状に加工されたものがほぼ同数で、上端は経年劣化

による摩耗が多く見られる。杭同士の間隔は一定せず、特に21Gでは間隔が密になり15～30cm。一方19Hでは疎になり100cmほどである。杭の先端部はⅦ～Ⅸ層に到達しており、長いものはⅨ層下まで打ち込まれている。

杭列全体を概観すると、その配列からSD20左岸の22G杭列群、SD2南西の21G杭列群、SA18にほぼ直交する19H杭列群の3群に分けられる。22G杭列群はSD20内に6本が打たれ、その他はすべて左岸に位置するが、先端部到達点の深度や形状から、SD20との直接的な関連性は低いと思われる。ただSA17がSD20の覆土と類似する灰色砂層に沿って打たれていることを考えれば、22G杭列群とSD20との関連を完全に否定することはできない。21G杭列群は、60～80cmの列間隔を保ち、南北に2列に並行して打設される。特に中央部は密集しており、西側に2列に飛び出すような形態となる。19H杭列群もやはり2列で並行し、列の間隔は80～110cmほどである。SA18と直交する形になるが、検出状況、残存状態からSA18よりも新しいと判断する。2列になっている部分は、溝もしくは用水路等の両岸に立てられた区画を示すもの、あるいは護岸をしたものとも理解できるが、詳細は不明である。なおSA15からは杭を2点図示した(22・23)。

SA17 (図版7・8・43)

14G、15G、16G、17HのⅤ層で検出した。主軸はN-40°-Eを指し、北東-南西方向にほぼ一直線に配している。杭の総本数は74本で、長さは約28mを測る。杭は残存長が40cm以下のものが63本あり、最長のものは69.3cmであるが、平均の長さは29cmと短い。径の小さい枝の先端を加工したものが多く、全体の47%を占める。残存状態が良好でないため、特に短いものは木取りが不明なものも目立つ。杭の先端部はⅦ層に到達する。杭の間隔はばらつきがあるが、概ね40～50cmである。

配置に着目すると、14G、15GではⅦ層で検出したSD9南側支流の左岸に沿って配置されることになるが、SD9とは検出面が異なることから、時期的な隔りがあると判断する。ただ14G、15G付近では、SA17検出の際に水流の痕跡と思われるごく薄い灰色砂の堆積が確認されていることから、水流があったと推測される。ほぼ一直線に延びていく杭の配置状況から、SA15やSA19と同様に、区画あるいは護岸の機能等が想定される。SA17からは杭を2点図示した(24・25)。

SA18 (図版5・8・43)

18F、18G、19G周辺のⅥ～Ⅶ層で検出した。杭は南東側に開くコの字型に打設される。周囲の長さは約33m、杭の総本数は156本である。全体的に杭は密集し、10～40cmの間隔で並んでいるが、北西辺と北東辺は一部2列に打設されており、列の間隔は約20cmである。

杭の木取りは角材の割合が最も多く、56%を占める。加工痕やほぞ穴が認められ、建築部材と思われるものの転用品や板材も杭に利用されている。平均の長さは62cm、残存するものうち最長のものは118.9cmを測る。Ⅶ層から突き出す上端部の残存長は10～20cm程度であり、折れた後に経年劣化による摩耗が見られる。先端はⅨ層もしくはその下まで打ち込まれている。杭の中には表面を焼いたと思われるものが50本ほどあり、耐久性を高めるための加工と思われる。表面を焼いた杭は、特に北側コーナーと西側コーナーに配される傾向にある。

この杭列の南東側部分では杭は検出されず、全容は不明であるが、形状等から畦畔を補強するための機能をもつ可能性が想起される。また17F、17Gでは、Ⅶ層からは偶跡目や人の足跡の可能性のある痕跡が検出され、17G北側では馬跡の歯部が3点(45～47)出土していることと合わせて、水田跡の可能性を示唆する。SA18からは部材2点(26・27)、杭6点(28～33)を図示した。

SA19 (図版6・44)

SD6右岸18F、19FのⅦ層で検出した。SD6にほぼ並行し、主軸はN-6°-Wを指す。SD6のプランを追いかけながら精査する際に検出した。杭の総本数は21本で、平均すると60～80cmの間隔で並び、長さは14mになる。残存する杭は半数が幹の先端に加工を施したもので、半数が断面形が長方形の角材である。平均の長さは43cm、最長のもは79.3cmで、打ち込まれている杭の傍らに、上端が折れ曲がり遺存するものが数本あるほかは、上端部分が欠損している。杭の先端はⅦ～Ⅷ層に到達している。SD6の右岸に位置し、SD6に並行することから、護岸の機能が想起される。SA19からは杭を1点図示した(34)。

SA31 (図版6・44)

SD6左岸17GのⅦ層で検出した。主軸はN-7°-Wを指す。SA18に近接して検出されたが、SA18とSA31は主軸が異なることから、別の杭列として扱った。長さ3mの区間に杭が6本打設され、割材と角材から構成される。杭の平均の長さは56.4cm、最長のもは72.5cmを測り、60～80cmの間隔で、1本を除き1列に並ぶ。杭の先端部は下層に位置するSD9の覆土内に到達する。時間的にはSD9より新しいと考えられるSD6に並行することから、SA19と同様にSD6の護岸の機能があると考えられる。SA31からは杭を1点図示した(35)。

SD9杭列 (図版10・11・44)

SD9上流部左岸16G、18F、19Fに位置し、Ⅶ層でSD9の精査とともに検出した。SD9との関連が想定されることからSD9杭列と呼称する。主軸は概ね南北方向を指し、SD9に並行して直線的に配される。杭の総本数は57本、残存長の長いものが多く、最長で159.8cm、平均54.5cmを測る。短いものでは枝もしくは幹を用いたものが目立ち、長くなるにつれて断面形が長方形の角材、または扇形の割材が主体になる。杭はSD9の左岸から20～30cm程度遺構内の河床に打たれている。間隔は一定しないが、概ね40～50cm間隔である。

残存している杭はSD9内側、すなわち西側に傾斜しているものが多く、特にSD9上流部では、傾斜しながらも遺存している上端部がすべて西側に倒れている。さらに18Fと19Fの境界付近では、川岸にあったと思われる立木が杭と同じ方向に倒れていることから、当時洪水等による東方向からの圧力が加えられた可能性が考えられ、SD9杭列の機能とも関連する可能性がある。SD9杭列からは部材1点(36)と杭4点(37～40)を図示した。

3) 性格不明遺構 (図版8・44)

SX3

17F3に位置するⅥ層検出の遺構で、排水用暗渠に北西側部分を切られ、全容は不明である。検出できた部分の平面形は不整形で、長さは152cm、幅は112cm、深さは5cmを測る。断面形は台形状で、立ち上がりは緩やかである。北側ではSX3に接するように部材の一部と見られる木製品とともに土師器片が出土している。覆土は2層に分層され、1層は炭化した樹木片を多数含む黒色粘質土、2層は白色砂粒の目立つ黒褐色砂質シルトである。遺構内中心部の地山は被熱し、調査区内では唯一火気使用の痕跡が明らかな遺構である。東側10mほどの距離にはSA18が位置し、SA18の杭の中に加熱により保存性を高めたと思われるものが多数見られることから、SX3との関連も推測される。

D 平成17年度調査

1) 溝・川跡 (図版15～20・46～48)

05SD1 (図版15・16・46)

9F, 9GのⅧ層で検出した。主軸はN-76°-Wを指す。主軸が南北方向から大きくずれることと直線的であることから、人工的な溝と考える。西端は05SK7に切られており、05SK7よりも古い。東側は9G13から調査区外へと続く。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ6.2m、幅47cm、深さ5cmを測る。覆土は灰オリーブ色砂粒を多く含む青灰色シルトの単層で、しまりはない。

05SD6 (図版15・16・46)

10E, 10F, 10GのⅧ層で検出した。10E23から南東方向へ延びるが、10F13で東へと曲がり10G13から調査区外に出る。主軸はN-75°-Wを指す。断面形は漏斗状で、長さ15.8m、幅120cm、深さ38cmを測る。覆土は6層に分層でき、1層が暗オリーブ灰色砂層、6層が緑灰色砂層で、2～5層はシルト層である。主軸が南北方向から大きくずれること等から人工的な溝と判断した。覆土の堆積状況から、3層まで堆積が進んだ時点で水流等の影響を受けて3層の中央部が削られ、その後埋没した可能性が考えられる。

05SD9 (図版16・18・46)

3Gから9EのⅧ層で検出した。9E21・22から南東に流れ、9F6で南よりに流路を変える。3G18で南西に曲がるが、3G13で再度南東に曲がって3G16・17から調査区外に出る。7F7で05SD16、5F15で05SD15、4F25で05SD17とそれぞれ分流するが、3G18では再び05SD17と合流する。全長は88mを測る。8F8(A-A')では幅205cm、深さ28cm、断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。覆土はオリーブ黒色粘質土の単層である。4G11(B-B')では幅32cm、深さ24cmを測る。断面形は台形状で、立ち上がりは緩やかである。覆土は3層に分層でき、1層には炭化物と腐植物を含む暗オリーブ灰色シルト、2層には腐植物を含む緑灰色シルト、3層には黒褐色シルトがレンズ状に堆積する。6G6から古墳時代後期の土師器(52)が出土した。同一個体の破片が周辺の包含層(6G6Ⅷ層)からも出土している。8F5・10では05SD9に架かる木道を、7F4から7F7では断続的に続く杭列を検出した。古墳時代後期の土師器(52)と部材(62)を図示した。

05SD15 (図版17・47)

5G, 5FのⅧ層で検出した流路である。5F15で05SD9から分岐する。主軸はN-28°-Wを指す。断面形は台形状で、立ち上がりは緩やかである。長さ6.3m、幅71cm、深さ20cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状に堆積する。1・2層は腐植物を、4層は灰色砂を含む。05SD9から分岐してすぐの位置に、楕円形で長さ2mほどの落ち込みが確認できるが、05SD4・15との切り合いが認められないことから、流出した水がここに溜まっていたものと考えられる。

05SD16 (図版17・47)

5G, 6G, 6F, 7FのⅧ層で検出した。7F7で05SD9から分岐し調査区外まで続く。長さは20.5mを測り、主軸はN-12°-Wを指す。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。分岐点付近では1mほどの幅があるが、南東方向に進むにつれて幅が狭まり、5G10(A-A')では幅39cm、深さ12cmである。覆土は2層に分層でき、黒色系覆土と灰色系覆土がレンズ状に堆積する。05SD9杭列が05SD16内の6F10まで延びる。6F20では2層から木製の農具(63)が出土した。

05SD17 (図版18・47)

3G、4F、4GのⅦ層で検出した。4F25で05SD9から分流し、3G18で再び05SD9に合流する全長16.8mの流路である。主軸は $N-3^{\circ}-W$ で、ほぼ真北を指す。分流直後の4F25では幅は38cmだが、3G5・10では幅が258cmに広がる。3G7・8(A-A)では幅232cm、深さ27cmを測る。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。覆土は5層に分層でき、レンズ状に堆積する。1～4層は腐植物を多く含み、2～4層には炭化物を含む。4層から杭(64)が倒れた状態で出土した。

05SD19 (図版17・47・48)

3Fから6EのⅦ層で検出した流路である。主軸は $N-6^{\circ}-E$ を指す。南端は3F16周辺で05SD20に合流する。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ31.6m、幅102cm、深さ24cmを測る。覆土は5層に分層できる。2～4層は灰オリーブ色粘質土と黒褐色粘質土の互層で、レンズ状に堆積する。2層と4層の黒褐色粘土には腐植物が多く含まれる。3層からは上端に楕円形の穴が開けられた部材(65)が倒れた状態で出土した。

05SD20 (図版18・47・48)

3E、3F、4E、4FのⅦ層で検出した流路である。主軸は $N-11^{\circ}-W$ を指す。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。3F3では北西からの流路と合流して川幅が広がり、幅206cm、深さ28cmを測る。長さは14.9mを測り、3F16では05SD19が合流する。覆土は6層に分層でき、レンズ状に堆積する。2・4層は砂層で、それ以外は粘質土である。

05SD24 (図版19・48)

22B、22CのXⅢ層で検出した。主軸は $N-74^{\circ}-W$ を指す。直線的な溝で、主軸が南北方向から大きくずれていることから、人為的に掘られている可能性が考えられる。東端は22C12で収束するが、西端は22B17で排水用暗渠に切られる。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ7.2m、幅183cm、深さ20cmを測る。覆土は2層に分層でき、1層は明黄褐色砂、2層はオリーブ灰色砂で、水平に堆積する。

05SD25 (図版19・48)

21D、22DのXⅢ層で検出した。主軸は $N-17^{\circ}-E$ を指す。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ11.8m、幅76cm、深さ16cmを測る。覆土は単層で、礫(径1～5mm)を多く含むオリーブ褐色砂が堆積する。

05SD26 (図版20・48)

18D、19C、19DのXⅢ層で検出した流路である。主軸は $N-14^{\circ}-E$ を指すが、18D10・15では西に向かって弧状に緩やかに曲がる。北端は19C20・25で、南端は18D12・13でどちらも排水用暗渠に切られる。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ16.4m、幅142cm、深さ13cmを測る。覆土は3層に分層できる。3層が遺構内に厚く堆積し、その上に1・2層が堆積する。1・3層は腐植物を含む黒色系や褐色系の粘質土、2層は緑灰色粘質土である。

2) 杭 列 (図版13～18・20・49・50)

05SA5 (図版13～16・49)

8F～13F、13GのⅦ層で検出した。主軸は $N-18^{\circ}-E$ を指し、長さ約56mを測る。Ⅶ層から10～20cmほど突き出している杭が多いが、確認面と同じ高さで検出されているものもある。杭の総本数は

198本である。木取りは枝・幹・割材・角材の4種類で、40cm以下では枝が非常に多いが、40cmを超えると割材・角材が圧倒的に多くなる。杭全体に占める割合も割材が40%、角材が29%と多い。最長のものは149.5cmだが、100cmを超えるものは全体の11%で、80cm以下のものが78%を占める。

13F、13G周辺では、杭列の形態は明確ではなく、05SX10内や05SX13の東側に沿って散らばるようになり打ち込まれている。杭と杭との間隔は疎らである。

12Gから10Gの間は杭列が明確になり、杭と杭との間隔も狭くなる。複数の杭が並行して打ち込まれている地点も見られ、最も狭い部分では5cm以下である。西隣の12Fから10Fでも杭列は検出されたが、12Gから10Gまでで見られる杭列に比べ、総延長は短く杭と杭との間隔も広い。

05SA5は10Gで一旦途切れるが、9Gの05SD1南側から列が明確になる。しかし10G以北に比べると杭と杭との間隔は疎らである。杭列は南に延び、8F23で収束する。

9G2では2本の杭が並行するように打たれ、その杭と杭の間に長さ72cmの木材を挟む形で検出した。木材は杭列と主軸を同じくし、2本の杭の間から半分ほど北側にとび出していた。また杭列の西側にも長さ37cmの木材が検出されている。どちらの木材にも加工された痕跡はなかった。木材の南側にもあと3組、並行に打たれた杭が並ぶが、その間には木材は挟まれていない。さらに8G4・5では、杭と杭の間に斜めに挟まるように板材を検出した(図版16)。杭と杭の間は84cmの間隔があり、長さ182cmの板材が北側の杭と南側の杭の間に斜めにはめ込まれるように置かれていた。この木材・板材はまっすぐな材で、杭列と主軸がほぼ同じである。この杭列及び板材・木材の北側には05SD1が確認されているが、杭列と溝の主軸が異なるため、直接関係するものではないと考える。また、南側にも05SX27が確認されているが、杭列と主軸が異なり、また05SX27の時期が新しい可能性があるため、やはり直接関係はないものと思われる。以上から、板材を立てて杭で固定していたことが想定され、また05SA5北端が水田跡の可能性のある05SX10と05SX13の間にまで延びることから、杭列、9G2で検出された木材、8G4・5で検出された板材は、畦畔に関連する施設である可能性が考えられる。ただ、畦畔と判断できる遺構は8G、9Gでは検出されていないため、推測の域を出ない。

また05SA5の12Fから10Fに位置する杭の一群の中に、杭列に南北を挟まれるように、長さ168cm、幅36cmの丸太を杭で固定したものが検出された(図版14)。丸太は側面が2か所削られて円柱状の穴が開き、本体も2か所削り貫かれて穴が開いていた。その穴にはいずれも長さ30cmほどの杭が打ち込まれていた。また杭は打ち込まれていなかったが、側面が削られた部分が2か所確認できた。ここにも杭が打ち込まれて、丸太を固定していたものと思われる。さらに丸太本体の南よりの部位で、貫通はしていなかったが、直径5cmほどの丸く穿たれた穴が1か所と直径2cmの丸く穿たれた穴が4か所確認された。中央部では東側に長さ20cm、幅16cm、西側に長さ8cm、幅4cmほどの削られた痕跡が認められた。削られた凹みはきれいに成形されていない。転用材の可能性がある。丸太の周囲には6本の杭が打ち込まれ、北側の杭は24cmの間隔で05SA5と連続し、南側は90cmの間隔で05SA5と連続する。周辺の遺構は05SA5だけであるが、南側の間隔が北側に比べて広いことから、この05SA5に伴うかどうかは断定することができず、この丸太の機能も不明である。出土遺物では杭を12本(66～77)図示した。

05SD9 杭列(図版17・49)

6F、7FのⅦ層で、05SD9内や05SD9と05SD16との分岐点。さらに05SD16の東側や05SD16内で総延長3.8mの杭列を検出した。杭列の主体は05SD16付近に集中するが、最初に検出された杭が05SD9内であったため、05SD9に関連する杭列として扱った。杭は05SD9右岸や05SD16左岸、

05SD16内に分布する。05SD16は05SD9から分岐した後、南東に流れを変えるため、水流の影響を受けやすい。そこで、05SD16の左岸(東岸)に集中して打ち込まれたものと思われる。杭の総本数は39本である。そのうち、21～40cmの杭が8本、41～60cm、61～80cm、81～100cmのものは各9本と様々な長さの杭を平均して使用している。100cmを超えるものは全体のうち4本しかない。木取りの方法では割材と角材合わせて74%であり、ほかの杭列に比べて枝や幹の割合が少ない。

05SD22杭列 (図版18・50)

05SD22は3F、4FのⅧ層で検出した。覆土は単層で、黒褐色シルトが堆積する川跡である。この川跡を検出した4F13から3F15まで、05SD22の左岸に沿って杭列を確認した。杭の南端から3本は05SD22内に打ち込まれている。総本数は20本で、角材60%、割材20%、幹・枝が各10%という割合である。100cmを超える杭はなく、20cm以下のものは枝材の1本だけで、大部分が20～100cmの杭である。出土遺物では杭を3本(78～80)図示した。

05SA28 (図版20・50)

18C、18DのⅨ層で検出した。主軸はN-86°-Eを指す。長さ約5.5mを測り、杭の総本数は28本である。西側では杭の間隔が狭くなっているが、東側ではやや広くなっている。杭の長さは20～40cmのものが7本と最も多く、次いで41～60cmのものが5本となる。05SA5や05SD9杭列と比較すると、全体的に短い杭が多く用いられている。木取りは枝・幹・割材・角材の4種類である。枝・幹・割材は80cm以下がほとんどだが、幹で136.8cm、割材で101cmのものが各1本ずつ含まれる。角材は19.5cmから139.7cmまで様々な長さがあり、本数も8本と最も多い。

3) 木 道 (図版16・50)

05木道11

8F5・10で05SD9に架かる木道が検出された。西側は、岸の部分に05SD9と並行になるように長さ30～50cmの木材が10本ほど並べられている。その上に05SD9と直交するように長さ90～200cmの横木を3列に並べて道の部分が造られている。木材と木材の間等には杭が打設され、横木等を固定している。横木に使われている木材は自然木がほとんどだが、杭の転用材(81)が1本含まれる。東側は横木が05SD9と直交せずやや北よりにずれていたが、岸近くに横木の下に敷かれていたと思われる長さ30～40cmの木材が数本認められ、横木を固定していたと思われる杭も立った状態で検出された。このことから、当初は両岸に木材を並べ、地面より一段高いその上に横木を渡して木道が造られていたが、湛水等により損壊したものと思われる。木道にともなう05SD9から古墳時代後期の土師器(52)が出土したことから、木道の時期も古墳後期と考える。出土遺物では横木(81)と杭(82～85)を図示した。

4) 土 坑 (図版16・18・50)

05SK7

9F17・18のⅧ層で検出した。平面形は不整形で、断面形は弧状を呈する。長さ163cm、幅88cm、深さ38cmを測る。覆土は3層に分層でき、1・2層は灰色シルト、3層は暗灰色リブ灰色シルトである。3層とも少量の腐植物を含み、レンズ状に堆積する。9F23で05SD1を切ることで、05SD1よりも新しい遺構である。

05SK18

4F20・25のⅦ層で検出した。平面形は不整形、断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ108cm、幅72cm、深さ21cmを測る。覆土は3層に分層でき、1層は暗オリーブ灰色シルト、2層は黒褐色シルト、3層は暗オリーブ灰色砂である。1・2層に炭化物を、2・3層に底植物を含み、レンズ状に堆積する。

5) 性格不明遺構 (図版13・14・51)

ここでは、水田跡の可能性のある05SX8・10・13について記述する。この3遺構は11F～14GのⅦ層で検出した。覆土はいずれもオリーブ黒色粘質土を含む灰オリーブ色粘質土の単層である。05SX8・10・13を水田跡とすれば、これらの遺構の間は幅約1.2mを測る2本の並行な畦畔となる。主軸はN-12°-Eを指し、川跡の主軸と概ね符合する。05SX10・13の間からは古墳時代後期の土師器(59)が出土した。

05SX8

11F～14Fに位置する。平面形は不整形、断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ26m、幅5.2m、深さ10cmを測る。南東側は05SD4(近世の所産)に切られる。11F3・8には東西方向に延びる05SA12(杭列)が位置し、05SX8との関連が想定される。14F3からは木製農具(86)が出土した。

05SX10

11G～14F、14Gに位置する。平面形は不整形、断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ27m、幅10m、深さ13cmを測る。05SX8・13に比べ、面積が広い。遺構内には05SA5に関連する杭が散在するが、13F21から13G5では列として確認することができる。

05SX13

12F～14Fに位置する。平面形は長方形、断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長さ18.6m、幅3m、深さ14cmを測る。南端は12F22で05SD4(近世の所産)に切られる。12F23から05SA5に由来する杭列が明確になり、05SX13の東側に沿って南へ延びる。

3 遺 物

A 平成16年度調査

1) 概 要

出土した遺物は古墳時代後期(6世紀前半)と平安時代(9世紀後半～10世紀初頭)のものが主体で、少量中世(14世紀代)のものがある。その種類は土器・木製品・銭貨である。土器は古墳時代・平安時代等平箱で6箱、点数にすると約110点と少ない。木製品は容器、農具、用途不明の部材等があるが、最も多いのは杭列に使われていた杭で約460本ある。

2) 土 器 (図版21・52)

古墳時代

遺物が出土した遺構は、SD4・9・34のみである。このうち、SD9とSD34出土の土器を図化した。

SD9 (1~3) 1・2はSD9の底面に近いところから出土した。1は土師器の杯で、内湾する体部から口縁部が外側に屈曲する。調整は内外面にヘラミガキが施されている。2は内面黒色処理された高杯の杯部と考えている。内湾する体部に口縁部が外側にのびる。3は小型壺で、調整は底部下位でヘラケズリが施され、上位はハケメ調整後磨かれている。内面はヘラケズリが施されている。いずれも古墳時代後期前半の所産である。

SD34 (4・5) SD34は自然流路で、その覆土の中位から下位で出土した。4は内面黒色処理された杯で、口縁部が外側に長く屈曲する。調整は内外面にミガキが施されているが、口縁部の屈曲部にハケメ痕を残す。5は土師器の壺の口縁部と考えている。調整は内外面ともハケメ調整後磨いている。いずれも古墳時代後期前半のものと考えられる。

包含層 (6~11) 6は内面黒色処理された高杯の脚部である。7は土師器の杯で、須恵器の杯を模倣したタイプである。内湾する体部に口縁部が外側にのびる。8は土師器の壺で口縁部が「く」の字に屈曲し、底部は平底である。調整は内外面にミガキが施されている。9は土師器の甕で、口縁部が屈曲して直線的に開く。調整は外面にヘラケズリを、内面にヘラナデを施している。10は土師器の甕で、体部から口縁部が「く」の字に鋭く屈曲する。底部は平底である。調整は外面にヘラケズリ後ミガキを施している。11は土師器の甕で、口縁部が「く」の字に屈曲する。底部は平底である。調整は、外面がハケメ痕を残している部分が多いが、一部磨かれているところもある。内面はヘラナデを施している。8~11は古墳時代後期前半のものと考えられる。

平安時代

遺構から出土したものには、SD1出土の土師器の椀があるが、細片のため図化しなかった。図化したものはすべて包含層出土のものである。12は須恵器の杯蓋で、13は有台杯である。いずれも色調が灰白色で焼成は良くない。ともに9世紀前半のものと考えられる。14は土師器の椀である。厚手のつくりで、胎土の粒子が粗い。15は土師器の椀で、体部に墨痕が見られる。破損して判然としなが「しししカ」とあり、習書の可能性がある。16は土師器の椀で、底部に「人カ」と墨書が記されている。14~16は9世紀後半のものと考えられる。

中 世

17は中世の珠洲焼の甕で、珠洲焼編年〔吉岡 1994〕のIV期(14世紀前半)に位置づけられる。18は青磁碗の底部片で、14世紀後半から15世紀初頭の時期のものと考えられる。高台内面まで軸がかかっている。

3) 銭 貨 (図版21・52)

銭貨は2点出土した(19・20)。19・20はともに北宋の皇宋通寶で、初鑄年は1038年である。

4) 木 製 品 (図版22~24・53~55)

木製品は512点出土した。その大部分は杭で、472点出土した。これ以外は無台盤1点(44)、ナスビ形農耕具1点(50)、馬蹶の歯部3点(45~47)、弓1点(21)、部材と考えられるもの34点である。

遺構出土

SD6 (21) 21は長さ69.8cmの短弓で、完形である。弓弦(弦を張る部分)は張り強度を増した弦かけを可能にするため、凸形を呈する。芯持材を用いている。

SA15 (22・23) 22・23は杭であり、22は幹、23は角材を利用する。23は上端を欠損する。

SA17 (24・25) 24・25は杭であり、2本とも角材を利用するが、断面は24が八角形、25は不整形四角形である。25は上端を欠損する。

SA18 (26～33) 26は孔のある板状の部材である。上端部付近に孔は2か所開けられているが、片側の孔周辺が欠損する。幅の広い部分は6.2cmを測り、途中で幅を狭め曲線状に加工され、輪部のような形状となる。27も部材で、幹を半円に分割した芯持材を使用している。上端を4方向から削り、尖端を作出する。上端から12cmのところに長方形の孔が開けられている。断面は板状を呈するが、欠損している下端側に向かうほど半円状となり、厚みを増す。28～33は杭で、すべて角材を利用する。28・29は中央付近に欠込のような加工が施されており、転用材と考えられる。

SA19 (34) 34は杭である。角材を使用し、断面形は五角形である。下端の形状はV字形に加工されている。上端を欠損する。

SA31 (35) 35は杭であるが、中央付近上部に継手の相欠の接合跡が確認できる。転用材であろう。上端を欠損する。

SD9 杭列 (36～40) 36は上下端に2か所長方形の孔を開けた部材である。37～40は杭である。すべて角材を利用する。断面形は37・38が四角形、39が五角形、40が六角形である。

包 含 層 (41～50)

41～47はⅥ層出土である。41・42は、41の2か所確認できる孔のうち、上部の孔に42が接した状態で検出された。41の孔に42の上端が接合されていたと考えられる。41は上端が欠損し、下端は孔部より下側を欠損する。42の下端はV字形に先端が作出されており、杭状を呈する。43の部材には3か所の孔があり、孔に沿って直線的に鍋蓋状の突出部が設けられる。板状ではあるが、厚みは一定ではなく、中央部が厚い。44は挽物の無台盤で、口径22.3cm、器高2.0cm、底径16.0cmを測る。底部は平坦に加工され、台部の痕跡はみられない。全体の約2/3を欠損する。45～47は馬蹴の歯部である。全長が30.9～32.8cm。最も短い47は30.9cmを測るが、歯部先端を欠損するため3本はほぼ同じ長さであったと考えられる。45・46の先端は欠損してはいないが、摩擦痕がみられる。台木との接合を強固にするために、上端部には楔を打ち込む割れ目が設けられている。

48・49はⅦ層出土である。48の板状の部材には3か所の孔が確認できるが、そのうち2か所は割れて欠損する。右側面も欠損し、形状は不明である。左側面の上部は緩やかな弧状を呈し、下部はほぼ直線的となる。49の部材は裏面が平坦なのに対し、正面は緩やかな膨らみをもつ。上端部は凸形に加工されており、凸部の先端幅が扇状に広がっている。蠟継と呼ばれる加工方法により、接合されていたと考えられる。50はⅦ層出土のナスビ形農耕具である。着柄軸部の端には柄部との接合ずれを防ぐ段差を設けている。また刃部の両側縁が直線的に伸びる。



第10図 ナスビ形農耕具の部位名称

B 平成17年度調査

1) 概 要

出土した遺物は弥生時代後期・古墳時代・近世のものがある。近世の遺物は陶磁器で平箱2箱分出土したが、以下では扱わない。土器は弥生時代後期・古墳時代のもので、平箱1箱分出土した。木製品は農具・杭・用途不明の部材等で、特に杭は400点と出土数が多い。また木製農具は5点出土し、平成16年度に1点、平成15年度試掘調査でも1点出土しており、本道跡から合計7点出土したことになる。木製品の所属時期はその多くが古墳時代のものと考えられる。

2) 土 器 (図版25・56)

弥生時代

XV層から1点出土した(51)。51は弥生時代後期の甕で、頸部には櫛櫛の簾状文、口縁部と体部上半には波状文が施される。口縁部はやや肥厚し、端部は内側に向かって傾斜する。内外面とも炭化物の付着が顕著である。

古墳時代

05SD9(52) 52は05SD9出土の破片と6G6VI層出土の破片が接合した。6G6・7VI層からはややまとまって土器が出土しており、53～55も6G6・7VI層出土である。52は古墳時代後期前半の小型甕である。口縁部は肥厚し、体部にはやや張りがある。底径は6.6cmとやや大きい。口縁部にはナデ、体部外面には縦方向のハケメが施される。

包含層(53～59) 53～57はVI層から出土した。そのうち53～55は6G6・7でややまとまって出土している。53は古墳時代後期の甕で、直線的で張りのない体部からわずかに外傾して口縁部にいたる器形となる。体部下位には不鮮明な種が認められ、この部分で一度成形を中断している可能性が考えられる。調整は外面がナデ・ハケメ、内面下半がケズリ、上半がナデである。54～57は内面黒色処理された土師器の杯で、古墳時代後期前半の所産である。いずれも内湾する体部から外側に屈曲して口縁部にいたる器形であるが、55は屈曲がやや強く、54・57は弱い。また54は身が深く、55は浅い。調整は内外面にヘラミガキが施される。

58・59はVII層から出土し、器種はともに甕である。58の口縁部はコの字状に近く、調整は外面がケズリ・ナデ、内面がナデである。古墳時代前期後半の所産と考える。59は水田の可能性のある05SX10・13の間から出土した。古墳時代後期頃の甕で、底径が7.1cmとやや大きく、器形は体部から緩やかに外傾して口縁部にいたる。59も53同様体部下位に不鮮明な種が認められ、この部分で一度成形を中断している可能性がある。

平安時代

60・61はVI層から出土した。60は須恵器の有台杯で、焼成は不良である。9世紀前半の所産と考えられる。61は土師器の無台碗で、9世紀後半に位置づけておく。

3) 木 製 品 (図版25～28・56～59)

木製品は427点出土した。その大部分は杭であり400点を数える。これ以外では、ナスビ形農耕具4点(63・86～88)、鍬身1点(89)、柄1点(90)、横槌状の木製品1点(100)、部材20点である。

遺構出土

05SD9 (62) 62は部材である。下端側を長さ14.5cmにわたり削り取り、半円状に加工している。径は8.6cm、長さ82.7cmで上端を欠損する。下端の形状から建築用の垂木に類似する。

05SD16 (63) 63はナスビ形農耕具である。笠部から軸部を欠損する。出土したナスビ形農耕具の中で唯一軸部に方形の柄装着孔が確認できる。表面に丁寧な削痕がみられる。

05SD17 (64) 64は杭で、幹を使用する。主に正面下端を削り出し、先端部を作成する。

05SD19 (65) 65の部材は上端が幅広く、下端に向かい徐々に幅が狭められ、下端は上端の約1/2の幅となる。杭形ではあるが、表面は丁寧に削り出されている。また上端平坦部に楕円形の孔が開けられている。

05SA5 (66～77) 05SA5からは多数の杭が検出され、そのうち12本を図示した。木取りは多様で、66・71～73は割材、67～70は角材、74・75は枝材、76・77は幹を使用している。

05SD22 杭列 (78～80) 78～80は杭で、いずれも角材を利用するが、78・79は厚さが薄い。またいずれも上端を欠損する。

05木道11 (81～85) 81は下端が削られ杭であることが分かるが、木道の横木として転用されていた。長さは157.5cmを測る。82～85は杭である。いずれも角材を利用し、木道の横木部分を固定するために使用されていた。木道の両端部と中央部に打ち込まれていた。

05SX8 (86) 86はナスビ形農耕具である。左側面の笠部を欠損する。笠部下のくびれから幅を増し、刃部の途中で屈曲し刃縁に向けて幅を減している。この形状のナスビ形農耕具出土例では鉄製刃先を装着するものが多いようであるが〔上原1993〕、装着痕は確認できない。

包含層 (87～102)

87・88・90・91はVI層出土で、89も排土出土であるが、VI層出土の可能性が高い。87はナスビ形農耕具である。刃部の両側面が直線的に長くのびる。左側面の笠部と刃縁部を欠損する。88は軸部が欠損しているが、刃部の形状から87と同様のナスビ形農耕具と推測される。刃部の両側面が直線的に長くのびる。89も農具である。ナスビ形農耕具とは明らかに異なる形状であり、直柄平鎌かと推測される。左側面上端に円形の柄装着孔が確認できる。装着孔より左側面の刃部は欠損する。90は柄である。柄の下端部には突起が作出される。柄は直線的で細く、楕円形に加工され、握りやすいようになっている。91は部材で、両端を欠損する。ほぞ穴が4か所確認できる。

92・93はVII層出土の杭である。枝を使用する。3方向から削り先端を作成し、表皮を残す。94～97はVIII層出土である。94～96は杭である。95は枝を利用し、2方向から削り、先端を作成する。表皮は剥がされている。94は角材、96は割材を使用している。94は上端を、96は上下端欠損する。97は部材で、両端を欠損する。ほぞ穴が3か所穿たれている。98もIX層出土の部材で、出土した木製品の中で最も長く、417.5cmを測る。上端に大きなほぞ穴が開けられている。下端部は欠損するが、上端部と同様にほぞ穴が穿たれていたと推測する。下半には貫通しない長方形の孔が縦列に4か所確認できる。99はXVII層出土の部材で、木材の節の膨らみ部分を残している。3か所にほぞ穴が開けられており、上下端は欠損する。

100～102は表土剥ぎ時に出土した。100は横槌に類似するが、欠損部分があり判別できない。角材を削り軸状の上半部を作成する。101の部材は角材で、表面をきれいに加工している。102の部材も角材である。101の部材の出土地点と近いところから検出された。孔が1か所穿たれている。

第IV章 長表東遺跡

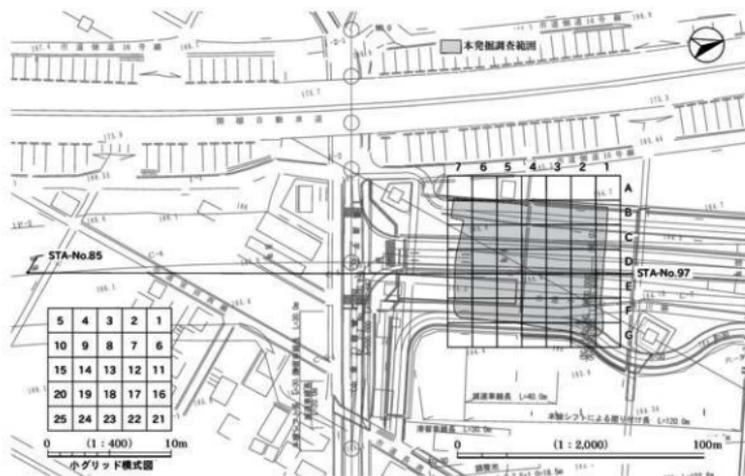
1 調査概要

A グリッドの設定 (第11図)

グリッドの設定は、六日町バイパス建設予定地内のセンター杭2本を基準に行った。まず調査区外南側にあるSTA-No.85「世界測地系X=117945.793, Y=32628.806」と調査区内のSTA-No.97「世界測地系X=118182.147, Y=32669.188」を結び、これをX軸とした。そしてSTA-No.97を通り、X軸と直交するラインをY軸とし、10m四方の大グリッドを設定した。大グリッドは北から南へ算用数字、西から東へアルファベット大文字を付し、両者を組み合わせて「3D」のように呼称した。小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割し、大グリッドの北西隅を1、南東隅を25となるように設定し、「3D20」のように呼称した。調査区の座標は4E杭が「世界測地系X=118162.433, Y=32665.820」となる。真北はX軸から約9.4度東偏する。

B 基本層序 (第12図)

遺跡は庄之又川の扇状地と鎌倉沢川の扇状地の間の低地部に立地し、調査区の地形は西側から東側へと緩やかに傾斜する。基本層序は13層に分層した。Ⅲ・Ⅶ層を除き、比較的安定した堆積を示す。Ⅴ～Ⅶ層が弥生時代から古墳時代の遺物包含層に相当するが、遺物が主体的に出土するのはⅤ層で、Ⅵ・Ⅶ層からの出土は少ない。またⅩ層が弥生時代から古墳時代の遺構確認面となる。以下に基本層序を示す。



第11図 長表東遺跡 グリッド設定図

- I 層：青灰色砂質土 粘性ややあり。しまりあり。礫（径3～5mm）を少量含む。
- II a層：暗青灰色砂質土 粘性ややあり。しまりあり。炭化物をまばらに含む。礫（径3～5mm）を少量含む。
- II b層：灰色粘質土 粘性ややあり。しまりあり。灰褐色砂・黒褐色土をまばらにやや多く含む。
- III 層：灰色粘質土 粘性あり。しまりあり。オリブ黄色砂をブロック状に含む。
- IV a層：黄褐色砂礫土 粘性なし。しまりあり。炭化物をごく少量含む。青灰色シルトを層状に含む。
- IV b層：褐灰色砂質土 粘性あり。しまりややあり。炭化物を少量含む。
- V a層：褐灰色土 粘性あり。しまりあり。オリブ褐色砂を全体的に多量に含む。弥生～古墳時代の遺物包含層。
- V b層：灰色粘質土 粘性あり。しまりあり。弥生～古墳時代の遺物包含層。
- VI 層：灰色シルトとオリブ黄色砂の混合土 粘性ややあり。しまりなし。弥生～古墳時代の遺物包含層。
- VII 層：褐灰色粘質土 粘性あり。しまりあり。炭化物を少量含む。弥生～古墳時代の遺物包含層。
- VIII 層：暗青灰色粘質土 粘性あり。しまりあり。炭化物を少量含む。
- IX 層：灰白色粘質土 粘性あり。しまりややあり。弥生～古墳時代の遺構確認面。
- X 層：オリブ褐色粘質土 IX層が酸化した層。

C 遺構・遺物の検出状況

遺構は溝・川跡、杭列、土坑、ピット、性格不明遺構が検出され、農道の西側にまとまる傾向がある。溝・川跡は農道西側で5条検出されたが、いずれも規模は小さい。土坑・ピットは溝・川跡周辺で検出された。農道西側で標高がやや高い遺跡の微地形を反映したものであろう。農道西側に比べ、約40～50cm標高が低い東側ではほとんど遺構は検出されなかった。

遺物は主に弥生時代から古墳時代の土器が出土したが、出土したのは遺跡北西側の遺構や包含層からで、その他の調査区域での遺物の出土は希薄であった。

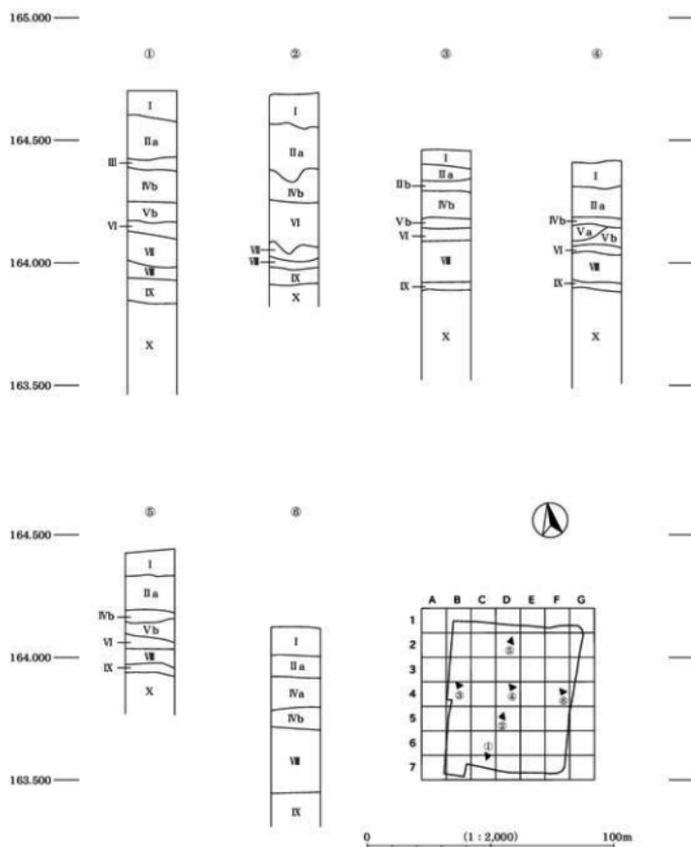
2 遺 構

A 概 要

調査区は現地表面から遺構確認面までの深さが西端で1.2m、東端で1.6mあり、砂質土や粘質土が堆積している。IV～VII層には部分的に腐植物も含まれ、扇状地末端部の様相を呈している。IX層の標高も西端で163.92m、東端で163.48mと高低差があり、西から東に向かって傾斜している。

検出された遺構は溝・川跡5条、土坑5基、ピット8基、杭列1基、性格不明遺構3基である。遺構は標高の高い農道の西側に集中する。南西側の調査区では7基の遺構を検出したが、全体的に規模が小さい。また排水用暗渠に切られる等、全体像が分かりにくい。北西側の調査区では大規模な土坑や長い溝が検出されている。また、ピット7基と土坑1基が集中して検出される等この周辺の遺構数は14基を数える。農道の東側では杭列が1基検出しただけで遺構は極めて少ない。

遺構の時期については、出土土物から判断して、SD18が弥生時代後期、SD9・SK7・P11が古墳時代前期である。



第12図 長表東遺跡基本層序

B 遺構各説

1) 溝・川跡 (図版30～34・60・61)

SD3 (図版34・60)

6B20・7B16に位置し、Ⅸ層で検出した。主軸は $N-14^{\circ}-E$ を指す。断面形は半円状を呈し、立ち上がりはやや急である。SD3以外の川跡と思われる遺構の主軸は $N-30^{\circ}\sim 70^{\circ}-E$ で、北東方向に偏るが、SD3の主軸は東への振れ幅が小さく、北よりである。また断面形も川跡と思われる遺構は弧状を呈するのに対して、SD3は明確な半円状である。このことから、SD3は人工的に造られた溝と判断した。

7B16で幅42cm、深さ26cmを測る。南端は排水用暗渠に切られており、検出された部分の長さは2mである。幅80cmの暗渠を挟んでその南側からは、SD3から続くプランが検出されなかった。そのため実際の長さは2mから2.8mの範囲内と考えられる。覆土は3層に分層でき、いずれも灰色系覆土が堆積する。1層は腐植物を多く含む。遺物は出土していない。

SD5 (図版34・60)

5D15から6D7に位置し、IX層で検出した溝である。主軸はN-37°-Eを指す。断面形は台形状ないし半円状を呈し、立ち上がりは急である。長さ3.9m、幅45cm、深さ29cmを測る。覆土は4層に分層でき、1～3層に灰色系覆土が、4層にオリーブ黒色粘質土が堆積する。3層は腐植物を含む。北東側にSX1が検出されているが、主軸の方向が異なり、底面の標高や覆土の堆積状況も異なる。2つの遺構の関連性は不明である。SD5から遺物は出土していない。

SD9 (図版31・60・61)

2D、3Dに位置する川跡で、VIII層で検出した。主軸はN-29°-Eを指す。2D13から南へ延びるが3D11で南西に曲がる。3D6でプランが確認できなくなったが、さらに南西に続いていたと思われる。検出できた長さは8mである。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。西側がトレンチに切られているため実際の幅は不明だが、2D13の残存部では116cmを測る。深さは16cmを測る。覆土は単層で、砂粒を多量に含む黒褐色粘質土が堆積する。2D13・14でSD18を切っており、SD18より新しい。1層から古墳時代前期後半の土器(6)が出土した。

SD10 (図版31・61)

3D、3E、4Dに位置する川跡で、Vb層で検出した。4D8から北東へ延びるが3D25で北へ流路を変え、3E3から調査区外へと続く。長さ13.8mで、主軸はN-59°-Eを指す。断面形は不規則な弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。幅68cm、深さ9cmを測る。覆土は単層で、炭化物を少量含む暗オリーブ褐色砂が堆積する。遺物は出土していない。

SD18 (図版30・31・61)

2E～3Bに位置する川跡で、IX層で検出した。全長29.3mで主軸はN-68°-Eを指すが、3C7から2D14にかけては北側に弧状に曲がる。南西端は試掘1トレンチに切られる。北東端は2E3で排水用暗渠に切られる。北東端に近い2D23では(A-A')、断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。幅170cm、深さ12cmを測る。覆土は単層で腐植物を多量に含む灰褐色粘質土が堆積する。西側の2C23では(B-B')、断面形は弧状を呈し、緩やかに立ち上がり、幅260cm、深さ16cmを測る。覆土は2層に分層でき、1層に腐植物を多量に含む灰褐色粘質土、2層に灰オリーブ色粘質土を含む暗灰黄色粘質土が堆積する。さらに西側の2C15では(C-C')、断面形は弧状、立ち上がりは緩やかで、幅180cm、深さ15cmを測る。覆土は3層に分層でき、1層が腐植物を多量に含む灰褐色粘質土、2層が灰オリーブ色粘質土を含む暗灰黄色粘質土、3層が灰オリーブ色粘質土である。3地点で1層が共通し、東側(A-A')では確認できない2層が中央と西側の2地点で認められ、3層は西側でしか堆積していないことから、SD18は上流部である西側から次第に埋まってきたと考えられる。1層から弥生時代後期の土器(1)が出土した。

2) 土 坑 (図版34・35・61・62)

SK6

5C13に位置しIX層で検出した。平面形は長方形、断面形は台形状を呈し、立ち上がりは急である。長

さ180cm、幅140cm、深さ19cmを測る。覆土は6層に分層でき、3層は褐色灰粘質土で、それ以外は灰色系覆土で、レンズ状に堆積する。1・2層には砂粒、3層には炭化物、5層には底植物を含む。遺物は出土していない。

SK7

4C22・23、4D2・3・7・8に位置し、Va・Vb層で検出した。南側を排水用暗渠に切られるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。断面形は半円状を呈し、立ち上がりは急である。長さ400cm、幅360cm、深さ85cmを測る。遺構内には自然木が複数認められた。覆土は14層に分層できるが、これらの自然木の影響を受けて堆積が安定しておらず、自然木の周囲にしか認められない層もある。特に南側は、北側に比べて堆積が不安定である。1層は、IVb層から掘り込まれてSK7の覆土2・3層に達していることから、別遺構の可能性はある。2・9・10・14層は炭化物を含み、6・11層に砂を含む。2層から古墳時代前期末の土師器(7)が出土した。

SK8

5B14・19に位置し、IX層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。長径70cm、短径42cm、深さ6cmを測る。覆土は単層で、炭化物をやや多く含む黄灰色粘質土が堆積する。遺物は出土していない。

SK12

4B11・12に位置し、IX層で検出した。平面形、断面形ともに不整形を呈する。立ち上がりは、南西側は緩やかだが北東側では急である。長さ224cm、幅97cm、深さ21cmを測る。覆土は4層に分層でき、1層には黒褐色粘質土が、2・3層には灰オリブ色シルトが、4層には暗オリブ灰色粘質土が不規則なレンズ状に堆積する。1・3層にはごく少量の炭化物を含む。SK12の北東側、4B11・16・17にP20～22・P16・P13～15の7基のピットを確認した。このうちP14・15を除く5基のピットをSK12が切る。P14はSK12に切られるP16・13よりも古いので、SK12はP20～22・P16・13・14よりも新しい。P15との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SK19

2C16に位置し、IX層で検出した。平面形は円形、断面形は箱状を呈し、立ち上がりは急である。直径88cm、深さ68cmを測る。覆土は単層で、IX層(灰白色粘質土)と緑灰色シルト、褐色粘質土をブロック状に含む黒褐色土が堆積する。覆土の堆積状況から短期間で人為的に埋め戻されたものである。底面から30cmほどの位置で時期不明の土師器片が1点出土した。

3) ピ ッ ト (図版35・62・63)

4B11・16・17のピット群

4B11・16・17に北西からP20～22・P16・P13～15の7基のピットが並ぶ。検出層位はIX層である。ピット同士の切り合いやSK12との切り合いが確認できる。各ピットの形状や大きさは第2表のとおりである。

遺構番号	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	断面形	立ち上がり	切り合い
P20	不整形	48	24	21	半円状	急	P21を切る
P21	円形	20	10	10		急	P20に切られる P22に切られる
P22	円形	36	5	5		緩やか	P21を切る
P16	楕円形	47	25	15	半円状	急	P13を切る
P13	楕円形	42	24	23	半円状	急	P14を切る P16に切られる
P14	不整形	34	24	24	半円状?		P13に切られる
P15	不整形	114		22	半円状		なし

第2表 4B11・16・17のピット群一覧表

ピットは北西側にP20～22が並び、そこから南東側に12cmの間隔を置いてP16・13・14が並び、さらにその南東側40cm離れたところにP15が一基独立して位置する。

北西側の3基のピット（P20～22）の覆土は黒色系覆土と灰色系覆土である。P20の覆土は3層に分層され、灰色系覆土（1・3層）の間に黒褐色粘質土（2層）が挟まれる。P21は灰オリーブ色粘質土の単層である。P22の覆土も3層に分層され、1・2層が灰色系覆土、3層がオリーブ黒色粘質土である。この3基ではP21よりもP20・22が新しいが、P20・22の新旧関係は不明である。中央の3基（P13・14・16）の覆土も黒色系と灰色系だが、粘質土のものとシルトのものがある。P16は2層に分層され、1層が黒褐色シルト、2層が黄灰色シルトである。P13の覆土も2層に分層され、1層が黒褐色シルト、2層が黄灰色シルトである。P14は灰色粘質土と灰オリーブ色砂を含むオリーブ黒色シルトの単層である。この3基の中ではP14が最も古い。次にP13が古く、P16が最も新しい。1基だけ独立しているP15の覆土は3層に分層され、1層に暗緑灰色シルト、2層に暗オリーブ灰色粘質土、3層に黒褐色粘質土が堆積する。P15以外の6基のピットはSK12よりも古く、SK12とP15の新旧関係は不明である。これらのピットから遺物は出土していない。

P11

3D20に位置しIX層で検出した。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。直径57cm、深さ6cmを測り、立ち上がりは緩やかである。覆土は単層で、炭化物を少量含む黒褐色粘質土が堆積する。古墳時代前期の土師器（8）が出土した。

4) 杭 列 (図版35・63)

SA23

6F12・13に位置し、IX層で検出した。主軸はN-37°-Eを指す。長さ約2.4mを測り、杭の本数は9本である。6F12では、緩やかに「く」の字形に曲がった丸太が杭列と主軸を同じくして検出された。丸太には加工した痕跡は認められない。丸太の屈曲した部分の陰になるように木の実がまとまって出土した。6F13では、南西側の1本目と2本目の杭の間から丸太が出土した。この丸太にも加工を施した痕跡は認められない。丸太の主軸はN-82°-Wを指し、杭列の主軸とほぼ垂直に交わるが、SA23とは直接的な関連はないと思われる。杭は長さ30cm以下の短い杭ばかりで、最長で29.8cm、最短で10.6cmである。全長11cmほどのものが3本と最も多く、全長18cmほどと全長21cmほどのものがそれぞれ2本ずつ、ほかに全長14cmほどと全長30cmほどのものが各1本ある。木取りは8本が隅材で、残りの1本が角材である。杭4本を図示した（12～15）。

5) 性格不明遺構 (図版35・63)

SX1

5Dに位置し、IX層で検出した。主軸はN-56°-Eを指す。平面形は不整形を呈し、長さ540cm、幅100cm、深さ4cmを測る。断面形は弧状を呈し、立ち上がりは緩やかである。覆土は単層で、炭化物を多く含む黒褐色粘質土が堆積する。南西側にはSD5が位置するが、主軸の方向や覆土の堆積状況が異なり、底面の高低差も38cmと大きい。2つの遺構の関連性は不明である。SX1から遺物は出土していない。

SX2

7D16～18に位置し、IX層で検出した。東側を排水用暗渠に切られるが、暗渠の東側にもSX2の平面プランが確認できる。検出できた部分では長さ340cm、幅90cmである。暗渠に切られているため全容は不明だが、平面形は隅丸方形を呈する可能性がある。断面形は弧状を呈し、北西側の立ち上がりは緩やかで、深さは11cmを測る。覆土は単層で、炭化物を少量含み、褐色土をやや多く含むオリブ黒色粘質土が堆積する。遺物は出土していない。

SX4

7C17に位置し、IX層で検出した。南側を排水用暗渠に切られる。検出できた部分では長さ125cm、幅42cmである。暗渠に切られているため全容は不明だが、平面形は楕円形を呈する可能性がある。断面形は弧状を呈し、北側の立ち上がりは急で、深さは9cmを測る。覆土は単層で、炭化物をまばらに含む灰オリブ色粘質土が堆積する。遺物は出土していない。

3 遺 物

A 概 要

遺跡から出土した遺物は、弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、木製品（杭）、近世陶磁器、銭貨で、遺物量は平箱で4箱である。そのうち近世陶磁器を除く遺物について図示する。

B 土 器（図版36・64）

土器の掲載は、遺構から出土したものを主体とし、さらに時代ごとにまとめた。遺構から出土した土器は共伴関係を明示するため、遺構単位で示し、遺構番号を併記した。

1) 弥生時代

SD18 (1)

1は弥生時代後期の天王山式に相当する。口縁部から頸部にかけて欠損しているが、甕の体部と考えられる。地文にはLR縄文が横走し、頸部付近には下向きの連弧文が配される。

包舎層 (2)

2は有段口縁をもつ甕で、弥生後期から古墳前期に位置づけておく（新潟シンボ編年5期以前、日本考古学協会新潟大会実行委員会1993）。やや張り出した肩部から「く」の字に強く屈曲し、口縁部にいたる器形で、内外面にはナデ調整が施されている。Va層から出土した。

試掘1トレンチ (3～5)

3～5は弥生時代後期の天王山式に相当する。いずれも甕の口縁部から頸部の破片で、地文にLR縄文が横走する。3は交互刺突文の上位に工字文が配される。4は交互刺突文の直下に沈線が配され、5は2条の横位平行沈線の間に工字文が配される。いずれも平成15年度試掘調査時に出土した。

2) 古墳時代

古墳時代の遺物は土師器のみで、須恵器の出土はなかった。遺物の出土した遺構は、SD9・SK7・P11である。時期については、7・9・11が古墳時代前期末（新潟シンボ編年9～10期、日本考古学協会新

湯大会実行委員会1993)に相当するが、6の時期はそれより若干古い可能性があることから、ここでは6を前期後半としておく。

SD9 (6)

6は前期後半の甕で、球形の体部から長く外反して開きながら口縁部にいたる器形となる。口縁部端部外面にはナデ調整が施されている。体部外面にはハケメ調整が施され、内面にはハケメ調整とナデ調整が施されている。

SK7 (7)

7は前期末の甕で、平底の底部から緩やかに立ち上がる。体部は球形を呈し、「く」の字に屈曲し短く外反する口縁部にいたる器形となる。口縁部はやや肥厚し、ナデ調整が施される。口縁部は丸く成形される。体部外面はハケメ調整、底部には指圧痕を残し、内面はナデ調整が施されている。

P11 (8)

8は甕の体部下半である。外面はナデ調整・ハケメ調整、内面はナデ調整が施されている。体部下半しか遺存しないので明確ではないが、前期の所産と考える。

包含層 (9・10)

9はIV層、10はVa層から出土した。9は前期末の甕である。口縁部は体部から直立ぎみに立ち上がり、わずかに外傾する。口縁部の内外面にはナデ調整が施され、体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整が施される。10は甕の底部で、指圧痕を残す。内外面ともナデ調整が施されている。時期の詳細は不明である。

試掘2トレンチ (11)

11は前期末の甕で、体部は球形を呈する。短く外反する口縁部は肥厚し、端部は丸く成形される。体部は外面には縦方向のハケメ調整、内面にはナデ調整が施されている。

C 木 製 品 (図版36・64)

木製品は6点図示した。

SA23 (12～15)

12～15は杭で、すべて上部が欠損し、先端のみ遺存する。削材を利用している。

包含層・試掘1トレンチ (16・17)

16はIX層、17は試掘1トレンチ排土から出土した。16は部材で、柁目の角材を利用する。先端に向かって厚さが薄くなっていく。17は杭で、幹を利用している。

D 銭 貨 (図版36・64)

銭貨はII層から1枚出土した(18)。18は北宋の元祐通寶で、書体は行書である。初鑄年は1078年である。

第V章 ま と め (第13図)

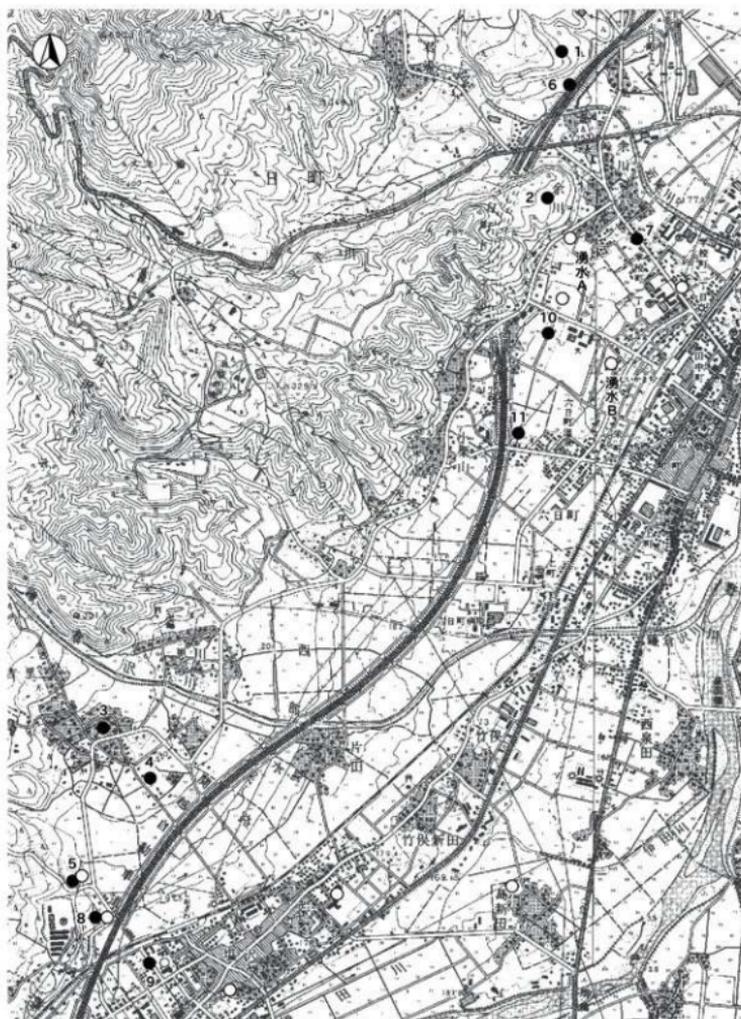
1 周辺の遺跡動向

ここでは、北沖東遺跡・長表東遺跡の所属する古墳時代を中心とした周辺遺跡の動向について概観し、まとめとする。まず古墳時代の集落遺跡としては、金屋遺跡・余川中道遺跡を挙げる事ができる。金屋遺跡は蟻子山古墳群の所在する蟻子山の東麓に位置し、標高は193～200mを測る。昭和57・58年度、平成16・17年度の調査で弥生時代中期から古墳時代後期にかけて、断続的に集落が営まれた遺跡であることが判明した。集落は弥生中期が掘立柱建物2棟、古墳時代は各時期2軒ほどの竪穴住居からなる。また、金屋遺跡はその位置関係等から蟻子山古墳群との関連が想定されている〔北村^{ほか}1985〕。余川中道遺跡は庄之又川の扇状地扇端に立地し、標高は174～177mを測る。遺跡は古墳時代中期後半を主体とする集落で、12か所で確認された土器集中遺構からは石製模造品や白玉等の祭祀遺物や供献土器が主体的に出土することから、祭祀行為との関連が指摘された。遺跡の西約400mには飯綱山古墳群が位置し、両者の関連が想定されている〔飯坂^{ほか}2005〕。

また来清東遺跡・来清西遺跡は鎌倉沢川の形成する扇状地扇端に位置し、標高は来清東遺跡が約187m、来清西遺跡が約193mを測る。来清東遺跡では供献土器とともに石製模造品が出土し、来清西遺跡では土玉・手捏土器・棒状土製品が出土した。いずれも祭祀関連の遺物が出土したことから、来清東遺跡は古墳時代中期の祭祀関連遺跡、来清西遺跡は古墳時代後期の祭祀関連遺跡とされた〔安立2001・2002〕。この鎌倉沢川の形成する扇状地には万貝古墳・糠塚古墳群・南山古墳群が立地し、万貝古墳は来清西遺跡の北約1km、糠塚古墳群は同北東約750m、南山古墳群は同北西約300mに位置する。来清西遺跡出土の古墳時代の土器はMT15～TK10併行期の年代が与えられており〔安立2002〕、古墳の築造年代〔中川^{ほか}1970・金子^{ほか}1977〕と年代差があるようである。ただし周辺では集落遺跡は確認できておらず、古墳造営に携わった集団と祭祀跡を残した集団の関連は不明である。

このように金屋遺跡・余川中道遺跡・来清東遺跡・来清西遺跡の状況から、丘陵上や丘陵縁辺等の周辺と比高差のある地点に古墳を造営し、その麓に集落を構え、さらに集落で祭祀行為を行う、あるいは祭祀で使用した土器等を廃棄するという行動が読み取れる。

一方北沖東遺跡・長表東遺跡は、巨視的には、庄之又川と鎌倉沢川の形成する扇状地間の低地に位置する。特に北沖東遺跡は、大雨が降ると周辺から雨水が集まり冠水することから、地盤の低さが分かる。この庄之又川扇状地と鎌倉沢川扇状地間の低地帯は、庄之又川の扇状地が飯戸山に達して魚野川を塞ぎ止め、湖沼や湿地になり、弥生時代から古代にかけては水田化が進んだことが指摘されている〔金子2002〕。市道西側の調査区では腐植物層が深くまで堆積することからも、遺跡周辺が湖沼化、湿地化していたことが理解できる。北沖東遺跡では杭列や川跡のほか、水田の可能性のある遺構(05SX8・10・13)が検出され、木製農具(50・63・86～89)や馬織の銜部(45～47)が出土した。これらの遺構・遺物は出土土器から古墳時代後期前半頃の所産と考えられる。今回の調査では、明確に水田跡と判断できる遺構は確認できなかったが、木製農具や杭列の存在から、古墳時代後期頃の水田が位置していた可能性が想定できる。また05SD9には木道が架けてあり、人間の往来があったことが理解できる。



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	蟻子山古墳群	4	獅塚古墳群	7	余川中道遺跡	10	北沖東遺跡
2	飯綱山古墳群	5	雨山古墳群	8	来清西遺跡	11	長表東遺跡
3	万貝古墳	6	金屋遺跡	9	来清東遺跡		

0 (1:25,000) 1000m

○ 湧水地点・井戸

国土地理院 1:25,000「六日町」平成12・「塩沢」平成13を縮小

第13図 周辺の遺跡と湧水地点（〔佐藤1997〕をもとに作成）

長表東遺跡も巨視的には扇状地間の低地に位置するが、魚沼丘陵から東流する十二沢川の扇状地に立地する(第5図)。このため長表東遺跡は周辺よりやや標高が高く、川跡も北沖東遺跡に比べ相対的に深さは浅い。また水田跡と思われる遺構も確認できない。長表東遺跡ではわずかに検出された土坑(SK7)やピット(P11)等に活動の痕跡がうかがえる。

以上のように、北沖東遺跡は生産に関連する遺跡である可能性が高く、一方長表東遺跡は直接生産には関係しないが、何らかの活動の痕跡がうかがえる遺跡で、両遺跡の立地の差異を反映していると考えられる。古墳時代の旧六日町周辺では、集落は丘陵縁辺や扇状地上の標高の比較的高い地点に立地し、古墳は主に丘陵上に立地している。また北沖東遺跡周辺は湖沼化、湿地化しており、生産地として利用されたことが想定され、長表東遺跡等の微高地でもわずかではあるが人間の活動痕跡がうかがえる。北沖東遺跡や長表東遺跡の調査の結果、古墳時代における多様な活動の一端が確認できる。

2 遺跡周辺の湧水地点

魚沼丘陵沿いの扇状地先端部には湧水地点が分布する。湧水付近には弥生時代以降の遺跡が確認でき、その関連性についてはすでに指摘されている〔佐藤1997〕。地元の方によると、北沖東遺跡・余川中道遺跡に近い湧水Aには以前は子供のおしめを洗う行列ができたといい、隣接する家の屋号は「シミズバタ(清水端)」である。また北沖東遺跡周辺の木之芽坂では水田の中からの湧水で耕作ができたという〔余川誌編集委員会1990〕。長表東遺跡にも近い湧水Bは、「マンネンイド(万年井戸)」と呼ばれていた。しかし湧水A・Bとも土地改良事業以後は枯渇している。このほか余川中道遺跡に近い八海高校付近では湧水による小さな池が点在し、冬でも雪が積もらなかった〔余川誌編集委員会1990〕。旧塩沢町の来清東遺跡・来清西遺跡周辺にも湧水地点が確認できる〔佐藤1997〕。

以上のように、北沖東遺跡や長表東遺跡の周辺は比較的水の利用に便利であったことが確認でき、古墳時代にも湧水が利用されたことが容易に想定できる。湧水の利用法として、集落周辺では飲料水に利用したであろうし、北沖東遺跡等で想定される生産遺跡では農業用水として利用されたであろう。また来清東遺跡は古墳時代中期の祭祀関連遺跡、来清西遺跡は古墳時代後期の祭祀関連遺跡であり〔安立2001・2002〕。余川中道遺跡でも祭祀関連の遺構が検出されている〔飯坂^{ほか}2005〕。余川中道遺跡では「祭祀行為は居住域内で行い、祭祀終了後に集落南側の低地に祭祀で使用した土器や石製模造品をその都度廃棄したとされ、その低地は「地下水の浸みだす」場所であった。来清東遺跡では「河原のような環境の場所に土師器片と石製模造品を廃棄したとする。古墳時代に限らず、祭祀と水との関連はすでに指摘されているが〔石野1991・置田1991等〕、余川中道遺跡・来清東遺跡で意図的に水に関連する場所に祭祀で使用した土器等を廃棄したかどうかは不明である。

魚沼丘陵沿いの扇状地先端部には湧水地点が比較的確認でき、遺跡内でも飲料水や農業用水等に利用されたことが想定される。一方湧水地点と祭祀行為との関連は現状では不明であるが、両者の関連性については今後十分な検討が必要である。

要 約

- 1 北沖東遺跡は南魚沼市小栗山字北沖19番地3ほかに、長表東遺跡は南魚沼市小栗山字長表322番地3ほかに所在する。
- 2 北沖東遺跡・長表東遺跡とも庄之又川の扇状地と鎌倉沢川の扇状地との間の低地部に位置する。両遺跡北西側には県史跡飯綱山古墳群が位置する。
- 3 北沖東遺跡・長表東遺跡とも一般国道17号六日町バイパス建設に伴い発掘調査を行った。北沖東遺跡は平成15(2003)年11月・平成16(2004)年5月に試掘調査を行い、平成16年9月6日～11月26日・平成17(2005)年6月6日～9月16日に本発掘調査を行った。長表東遺跡は平成15年11月・平成16年5月に試掘調査を行い、平成17年8月1日～10月19日に本発掘調査を行った。
- 4 北沖東遺跡では、遺構は古墳時代後期の溝3条、杭列6条、木道1基、土坑2基、ピット1基、性格不明遺構4基、川跡13条、古代(平安時代)の杭列5条、川跡7条、性格不明遺構1基、近世の溝1条、性格不明遺構2基が検出された。遺構の多くは市道の東側(六日町中学校側)で検出された。遺物は古墳時代後期の土師器、木製品、古代(平安時代)の土師器、須恵器、中世の珠洲焼、青磁、銭貨等がある。古墳時代後期の木製品では大量の杭のほか、農耕具や容器、弓等が確認できる。また古代の土師器には墨書が認められるものもある。
- 5 長表東遺跡では、遺構は溝・川跡5条、土坑5基、ピット8基、杭列1条、性格不明遺構3基が検出された。このうち、SD18は弥生時代後期、SD9・SK7・P11は古墳時代前期の所産で、それ以外は概ね弥生後期から古墳時代の所産と思われる。遺構は標高の高い農道の西側に集中する。遺物は弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器、木製品(杭)、中世の銭貨(北宋銭)等がある。遺物の多くは遺跡北西側の遺構や包含層から出土した。

引用・参考文献

- 安立 聡 2001 『塩沢町文化財報告書第19輯 来清東遺跡』新潟県塩沢町教育委員会
- 安立 聡 2002 『塩沢町文化財報告書第20輯 来清西遺跡』新潟県塩沢町教育委員会
- 飯坂盛泰ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第139集 余川中道遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第155集 金屋遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 池田 亨 1973 『六日町の文化財』
- 池田 亨 1992 『大和町文化財発掘調査報告書第5号 御館遺跡』新潟県大和町教育委員会
- 石野博信 1991 「1 総論」『古墳時代の研究』3 生活と祭祀 雄山閣
- 上原真人 1993 「第2章 遺物解説 B 農具」『木器集成図録』近畿原始篇 奈良国立文化財研究所
- 置田雅昭 1991 「4 川の神まつり」『古墳時代の研究』3 生活と祭祀 雄山閣
- 金子拓男 2002 「第四節『魚沼』の地名」『塩沢町史 通史編上巻』塩沢町史編纂委員会・新潟県塩沢町
- 金子拓男ほか 1977 「伊手乃郎の古墳」『新潟県文化財調査年報第15 南魚沼』新潟県教育委員会
- 茅原一也ほか 1977 「新潟県南魚沼地域の地形および地質」『新潟県文化財調査年報第15 南魚沼』新潟県教育委員会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸下流域を中心に—」『上越市史研究』第5号
- 北村 亮ほか 1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡』新潟県教育委員会
- 小林 進 1977 「中越地方の自然と生活」『新潟の自然』第3集 新潟の自然刊行委員会
- 佐藤雅一 1997 「第一節 山里の丘と谷そして湧水」『塩沢町史 資料編上巻』塩沢町史編纂委員会・新潟県塩沢町
- 塩沢町史編纂委員会 2002 『塩沢町史 通史編上巻』新潟県塩沢町
- 高橋 保 1992 「3 魚沼地方の縄文中期の遺跡群」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 五丁歩遺跡 十二木遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 保ほか 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 五丁歩遺跡 十二木遺跡』新潟県教育委員会
- 田中一穂 2004 「六日町バイパス（小栗山～余川間及び近尾川左岸）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団 年報平成15年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田村浩二 2002 「第三節 郷里と農民」『塩沢町史 通史編上巻』塩沢町史編纂委員会・新潟県塩沢町
- 戸根与八郎ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第43集 長表遺跡』新潟県教育委員会
- 中川成夫・加藤晋平・岸上興一郎 1970 『新潟県南魚沼郡塩沢町吉里古墳群の調査』新潟県南魚沼郡塩沢町教育委員会
- 中村孝三郎・金子拓男ほか 1975 『六日町埋蔵文化財調査報告書第2輯 長表遺跡』新潟県六日町教育委員会
- 新潟大学人文学部 2001 「新潟県南魚沼郡六日町飯綱山27・65号墳発掘調査報告（1996～99年度）」『新潟大学考古学研究室調査報告書』3
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
- 余川誌編集委員会 1990 『余川誌』
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 渡辺秀男・荒川勝利 1981 「南魚沼郡六日町上ノ原地域の第四系」『六日町西山の自然』六日町

北沖東遺跡 土器観察表

(長:長石・石;高:チ・チャート;砂:砂粒)

報告 番号	種類	器種	時期	グリップ	遺跡	層位	法線 (cm)		色澤		胎化物		附土	製作経緯・備考		
							口径	器高	底径	外面	内面	外面			内面	
1	土師器	杯	古墳後期前半	18F15	S20	6	14.7	5.7	5.0	黄	黄	あり	なし	内外面ヘラミガキ		
2	内黒	高杯	古墳後期前半	16G17	S20	8	15.8			黄灰	黄	あり	なし	靑いハケメ・ミガキ		
3	土師器	小笠壺	古墳後期前半	18F15	S20	6				黄灰	黄灰	なし	あり	赤褐色上部ハケメ・ミガキ、下部ヘラケズリ、内面ヘラケズリ		
4	内黒	杯	古墳後期前半	20G20	SD34	1	15.5			にぶい 黄		あり	なし	内黒ミガキ、外面ハケメ・ミガキ		
5	土師器	壺	古墳後期前半	20G10	SD34	1	14.0			黄灰	黄灰	なし	なし	内外面ハケメ・ミガキ		
6	内黒	高杯		19F18						黄	黄	あり	なし	ミガキ		
7	土師器	杯		17F19						にぶい 黄	にぶい 黄	なし	あり	長・石		
8	土師器	壺	古墳後期前半	19F4- 20						にぶい 黄	にぶい 黄	なし	なし	長・石		
9	土師器	壺	古墳後期前半	18F23						浅黄緑	浅黄緑	あり	あり	長・石・チ 内面ヘラケズリ、外面ヘラケズリ		
10	土師器	壺	古墳後期前半	16G12						浅黄	浅黄	あり	あり	長・石・チ 内面ヘラケズリ、外面ヘラケズリ・ミガキ		
11	土師器	壺	古墳後期前半	18G1						黒陶	にぶい 黄	あり	あり	長・石・チ 内面ヘラケズリ、外面ハケメ・ミガキ		
12	須恵器	杯蓋	9世紀後半	15F15						灰白	灰白	なし	なし	長・石		
13	須恵器	有白杯	9世紀後半	19G6						灰白	灰白	なし	なし	長・石		
14	土師器	杯	9世紀後半	17G24						明黄陶	にぶい 黄	なし	なし	砂雜入、 長・石		
15	土師器	杯	9世紀後半	18F6						5.5	暗陶	なし	なし	長・石		
16	土師器	杯	9世紀後半	17G13						5.5	暗陶	なし	なし	長・石		
17	珠洲焼	壺	古期	17G4							灰	灰	なし	なし	石・ 海緑砂	
18	陶磁器	青磁碗	14世紀後半～ 15世紀前半	19F22						5.5	明緑灰	明緑灰	なし	なし		
51	土器	壺	弥生前期	12B12							5.5	明緑灰	明緑灰	あり	石	口縁部肥厚 曇状文(輪飾)、波状文(輪飾)
52	土師器	小笠壺	古墳後期前半	6G6	05SD9	1	15.0	13.7	6.4	黄黄陶	黄灰	あり	あり	長・石	口縁部肥厚 外面に緑土ナデ、内部ハケメ 6G6 口縁部土製土七器合	
53	土師器	壺	古墳後期	6G6・7						黄灰	黄陶	あり	あり	長・石・砂	内面下平ケズリ・上半ナデ、 外面ナデ・ハケメ	
54	内黒	杯	古墳後期前半	6G6・7						黄灰		なし	なし	長・石	内外面ヘラミガキ	
55	内黒	杯	古墳後期前半	6G7						黄灰		なし	なし	長・石	内外面ヘラミガキ	
56	内黒	杯	古墳後期前半	11G11						黄灰		なし	なし	長・石	内外面ヘラミガキ 外面はがけ	
57	内黒	杯	古墳後期前半	8G10						黄陶		なし	なし	長・石	内外面ヘラミガキ	
58	土師器	壺	古墳前期後半	8F16						黄灰	黄灰	あり	あり	長・石・砂	内面ナデ、外面ナデ・ハケメ	
59	土師器	壺	古墳後期?	13F14						7.1	黄灰黄	黄陶	あり	なし	長・石・砂	内面ナデ、外面ナデ・ハケメ
60	須恵器	有白杯	9世紀後半	14F21						8.0	黄灰	黄灰	なし	なし	石	ナデ
61	土師器	無白杯	9世紀後半	19G7							黄	黄	なし	なし	石	内黒ミガキ、外面口ケズリナデ 緑色ヘラケ

北沖東遺跡 銭貨観察表

報告 番号	発見者	出土地誌		遺厚 (mm・g)				起算年	備考		
		グリップ	層位	銭径	銭厚	内径	外径				
19	空室遺費	15G8		25.8	23.9	18.3	18.4	0.8	3.11	1038年	豪清
20	空室遺費	20C3		24.1	24.2	17.0	17.5	1.2	1.62	1038年	高清

観 察 表

北沖東通跡 木製品観察表

観号 番号	種別	出土地点		法線 (cm)			遺存状況	本取り	備考	
		遺構	層位	長さ	幅	厚さ				
21	弓	1896	S46	I	69.8	3.1	2.2	完整	芯材あり	弓張込内部
22	板	22013	SA15	N	38.6	4.3	4.0	完整	板	
23	板	22016	SA15	N	90.0	3.0	4.0	上端欠	板	
24	板	1508	SA17	V	43.6	6.1	3.5	完整	板	断面が六角形
25	板	1409	SA17	V	70.2	5.8	4.4	上端欠	板	断面が四角形
26	部材	1801	SA18	W	25.7	6.2	0.8	下端欠	板	上端部欠あり
27	部材	1805	SA18	W	40.3	9.1	4.6	下端欠	芯材あり	上端部欠あり
28	板	1909	SA18	W	69.8	5.6	4.2	完整	板	断面に欠欠あり、板用材か
29	板	1995	SA18	W	64.4	5.6	5.4	完整	板	断面に欠欠あり、板用材か
30	板	1901	SA18	W	93.2	6.2	4.4	完整	板	
31	板	18924	SA18	W	95.0	8.5	4.4	完整	板	
32	板	19020	SA18	W	105.0	4.6	4.8	完整	板	
33	板	20016	SA18	W	102.6	5.8	3.8	完整	板	
34	板	18910	SA19	W	55.3	6.2	4.6	上端欠	板	断面が六角形
35	板	1704	SA31	W	72.4	8.0	4.8	上端欠	板	板欠あり、板用材か
36	部材	1801	SD9板	2	120.4	8.4	2.3	完整	板	上下部欠あり、板用材か
37	板	1899	SD9板	1	131.3	8.3	4.0	完整	板	断面が六角形
38	板	18919	SD9板	W	81.4	7.8	8.4	完整	板	断面が四角形
39	板	18919	SD9板	5	122.0	7.2	6.7	完整	板	断面が六角形
40	板	19913	SD9板	3	125.4	7.5	6.9	完整	板	断面が六角形
41	部材	20014		W	87.0	9.6	3.2	上下部欠	板	孔3か所あり
42	部材	20014		W	45.8	3.5	4.1	上下部欠	板	板
43	部材	2096		W	39.4	11.6	25.0	左右側面欠	板	鎌倉時代出土あり
44	板	1989		W	22.3	2.0	16.0	2/3欠	板	
45	光跡の痕部	17018		W	32.8	4.3	4.1	完整	板	先端部欠
46	光跡の痕部	17024		W	32.7	4.0	4.2	完整	板	先端部欠
47	光跡の痕部	17024		W	30.9	4.7	3.1	先端部欠	板	
48	部材	20013		W	41.3	15.7	2.4	右側面欠	板	孔3か所あり
49	部材	23921		W	38.5	4.7	2.0	完整	板	
50	器具	1603		W	44.3	12.1	1.5	完整	板	
62	部材	796	058D9	I	82.7	8.6		上端欠	板	下端を平肉削加工
63	器具	6920	058D16	2	41.9	14.4	13.0	先端・側面欠	板	ナス型遺構具、柄を逆平肉削あり
64	板	403・8	058D17	4	84.3	10.6		上端欠	板	3方向から割り取れを作成
65	部材	3914	058D19	3	194.3	12.2	2.5	完整	板	上端平肉削に断面の欠あり
66	板	8924	058A5	W	48.0	5.6	2.6	上端欠	板	2方向から割り取れを作成
67	板	8925	058A5	W	60.0	5.3	3.4	上端欠	板	4方向から割り取れを作成
68	板	902	058A5	W	46.3	5.3	3.0	完整	板	5方向から割り取れを作成
69	板	903	058A5	W	45.3	5.6	3.6	上端欠	板	4方向から割り取れを作成
70	板	902	058A5	W	58.1	6.7	4.6	完整	板	
71	板	1002	058A5	W	65.4	4.5	3.9	完整	板	7方向から割り取れを作成
72	板	1004	058A5	W	79.5	7.4	4.3	完整	板	4方向から割り取れを作成
73	板	12921	058A5	W	103.8	4.8	4.5	完整	板	
74	板	10918	058A5	W	86.3		3.7	下端欠	板	
75	板	12916	058A5	W	40.1		3.7	上端欠	板	2方向から割り取れを作成
76	板	12916	058A5	W	57.7		5.4	上端欠	板	5方向から割り取れを作成
77	板	11920	058A5	W	48.3		5.8	上端欠	板	4方向から割り取れを作成
78	板	4918	058D22板	W	98.9	9.9	3.3	上端欠	板	
79	板	4916	058D22板	W	51.3	6.6	1.2	上端欠	板	字様に反りあり、2方向から割り取れを作成
80	板	4918	058D22板	W	67.8	5.5	4.4	上端欠	板	
81	板	89	05 4面 11	W	107.5		7.7	完整	板	板の板用材、5方向から割り取れを作成
82	板	89	05 4面 11	W	45.8	4.2	2.9	上端欠	板	4方向から割り取れを作成
83	板	89	05 4面 11	W	44.5	5.3	3.4	上端欠	板	4方向から割り取れを作成
84	板	89	05 4面 11	W	42.4	4.3	3.2	上端欠	板	上端加工部あり、4方向から割り取れを作成
85	板	89	05 4面 11	W	65.6	5.9	2.9	完整	板	4方向から割り取れを作成
86	器具	1493	055X8	I	41.7	12.2	1.3	先端欠	板	ナス型遺構具、刃部断面下部に向け傾を減じる
87	器具	6917		W	43.0	9.9	1.5	先端・刃部欠	板	ナス型遺構具、刃部断面平行
88	器具	1296		W	33.0	13.8	1.2	先端・刃部欠	板	ナス型遺構具、刃部断面平行
89	板			W	22.8	14.7	2.1	先端部欠	板	断面平肉削
90	板	10010		W	35.8	4.0	1.7	上端欠	板	中央部は断面加工
91	部材	12923		W	37.4	5.7		上下部欠	板	長さ4cmあり
92	板	15015		W	22.0		2.9	上端欠	板	2方向から割り取れを作成
93	板	15016		W	30.1		2.9	上端欠	板	3方向から割り取れを作成
94	板	18012		W	49.9	4.5	2.9	上端欠	板	3方向から割り取れを作成
95	板	1601		W	37.3		2.9	上端欠	板	2方向から割り取れを作成
96	板	1803		W	84.4	6.7	6.7	上端欠	板	5方向から割り取れを作成
97	部材	18023		W	158.0	14.5	2.0	下端欠	板	長さ73cmあり
98	部材	1601・16・22		W	417.5	10.0	12.5	下端欠	板	長さ22cmあり、長方形孔4か所あり
99	部材	1304	X90		214.8	18.5	2.5	下端欠	板	長さ73cmあり
100	平削				54.7	15.0	6.2	断面欠け	板	表土剥ぎ
101	部材				30.7	1.8	1.3	完整	板	表土剥ぎ
102	部材	8918		I~II	15.9	2.9	1.5	下端欠	板	刃部欠あり、下部に凹みあり、表土剥ぎ

長表東遺跡 土器観察表 (長: 長石・石; 石英・子: チャート・砂; 砂泥)

報告番号	種類	器種	時期	グリッド	遺構	層位	法量 (cm)		色澤		胎化物	胎土	製作段階・備考	
							口径	器高	底径	外色				内色
1	土器	甕	弥生前期	3B23-24	SD18	1			に深い黒陶	内面	なし	あり	石・雲・砂 1B縄文、縄文末、浅黒、天土山式	
2	土師器	甕	弥生後期～古墳前期	3D18-23		Va	17.0		オリーブ陶	黒	なし	なし	石・砂 内外面ナデ	
3	土器	甕	弥生後期						陶	黒陶	なし	あり	石・砂 1B縄文、宇字文、交互刺突文、天土山式、試験1T	
4	土器	甕	弥生後期						灰黒陶	黒陶	なし	あり	石・砂 1B縄文、浅黒、交互刺突文、天土山式、試験1T	
5	土器	甕	弥生後期						灰黒陶	黒陶	なし	あり	石・砂 宇字文、天土山式、試験1T	
6	土師器	甕	古墳前期後半	2D9-10	SD9	1	13.6		オリーブ陶	に深い黒	なし	あり	石・霰・雲 内外面ナデ・ハケメ	
7	土師器	甕	古墳前期末	4D2	SK7	2	19.1	27.5	6.2	黒陶	陶灰	あり	石・角 外面ナデ・ハケメ、内面ナデ	
8	土師器	甕	古墳前期	3D20	P11	1			浅黒	陶灰	なし	あり	石・角 外面ナデ・ハケメ、内面ナデ	
9	土師器	甕	古墳前期末	4D11	IV	16.7			に深い黒陶	に深い黒陶	なし	なし	石・雲 外面ナデ・ハケメ、内面ナデ	
10	土師器	甕	古墳	3D18-23		Va			7.0	黒陶	浅黒陶	なし	なし	石・霰 内外面ナデ
11	土師器	甕	古墳前期末				18.2		に深い黒陶	陶灰	なし	あり	石・角 外面ハケメ、内面ナデ、試験2T	

長表東遺跡 木製品観察表

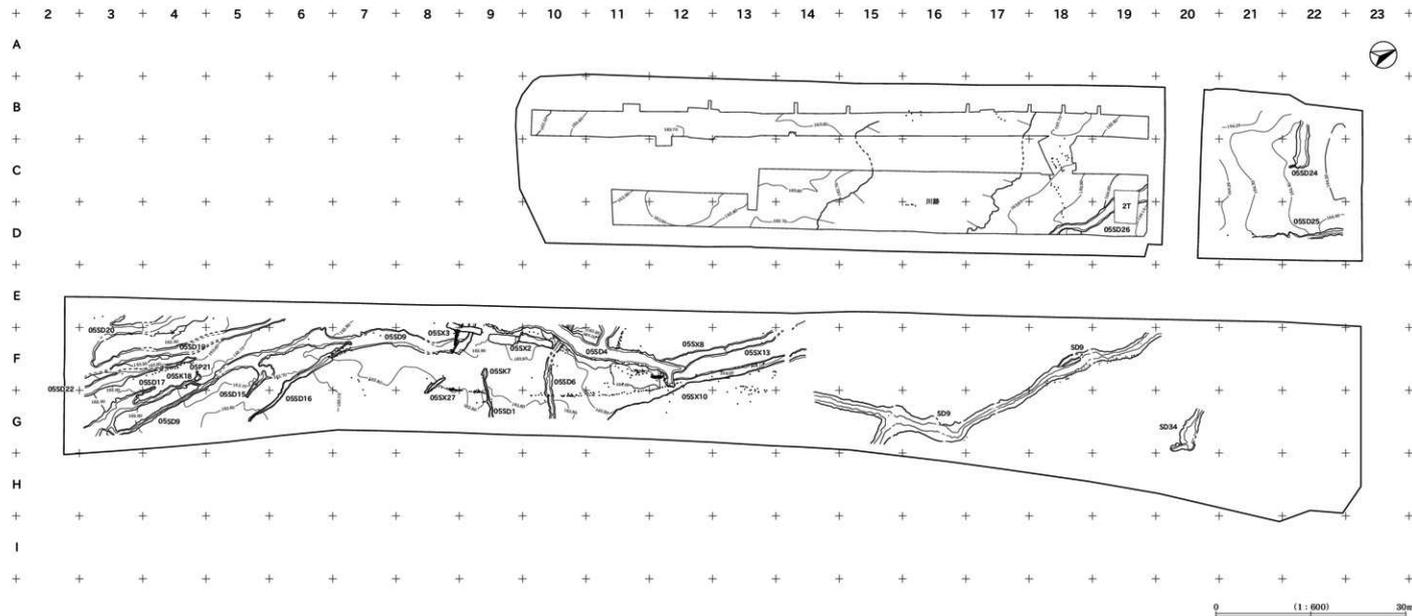
報告番号	種別	出土地点			法量 (cm)			保存状況	木取り	備考
		グリッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ			
12	杭	6F12-13	SA23	IX	13.1	6.2	5.0	上端欠	榿材	
13	杭	6F12-13	SA23	IX	19.9	6.2	3.8	上端欠	榿材	
14	杭	6F12-13	SA23	IX	22.6	5.0	6.0	上端欠	榿材	
15	杭	6F12-13	SA23	IX	30.6	6.3	6.2	上端欠	榿材	
16	榿材	5B19		IX	52.8	5.6	5.8	上下端欠	榿目	
17	杭	3B19		律土	39.6	11.0	11.0	上端欠	榿	試験1T

長表東遺跡 銭貨観察表

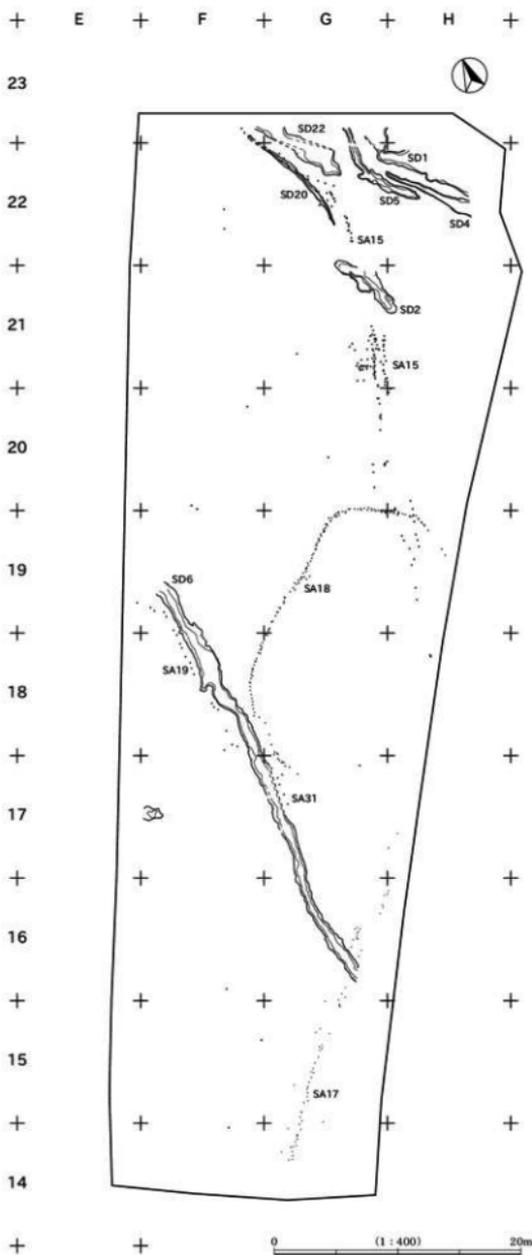
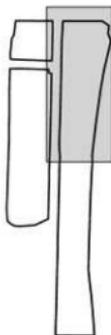
報告番号	銭貨名	出土地点		法量 (mm・g)					鋳造年	備考	
		グリッド	層位	銭径	銭径幅	内径	内径幅	銭厚			重量
18	元祐通寶	1D15	II	24.6	24.5	6.5	6.6	1.0	2.68	1078年	行書

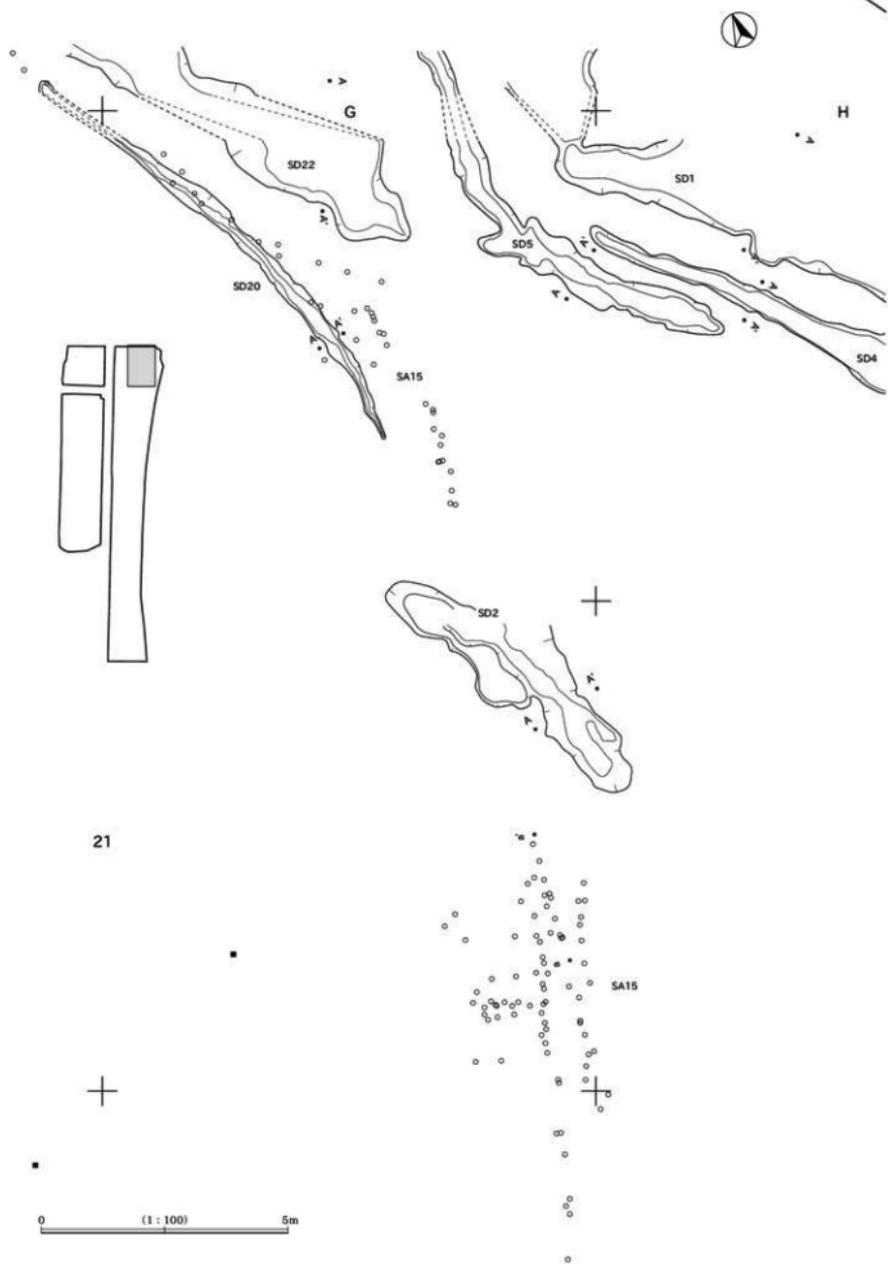
図 版

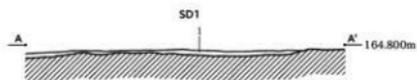
- 1 遺構平面図で、杭は○・●・△・▲・▼・■で示した。
- 2 土器の付着物の範囲は以下のようにスクリーントーンで示した。
 … 内面黒色処理
- 3 須恵器・珠洲焼の断面は黒塗りつぶしで示した。
- 4 木製品の木目は、木取り部位表示を目的としているため、年輪幅は実際を示していない。
- 5 遺物写真図版の縮尺は図面図版と同じである。



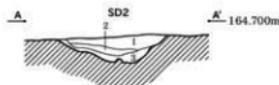
IV~VII層



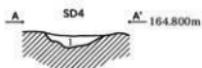




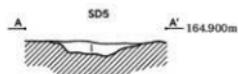
SD1
1 オリーブ黒色粘質土：しまりなし、粘性あり、白色砂粒を含む、5mmほどの炭化物を含む。



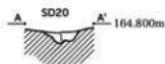
SD2
1 灰色粘質土：しまりなし、粘性あり、灰色砂をまだらに含む。
2 緑褐色砂質土：しまり・粘性なし、灰色粘質土をまだらに含む。
3 オリーブ黒色粘質土：しまりなし、粘性あり、白色砂粒を含む。



SD4
1 オリーブ黒色粘質土：しまりなし、粘性あり、黄褐色細砂を含む。



SD5
1 オリーブ黒色粘質土：しまりなし、粘性あり、1~5mmほどの炭化物を含む、黄褐色細砂を含む。

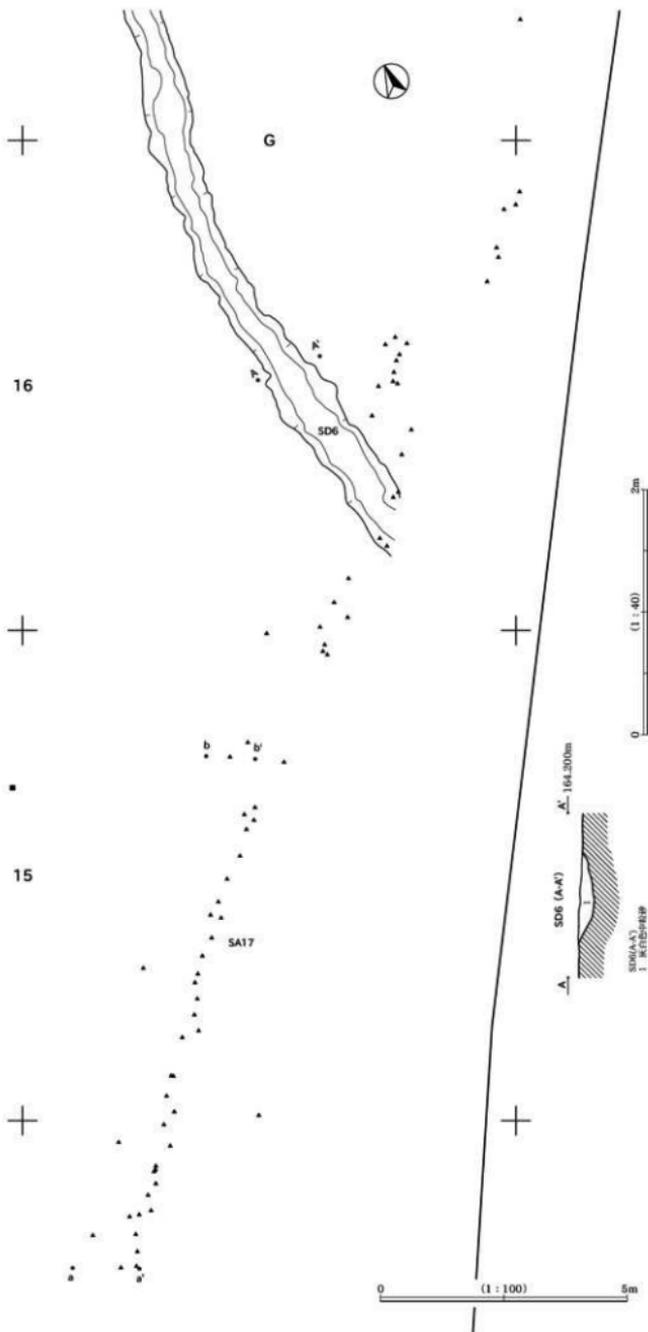
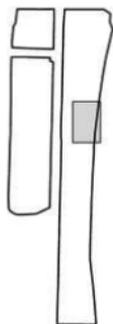


SD20
1 オリーブ黒色粘質土：しまりなし、粘性あり、灰色細砂を多量に含む。

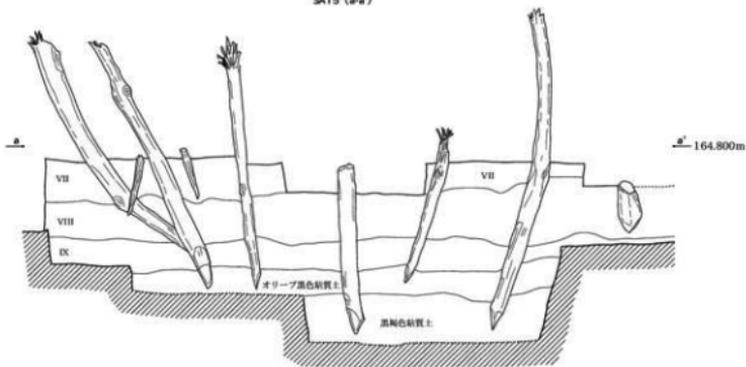


SD22
1 濃褐色粘質土：しまり・粘性あり、黄褐色細砂をブロック状に含む。

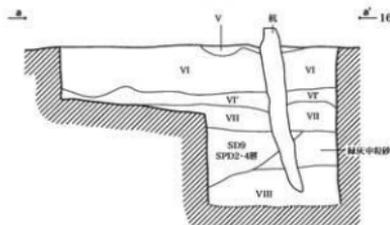




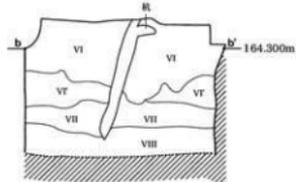
SA15 (a-a')



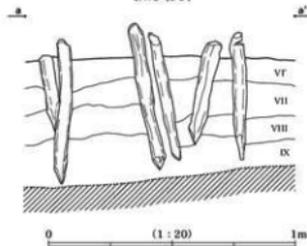
SA17 (a-a')



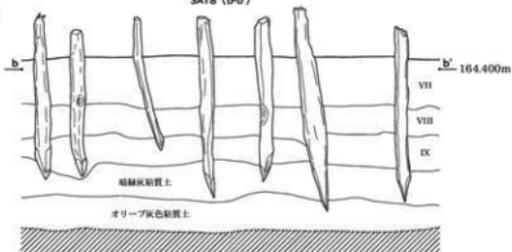
SA17 (b-b')



SA18 (a-a')

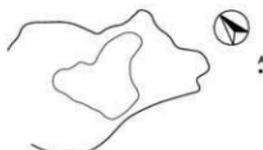


SA18 (b-b')



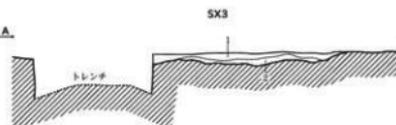
SX3

A



A'

A



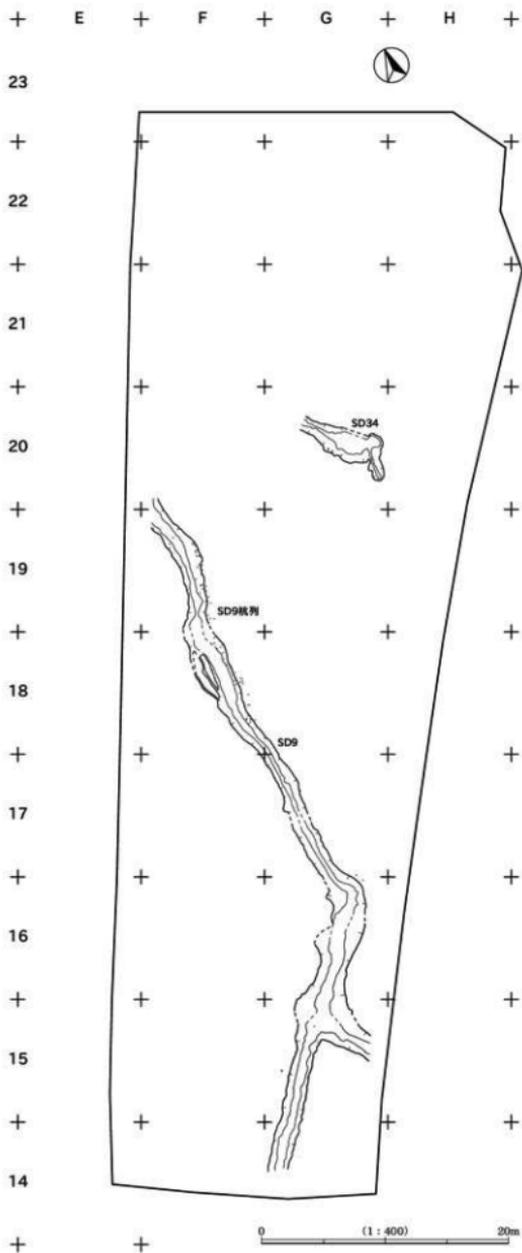
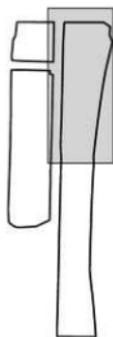
A'

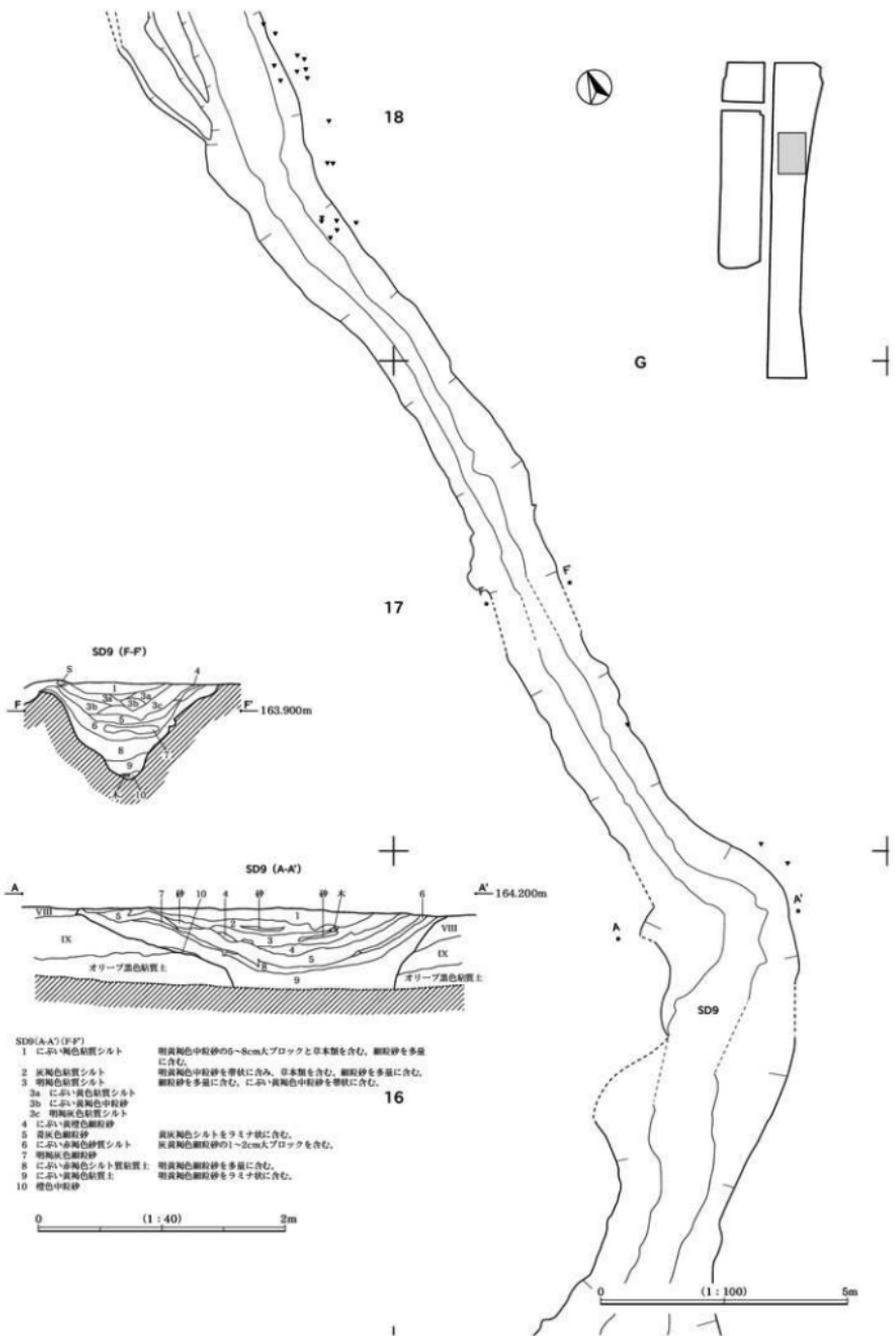
SX3

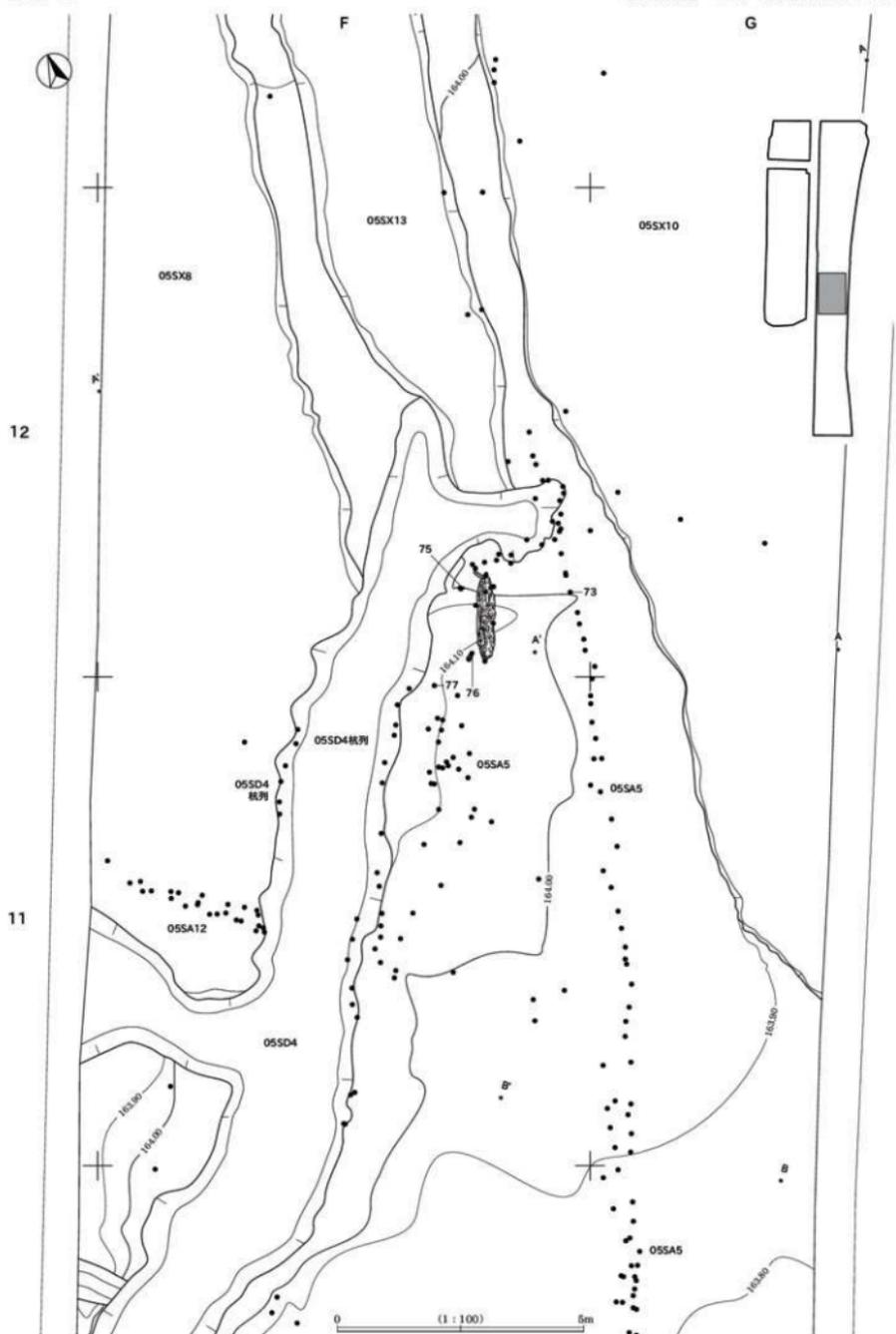
- 1 黒色粘質土 しまりなし、粘性あり、炭化した榑木片を多数含む。
- 2 黒褐色粘質シルト しまりなし、粘性中あり、炭化腐朽した榑を含む、白色榑粒子を多数含む。中心下部は層下には抜けて壁断面となっている。

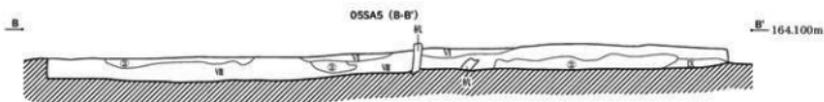
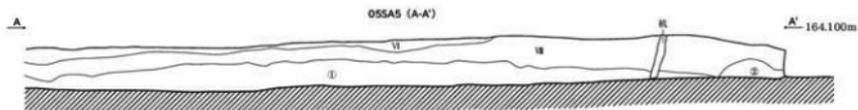
0 (1:40) 2m

VIII層

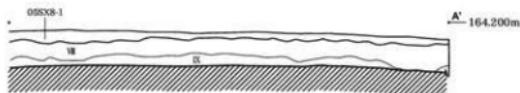
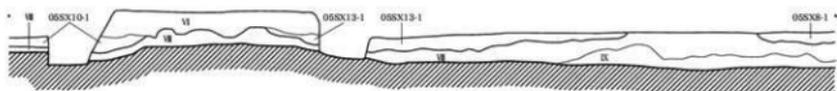
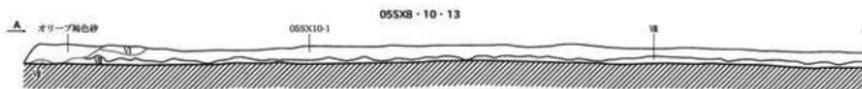
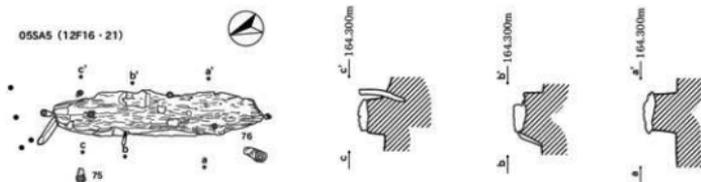




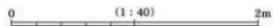


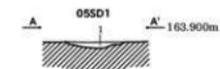


- ① 磁鉄灰色シルト 粘性ややあり、しまりややあり。
 ② 灰オリーブ色砂 粘性なし、しまりなし、径3cm程度の礫を多く含む。

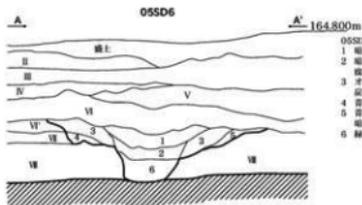


- OSSX10
 1 灰オリーブ色粘質土 粘性あり、しまりあり、オリーブ褐色粘質土が塊に含む。
 OSSX13
 1 灰オリーブ色粘質土 粘性あり、しまりあり、オリーブ褐色粘質土が塊に含む。

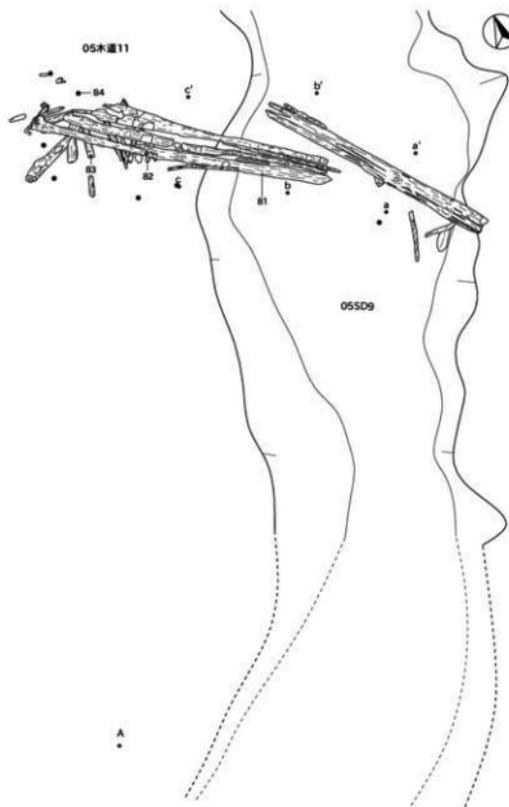




05SD1
1 黄灰色シルト 粘粒ややあり、
しまりなし。灰オリーブ色砂を多く含む。

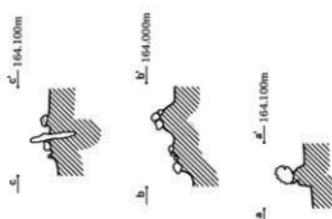


05SD6
1 暗オリーブ灰色砂 粘粒なし、しまりなし。
2 黄灰色シルト 粘粒ややあり、しまりなし。
3 オリーブ黒色シルト 粘粒ややあり、しまりなし。
4 黄灰色シルト 粘粒ややあり、しまりなし。
5 黄灰色シルト 粘粒なし、しまりなし。
6 暗オリーブ灰色砂を全体的に含む。
7 黄灰色シルト 粘粒なし、しまりなし。



05SD9

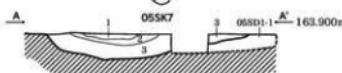
A



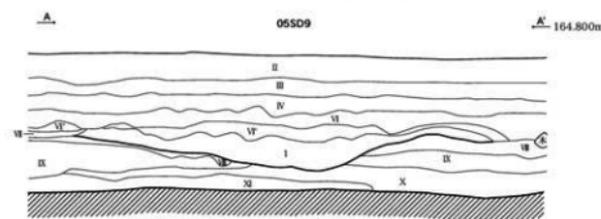
05SA5 (B G4・5)



05SK7



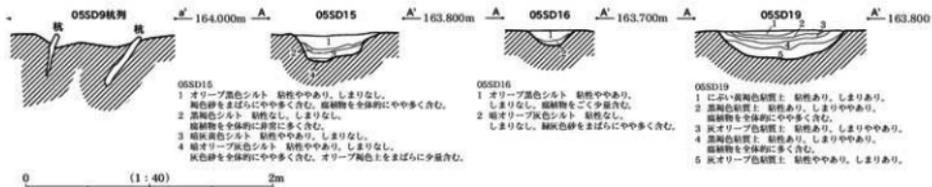
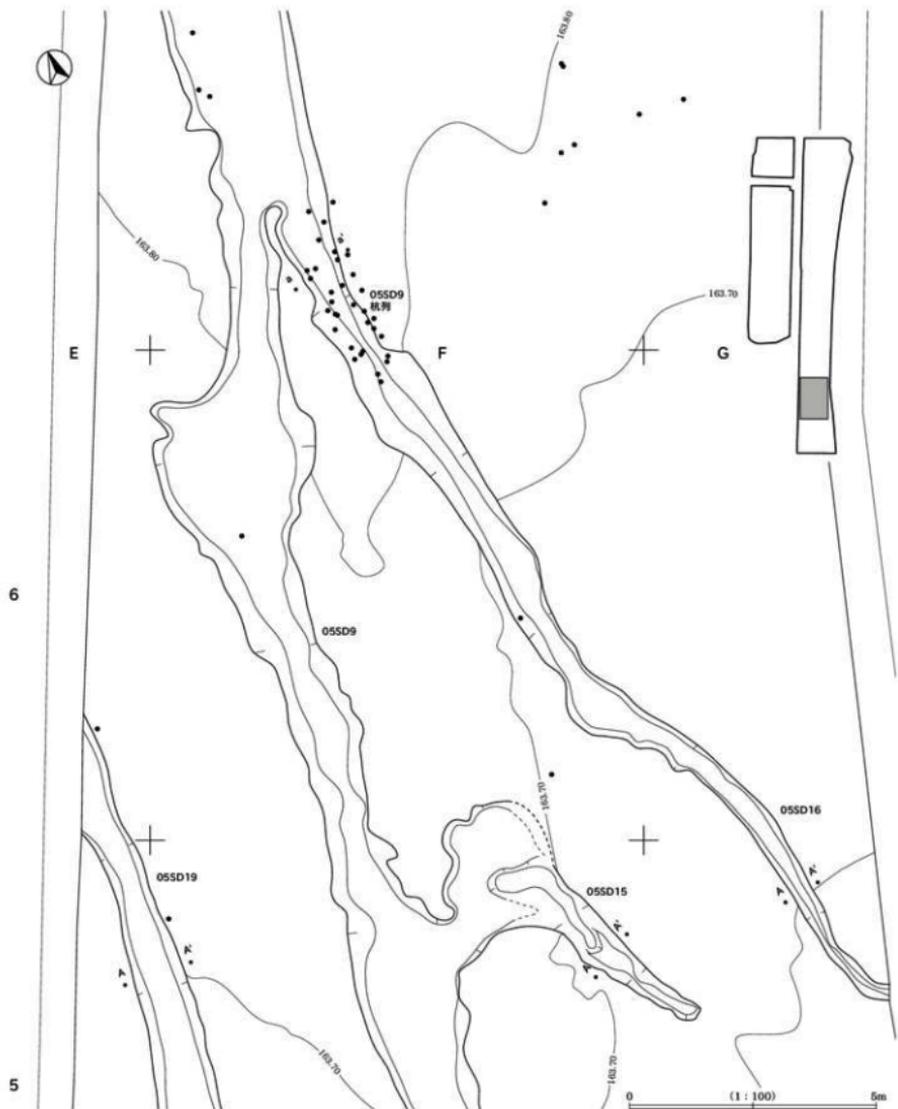
05SK7
1 灰色シルト 粘粒ややあり、しまりなし。腐植物をごく少量含む。
2 灰色シルト 粘粒なし、しまりなし。腐植物をごく少量含む。
3 暗オリーブ灰色シルト 粘粒なし、しまりなし。腐植物を少量含む。

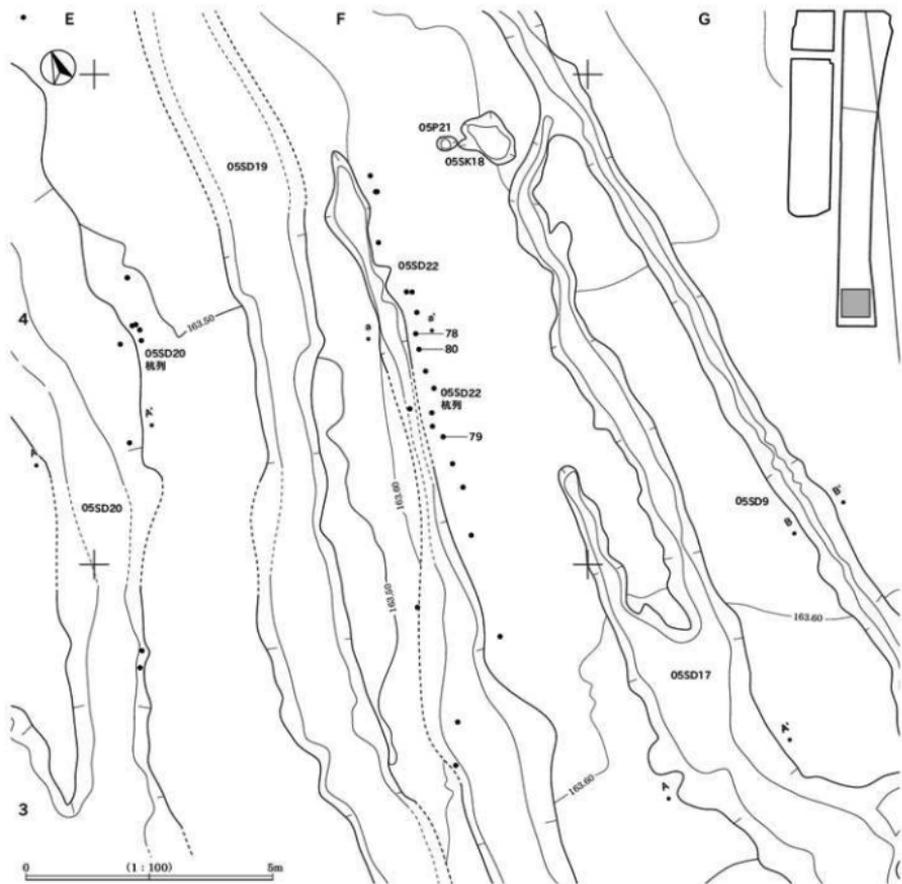


05SD9

A' 164.800m

05SD9
1 オリーブ黒色粘質土 粘粒あり、しまりややあり。黄灰色シルトをブロック状にやや多く含む。
黒色粘質土を粘状に含む。腐植物(径5-10mm)をまばらに少量含む。





0 5m (1:100)



05SD9

- 1 堀オリーブ灰色シルト 粘粒中やあり、しまりなし。炭化物をまばらに少量含む。腐植物を全体的にやや多く含む。
- 2 緑灰色シルト 粘粒中やあり、しまり中やあり。
- 3 緑灰色シルト 粘粒中やあり、しまり中やあり。
- 4 堀オリーブ灰色土をまばらにやや多く含む。腐植物をまばらに少量含む。

A A' 05SD20 163.600m



05SD20

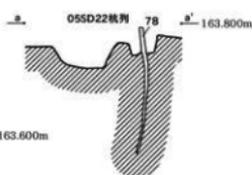
- 1 堀オリーブ灰色土 粘粒あり、しまり中やあり。黄灰色砂をまばらに少量含む。
- 2 黄褐色砂 粘粒なし、しまり中やあり。
- 3 オリーブ褐色粘質土 粘粒あり、しまり中やあり。
- 4 黄褐色砂 粘粒なし、しまりなし。
- 5 オリーブ褐色粘質土 粘粒あり、しまりあり。腐植物をまばらに少量含む。
- 6 オリーブ灰色粘質土 粘粒あり、しまり中やあり。

A A' 05SD17 163.700m



05SD17

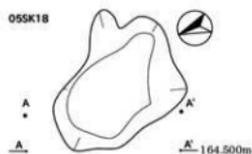
- 1 灰色シルト 粘粒なし、しまりなし。腐植物を全体的にやや多く含む。
- 2 緑褐色シルト 粘粒なし、しまりなし。炭化物をまばらにごく少量含む。腐植物を全体的に非常に多く含む。
- 3 堀オリーブ灰色シルト 粘粒なし、しまりなし。炭化物をまばらにやや多く含む。腐植物を全体的に多く含む。
- 4 黄褐色シルト 粘粒なし、しまりなし。炭化物をまばらに少量含む。腐植物を全体的に非常に多く含む。
- 5 オリーブ褐色シルト 粘粒なし、しまりなし。堀オリーブ灰色砂を全体的に多く含む。



05SD22

78

A A' 163.600m



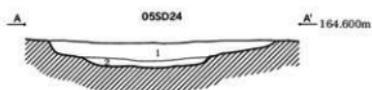
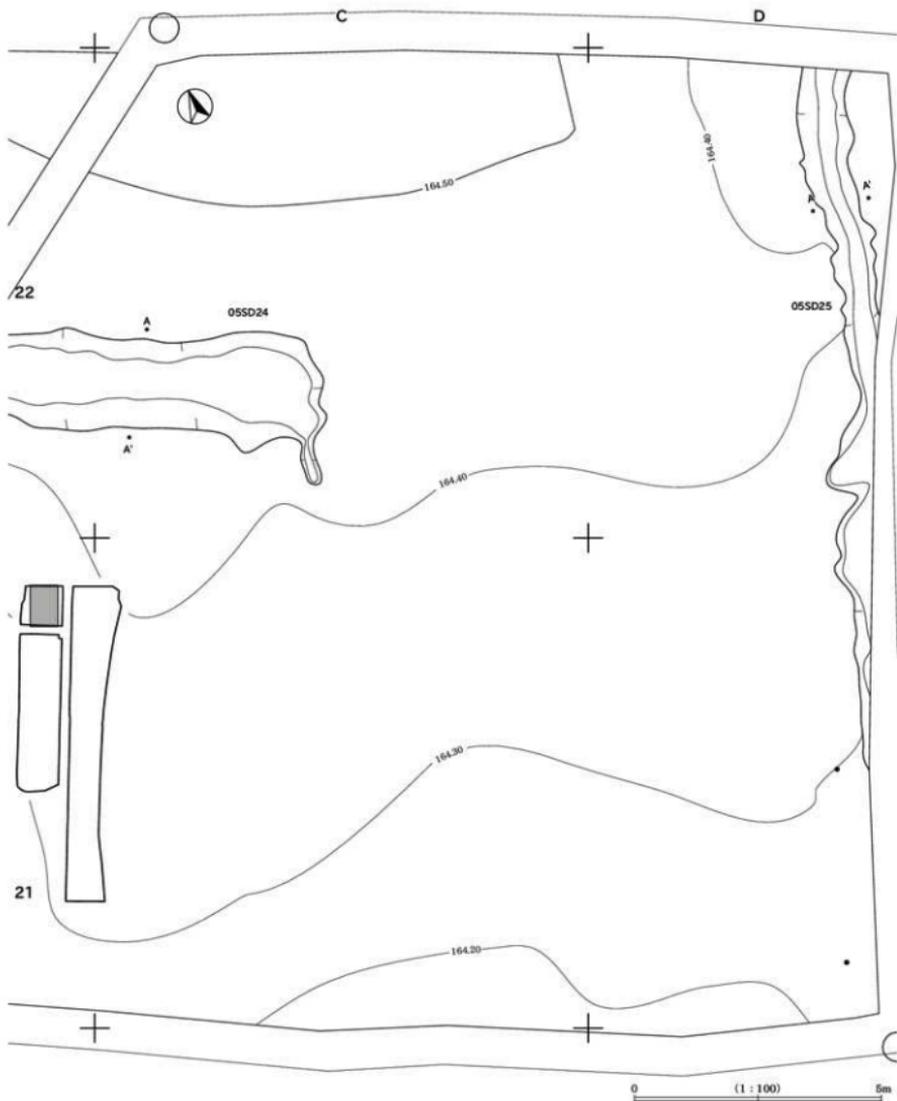
05SK18

05SK18

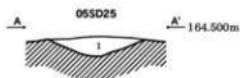
05SK18

- 1 堀オリーブ灰色シルト 粘粒なし、しまり中やあり。炭化物をまばらにごく少量含む。
- 2 黄褐色シルト 粘粒なし、しまりなし。腐植物を全体的に多く含む。炭化物をまばらに少量含む。
- 3 堀オリーブ灰色砂 粘粒なし、しまり中やあり。腐植物をまばらに少量含む。黄褐色砂を全体的にやや多く含む。

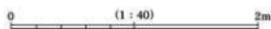
0 2m (1:40)

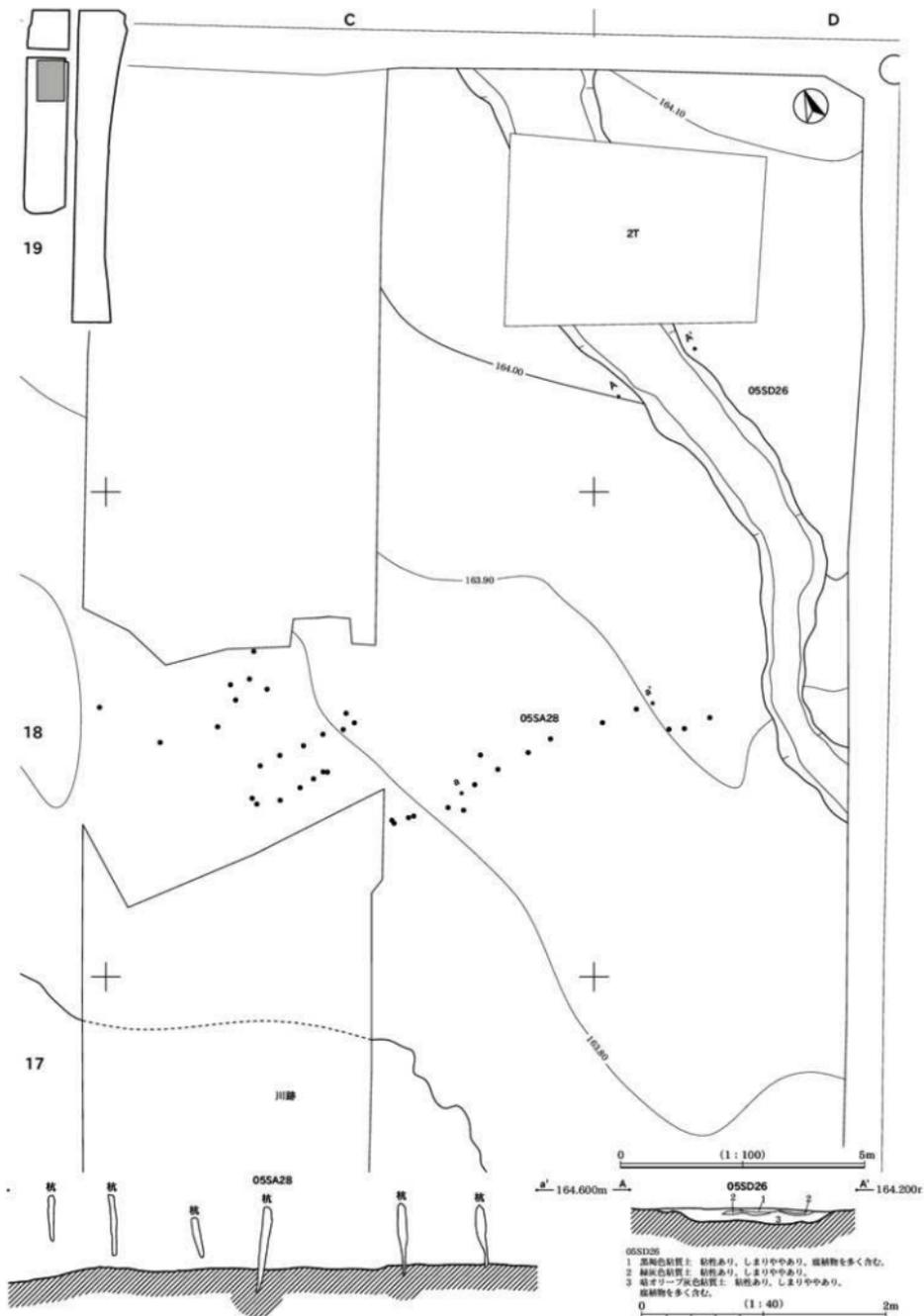


05SD24
 1 明黄褐色砂 粘質なし、しまりなし。
 2 オリーブ灰色砂 粘質なし、しまりなし。



05SD25
 1 オリーブ褐色砂 粘質なし、しまりなし。礫(径1~5mm)を多く含む。

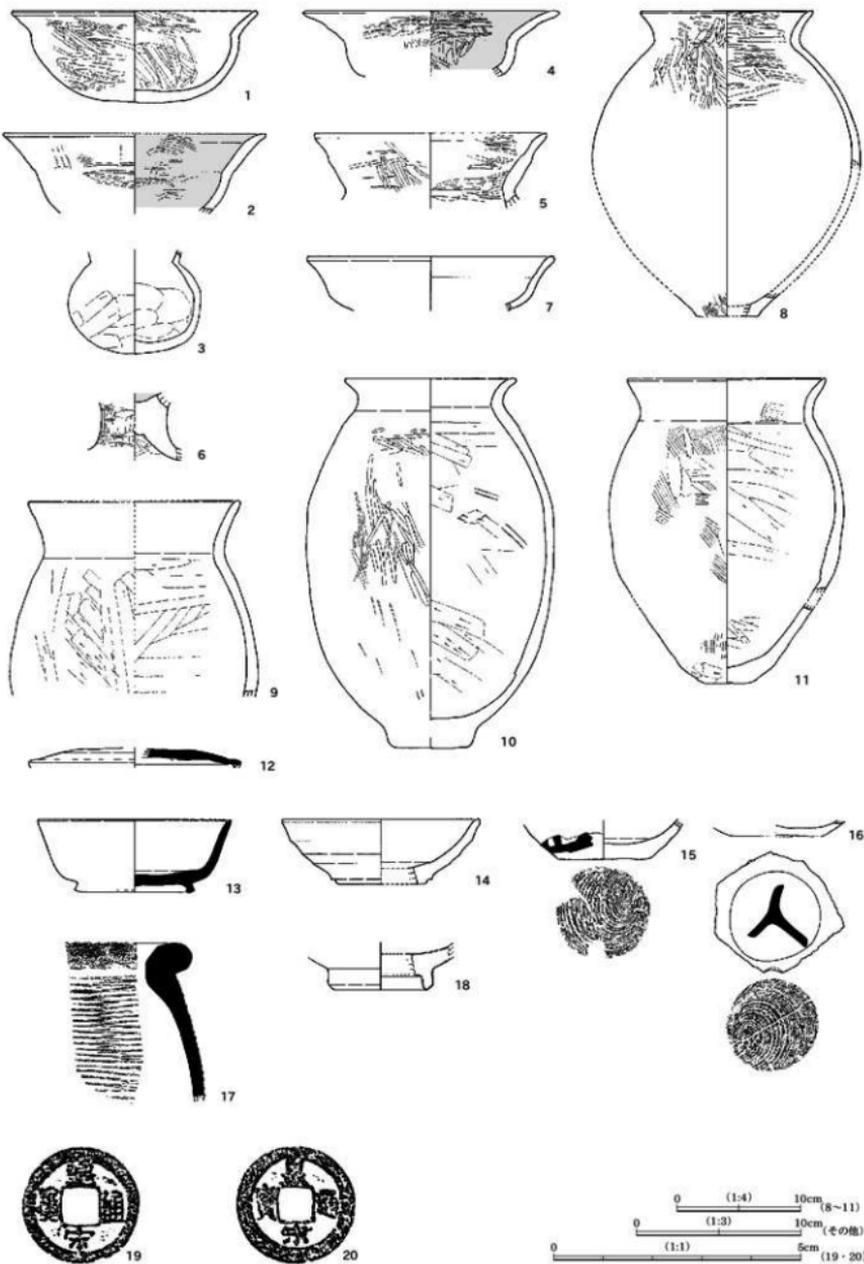


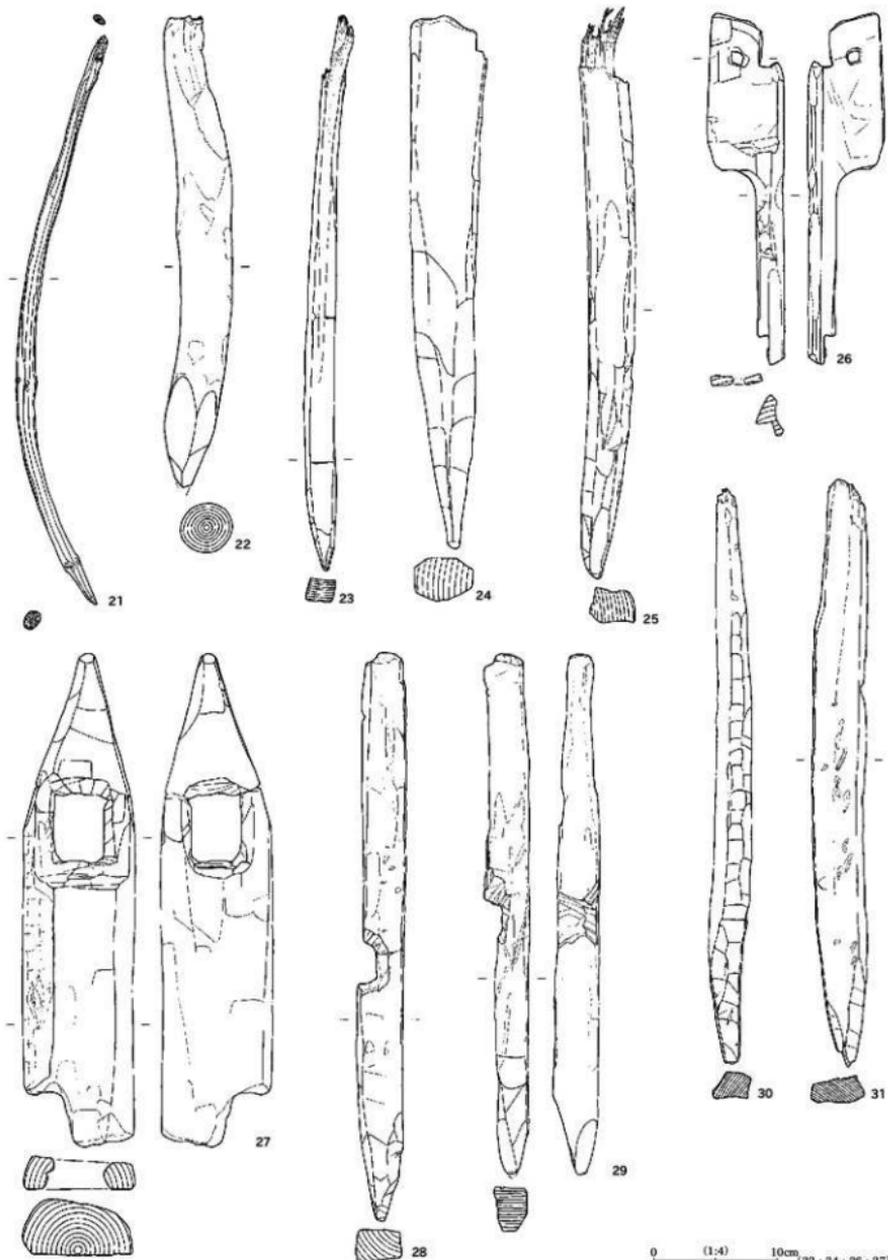


- 055D26
- 1 黒褐色粘質土 粘りあり、しまりや中あり、炭屑物を多く含む。
 - 2 黒褐色粘質土 粘りあり、しまりや中あり。
 - 3 灰サリ〜下砂状粘質土、粘りあり、しまりや中あり、炭屑物を多く含む。

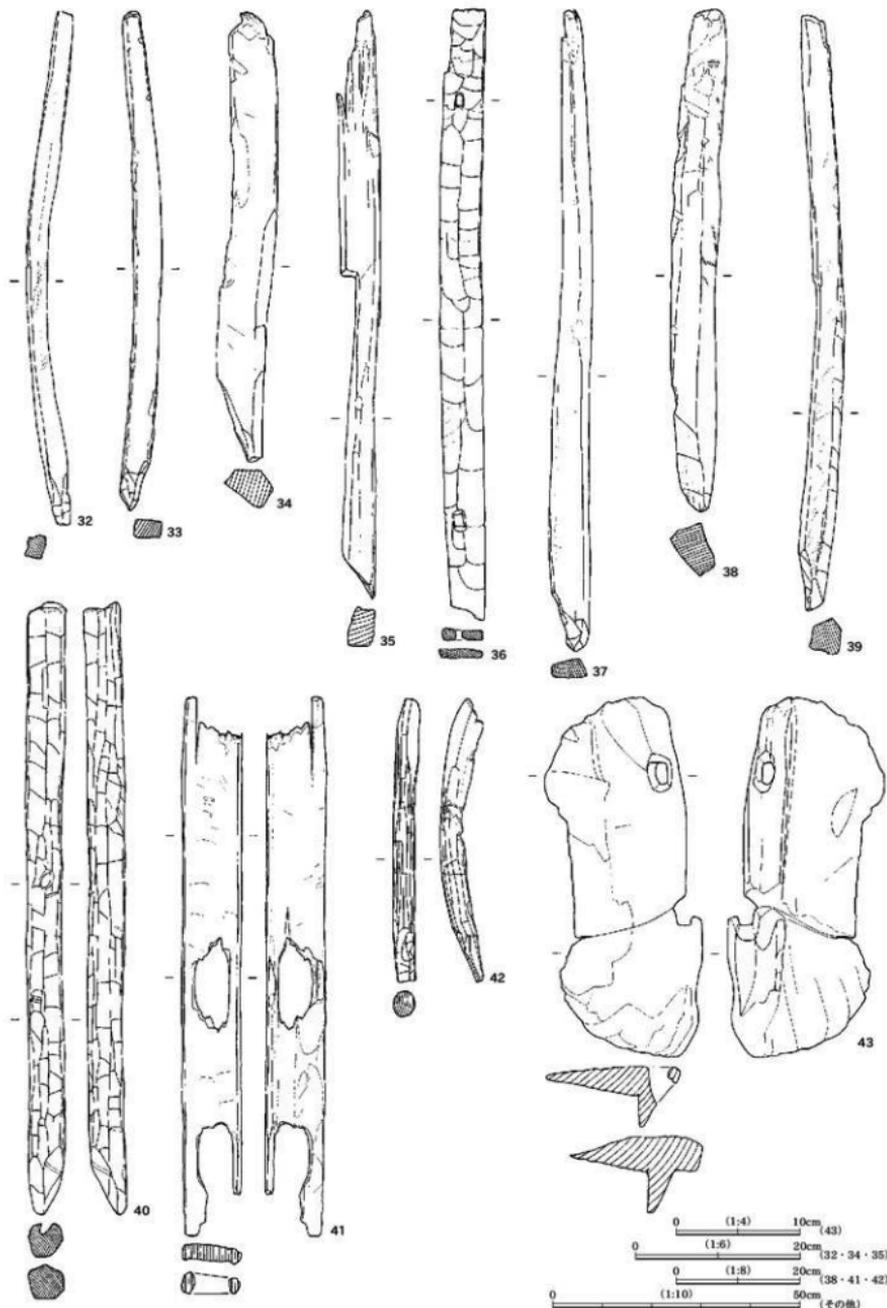
(1:40)

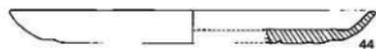
2m





0 (1:4) 10cm (22・24・26・27)
 0 (1:6) 20cm (その他)
 0 (1:8) 20cm (23・30・31)





44



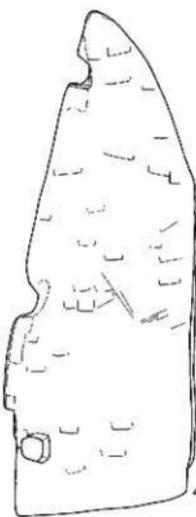
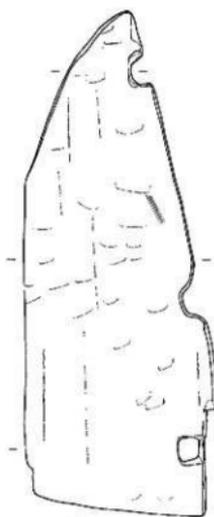
45



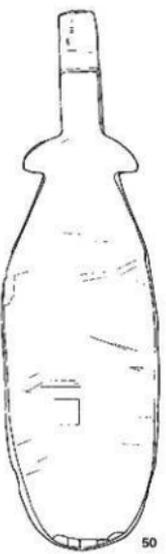
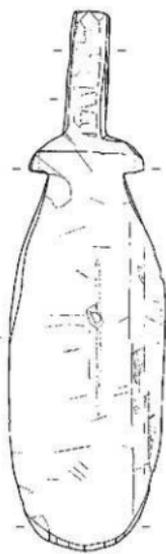
46



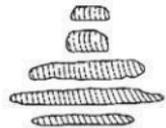
47



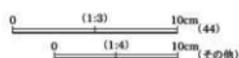
48

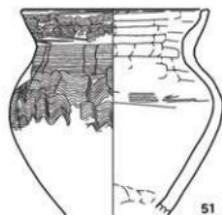


50

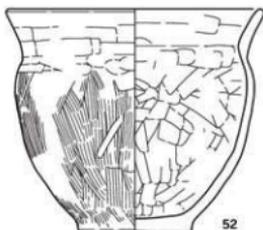


49

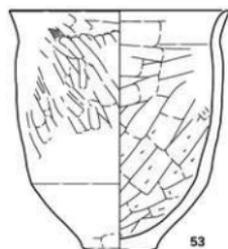




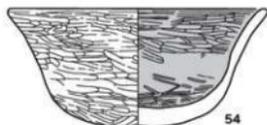
51



52



53



54



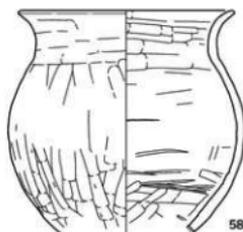
55



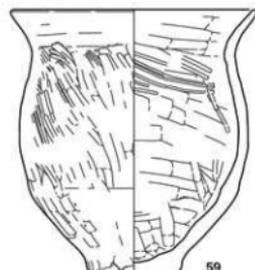
56



57



58



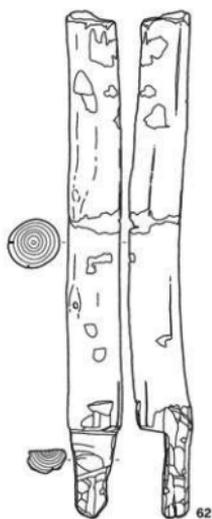
59



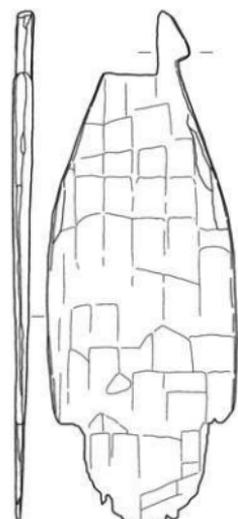
60



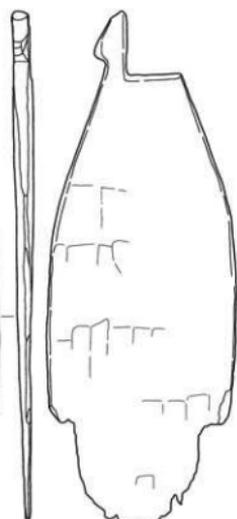
61



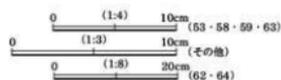
62

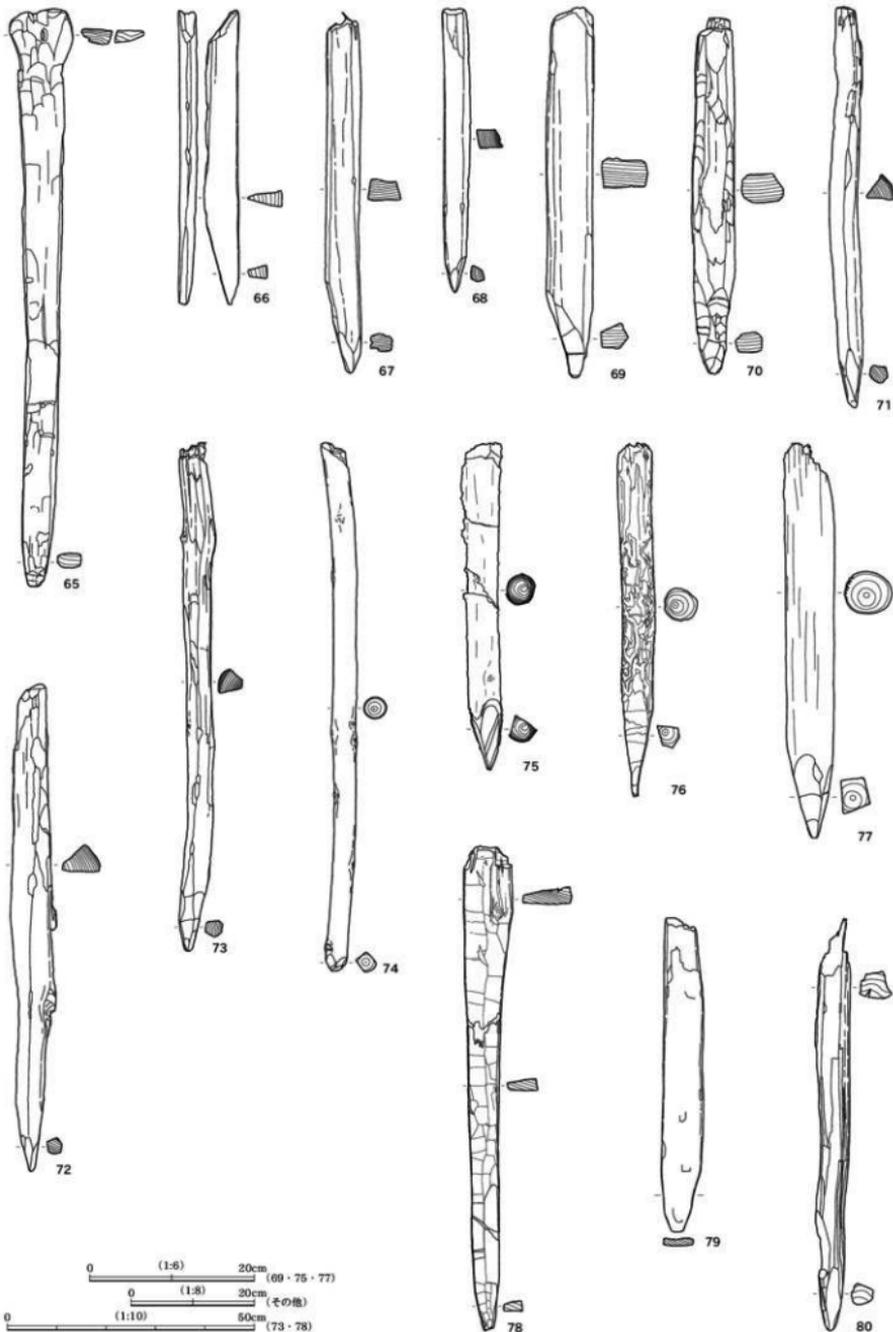


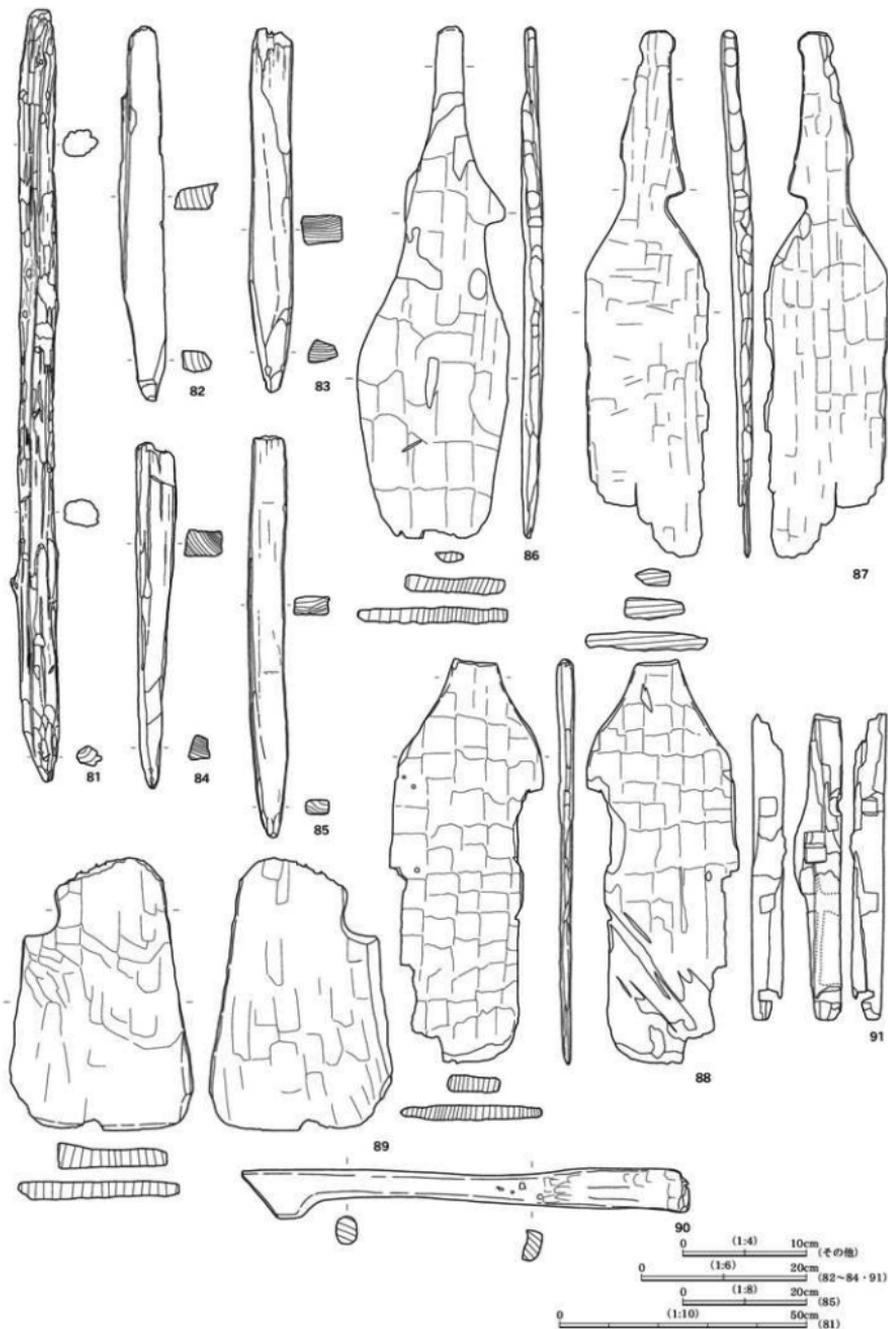
63

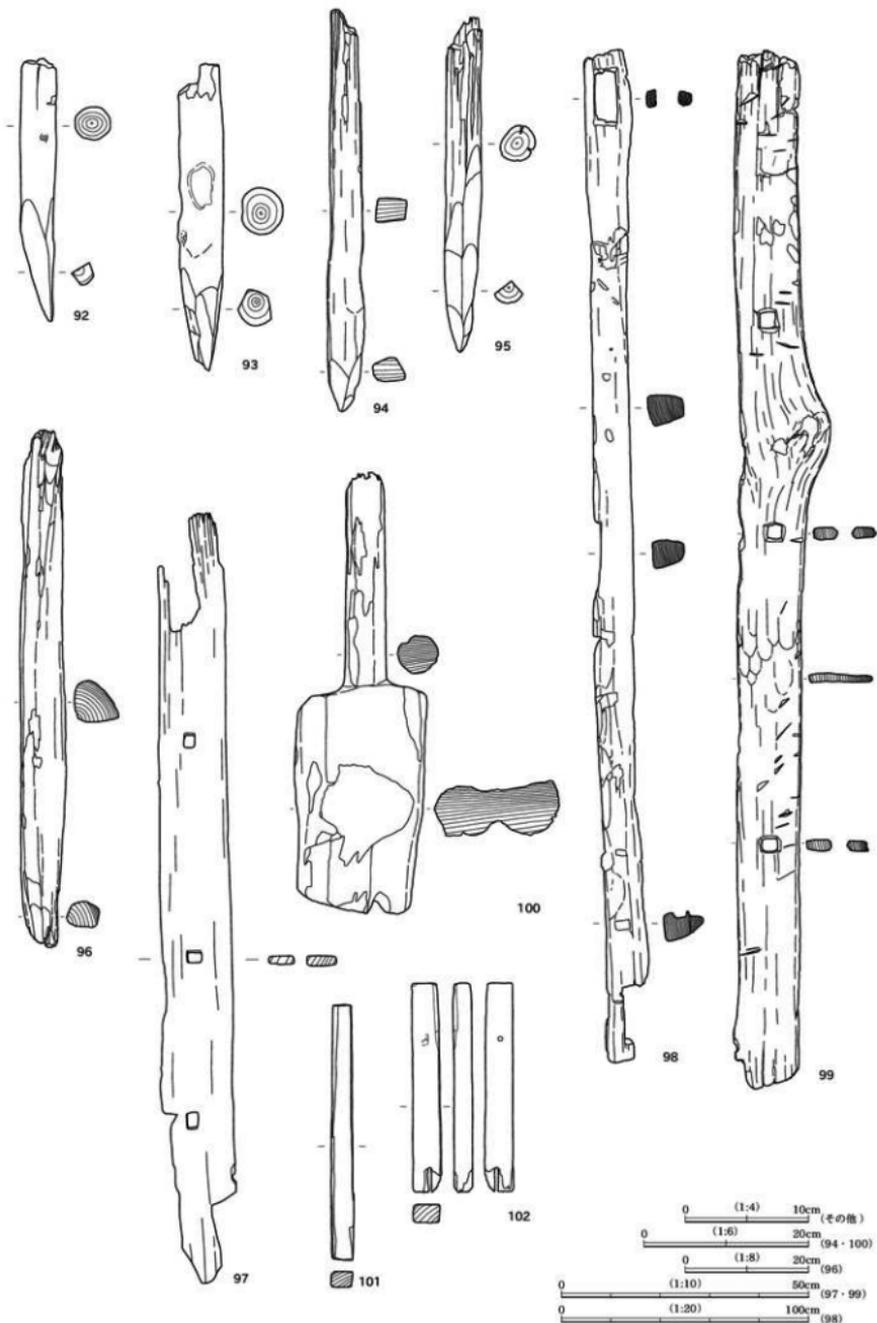


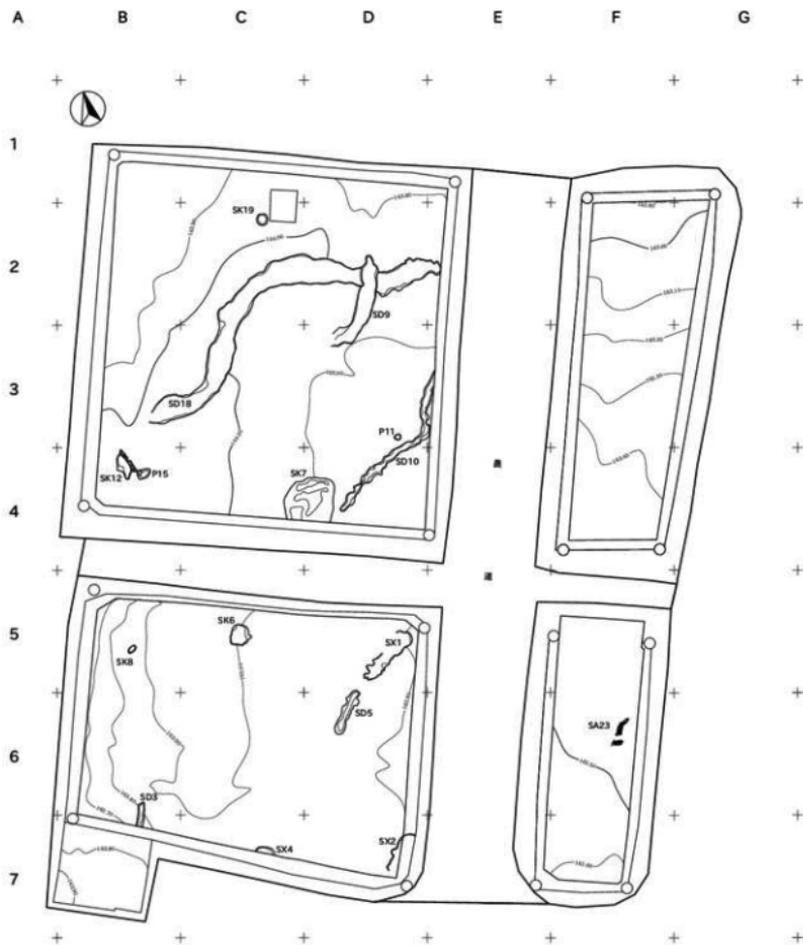
64

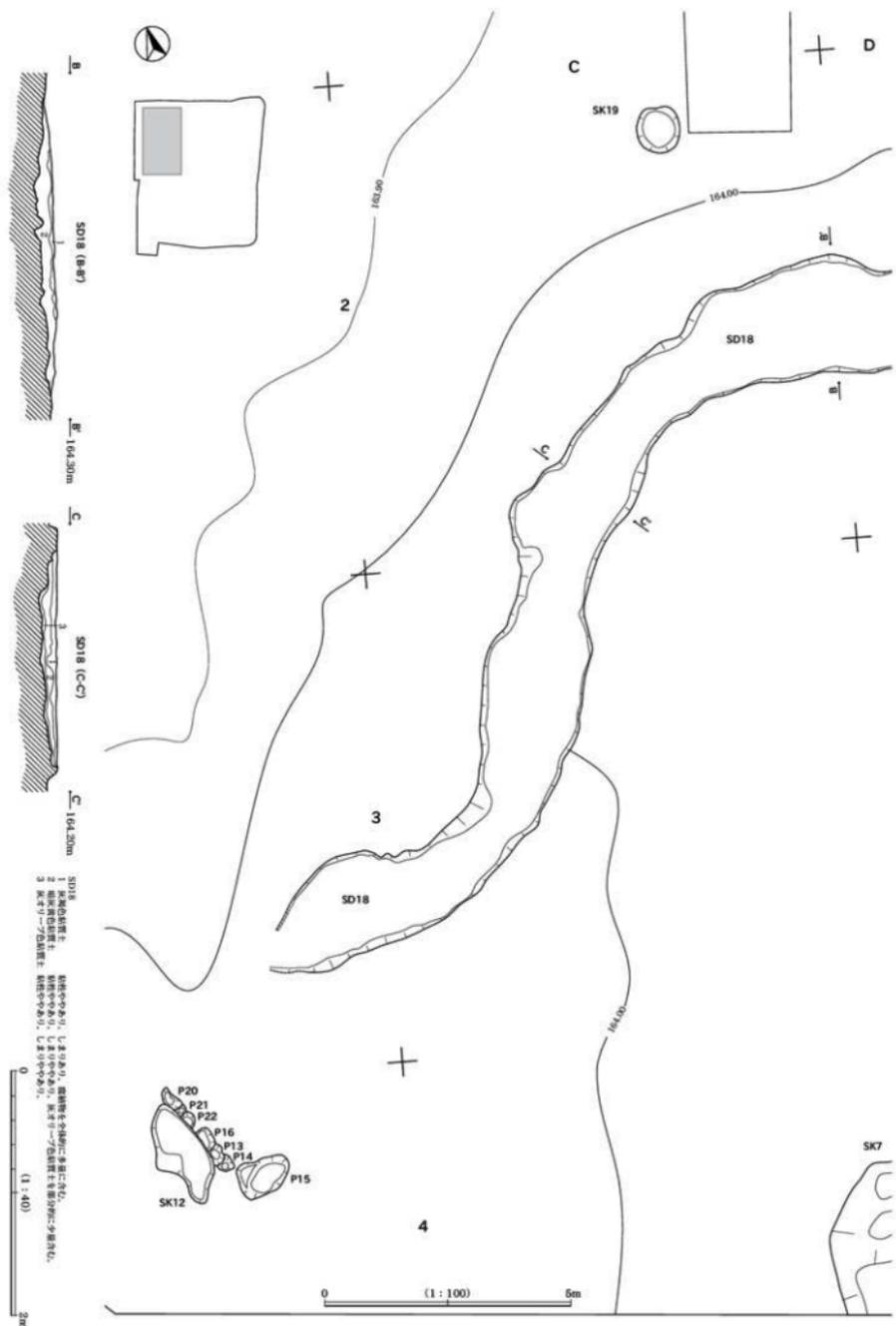


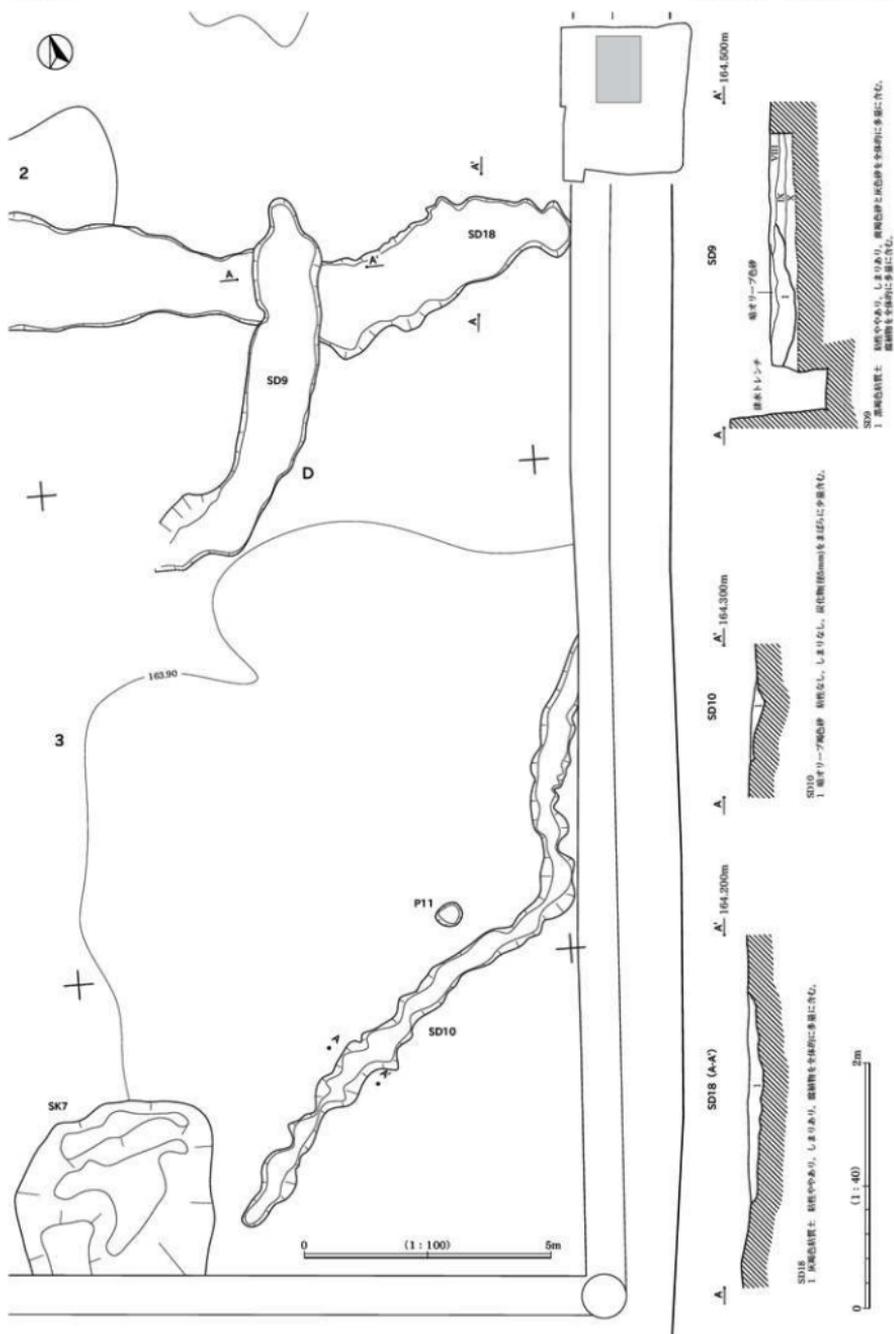


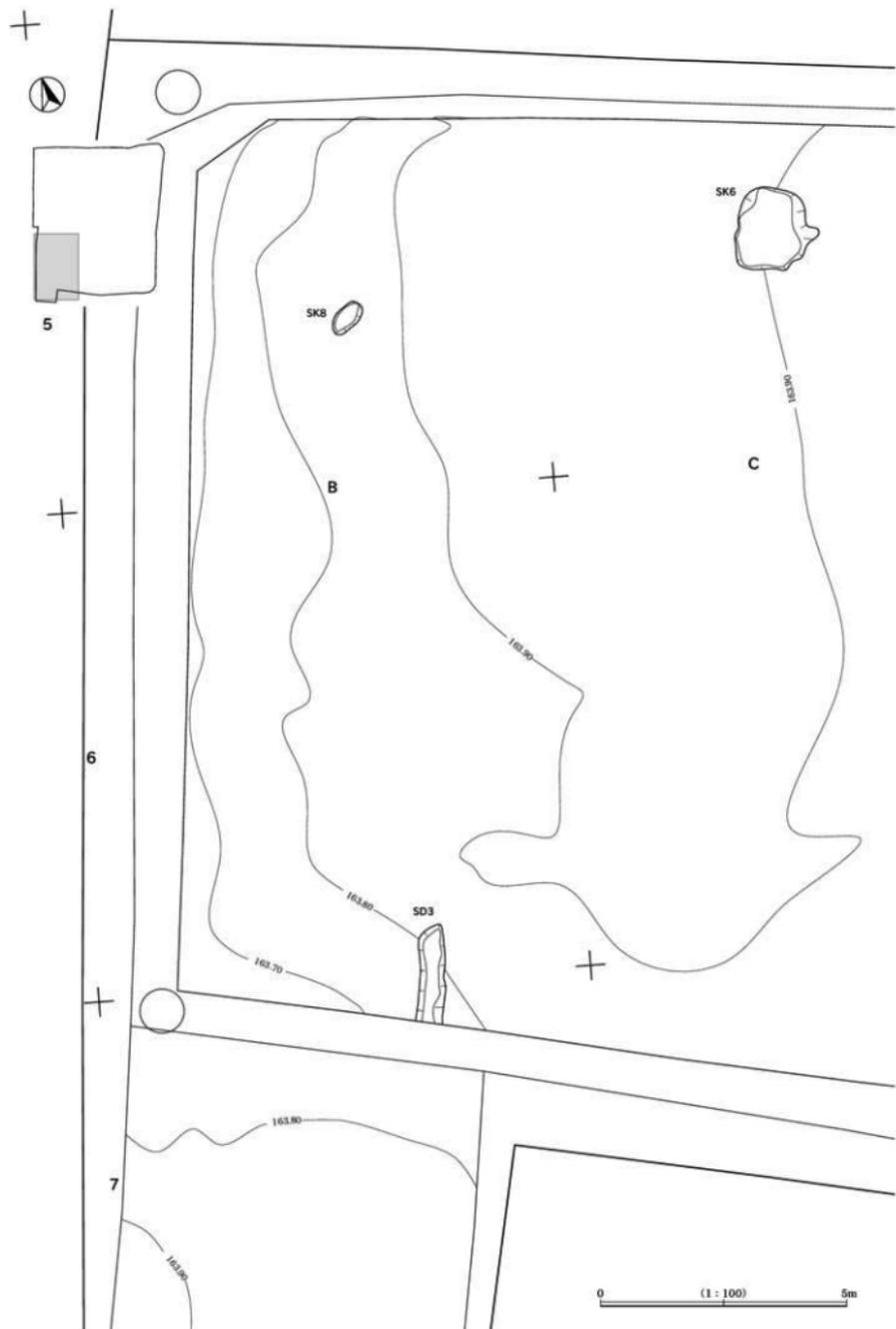


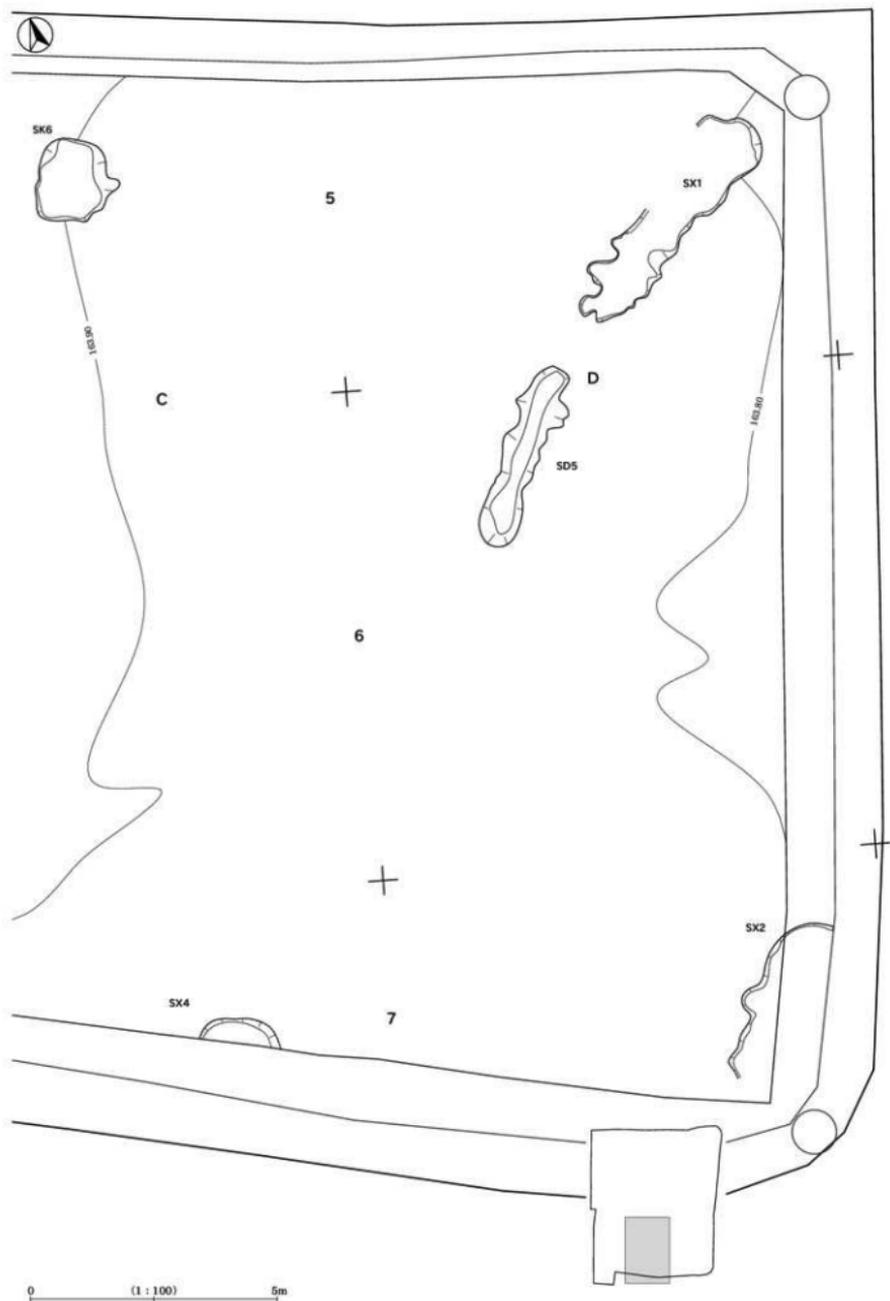


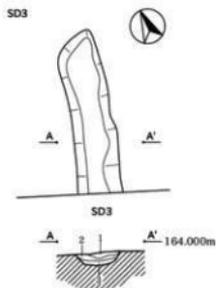




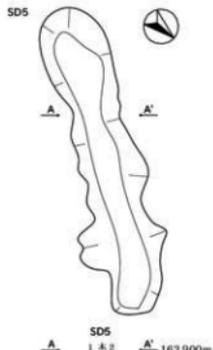




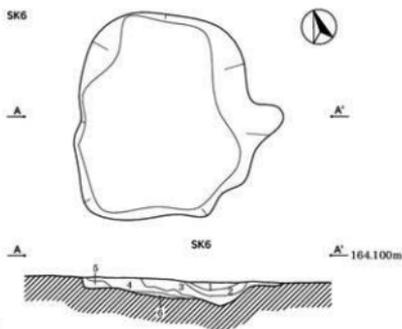




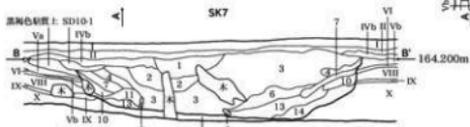
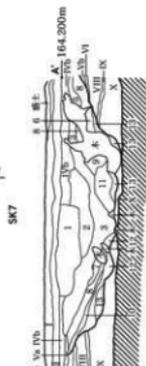
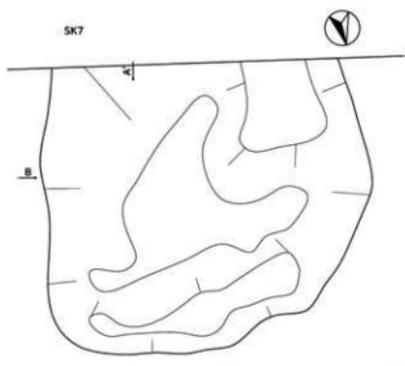
SD3
1 黄灰色粘質土 粘性あり、しまりなし。
2 灰色粘質土 粘性あり、しまりなし。
3 灰オリーブ色粘質土 粘性あり、しまりなし。



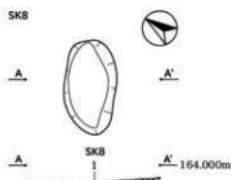
SD5
1 灰色粘質土 粘性あり、しまり中やあり。
2 オリーブ灰色シルト 粘性中やあり、しまりあり。
3 灰色粘質土 粘性あり、しまり中やあり。
4 オリーブ黒色粘質土 粘性あり、しまりあり。
黄灰シルトをまばらに少量含む。



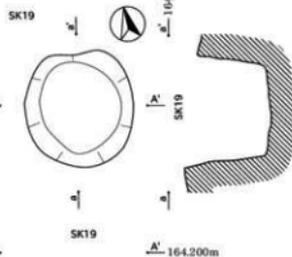
SK6
1 黄灰色粘質土 粘性中やあり、しまりなし。
灰化物(径1~2mm)を全体的にごく少量含む。
2 黄灰色粘質土 粘性中やあり、しまりなし。
灰化物(径1~2mm)を全体的に少量含む。
3 黄灰色粘質土 粘性中やあり、しまり中やあり。
灰化物(径1~2mm)をまばらにごく少量含む。
4 黄灰色粘質土 粘性中やあり、しまりなし。
5 暗灰色粘質土 粘性中やあり、しまりなし。
灰化物を散在に含む。
6 灰色粘質土 粘性中やあり、しまりなし。



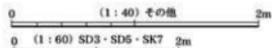
SK7
1 暗褐色土 粘性なし、しまりあり。灰色土をブロック状に多く含む。
2 黒色粘質土 粘性中やあり、しまりなし。
灰化物(径5~8mm)を全体的に中や多く含む。
3 灰色粘質土 粘性中やあり、しまりあり。
粘性中やあり、しまり中やあり。
4 暗灰色粘質土 粘性中やあり、しまりあり。
黄灰色砂を全体的に多く含む。
5 オリーブ黒色土 粘性中やあり、しまり中やあり。
6 暗オリーブ灰色粘質土 粘性中やあり、しまり中やあり。
7 黄褐色粘質土 粘性中やあり、しまりなし。
黄褐色土を全体的に散在に中や多く含む。
8 黄灰色粘質土 粘性中やあり、しまり中やあり。
9 黒褐色粘質土 粘性中やあり、しまり中やあり。
10 黒褐色粘質土 粘性中やあり、しまり中やあり。
灰化物(径3~7mm)をまばらにごく少量含む。
11 黒褐色粘質土 粘性中やあり、しまり中やあり。
灰化物(径2~3mm)をまばらにごく少量含む。
12 黒褐色粘質土 粘性中やあり、しまり中やあり。
黄褐色土を全体的に散在に多く含む。
13 灰色粘質土 粘性中やあり、しまりなし。
灰褐色土を散在に少量含む。
14 暗緑灰色粘質土 粘性あり、しまりなし。
灰化物(径2~5mm)をまばらにごく少量含む。

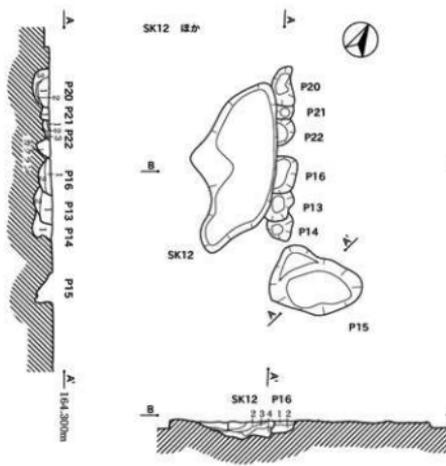


SKB
1 黄灰色粘質土 粘性中やあり、しまり中やあり。
灰化物(径1~2mm)を全体的に中や多く含む。

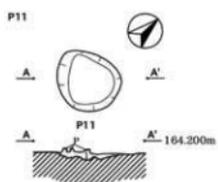


SK19
1 黒褐色土 粘性なし、しまり中やあり。黄褐色粘質土をブロック状に少量含む。
黄褐色シルトと灰白色粘質土をブロック状に散在に多く含む。

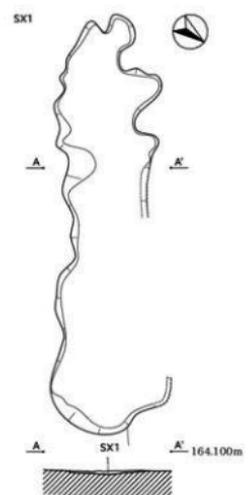
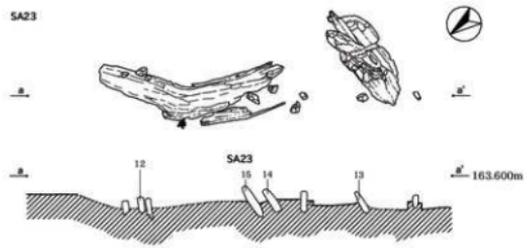




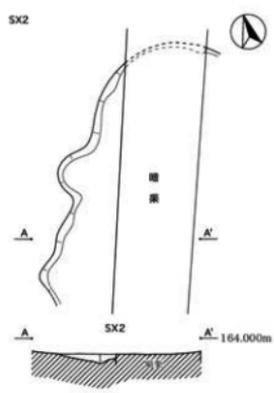
- SK12**
- 1 黒褐色粘質土 粘質あり、しまりややあり。炭化物をごく少量含む。
 - 2 オリーブ色シルト 粘質ややあり、しまりややあり。
 - 3 灰オリーブ色シルト 粘質ややあり、しまりあり。炭化物をごく少量含む。
 - 4 灰オリーブ灰褐色粘土 粘質あり、しまりややあり。灰褐色土を含む。
- P13**
- 1 黒褐色シルト 粘質あり、しまりややあり。炭化物をごく少量含む。
 - 2 黒褐色シルト 粘質ややあり、しまりややあり。
- P14**
- 1 オリーブ黒色シルト 粘質ややあり、しまりややあり。灰褐色土をブロック状に含む。灰オリーブ色砂を少量含む。
- P15**
- 1 暗褐色粘質土 粘質ややあり、しまりあり。炭化物を少量含む。
 - 2 灰オリーブ灰褐色粘土 粘質あり、しまりややあり。灰褐色土をブロック状に含む。
 - 3 黒褐色粘質土 粘質あり、しまりややあり。炭化物を少量含む。
- P16**
- 1 黒褐色シルト 粘質あり、しまりややあり。炭化物をごく少量含む。
 - 2 黒褐色シルト 粘質ややあり、しまりややあり。炭化物を中や多く含む。
- P20**
- 1 暗褐色粘質土 粘質あり、しまりややあり。灰褐色土をブロック状に含む。
 - 2 黒褐色粘質土 粘質あり、しまりややあり。灰褐色土をまばらに含む。
 - 3 灰褐色粘土 粘質あり、しまりややあり。灰褐色砂を散在に含む。
- P21**
- 1 灰オリーブ色粘質土 粘質あり、しまりあり。
- P22**
- 1 灰褐色粘土 粘質ややあり、しまりあり。
 - 2 灰オリーブ色粘質土 粘質あり、しまりあり。
 - 3 オリーブ黒色粘質土 粘質あり、しまりあり。



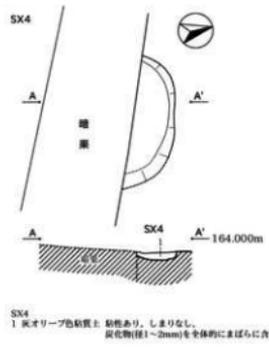
- P11**
- 1 黒褐色粘質土 粘質あり、しまりあり。炭化物をまばらに少量含む。



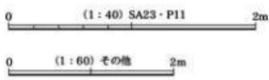
- SX1**
- 1 黒褐色粘質土 粘質あり、しまりあり。炭化物をまばらに多く含む。

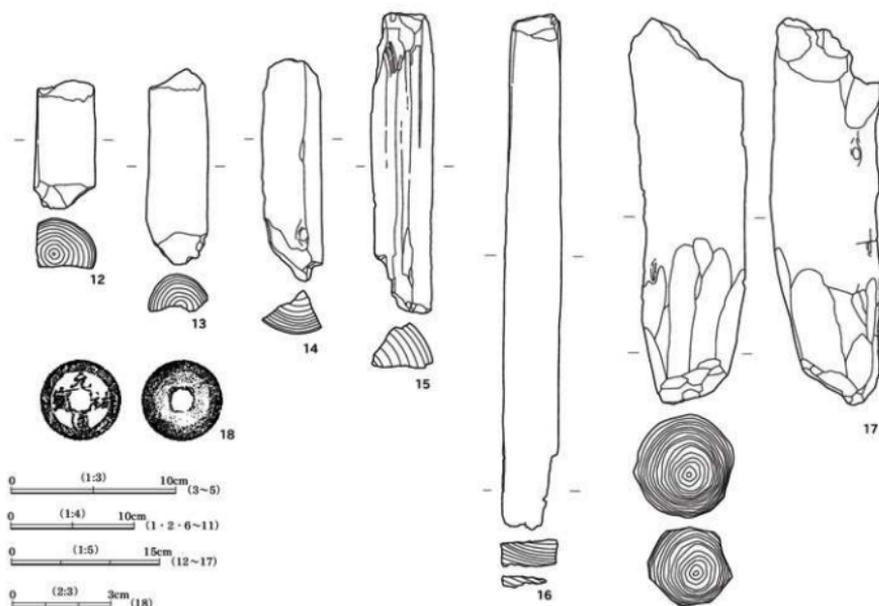
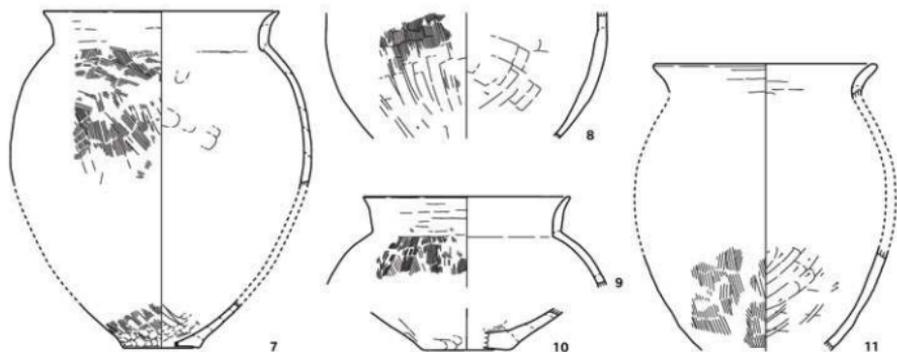
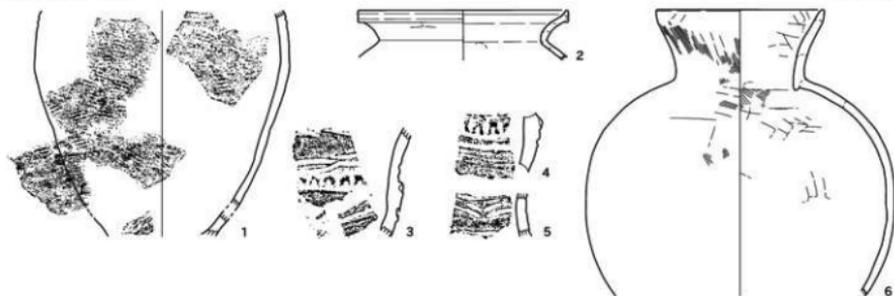


- SX2**
- 1 オリーブ黒色粘質土 粘質あり、しまりあり。炭化物を少量含む。褐色土をまばらに中や多く含む。



- SX4**
- 1 灰オリーブ色粘質土 粘質あり、しまりなし。炭化物(径1~2mm)を全体的にまばらに含む。







北冲東道跡・長表東道跡遠景（坂戸山から）



北冲東道跡近景（北から）



平成16年度調査区 IV～VII層検出面完掘（北から）



平成16年度調査区 IV～VII層検出面完掘（西から）



平成16年度調査区 SD6周辺（北から）



15F 基本層序（西から）



14F 基本層序（北から）



4F 基本層序（東から）



15C 基本層序（東から）



SD1 断面 (北西から)



SD4 断面 (北西から)



SD5 断面 (南東から)



SD1・4・5 完掘 (北西から)



SD6 断面A-A' (南から)



SD6 断面B-B' (北から)



SD6 断面C-C' (南東から)



SD6 完掘 (南から)



SD2 断面(南東から)



SD2 完掘(南東から)



SD20 断面(南から)



SD22 断面(西から)



SD20・22 完掘(北西から)



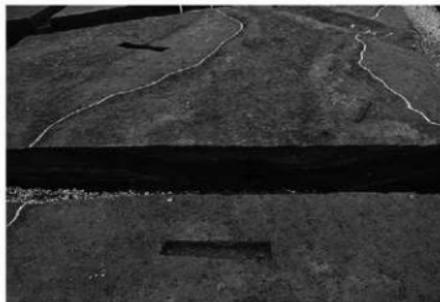
作業風景



SD9 断面A-A'(南から)



SD9 断面B-B'(南から)



SD9 断面C-C' (南から)



SD9 断面D-D' (南から)



SD9 断面E-E' (南東から)



SD9 断面F-F' (南から)



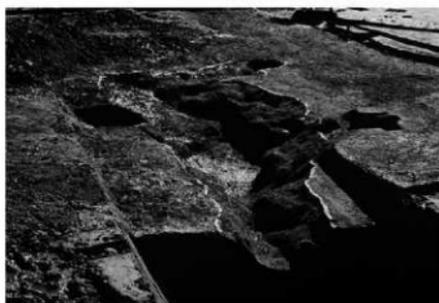
SD9 18F付近完掘 (北西から)



SD9 15G付近完掘 (南から)



SD34 断面 (西から)



SD34 完掘 (北西から)



SA15 (北から)



SA15 断面 (東から)



SA17 (南から)



SA17 断面A-A' (南から)



SA17 断面B-B' (南から)



SA18 (北から)



SA18 断面A-A' (南から)



SA18 断面B-B' (東から)



SA19 (南から)



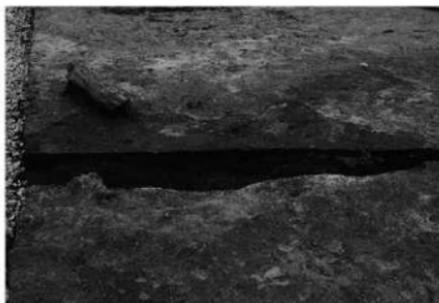
SA31 杭出土状況(東から)



SD9 杭列 柱出土状況(西から)



遺物出土状況(南から)



SX3 断面(南西から)



SX3 完備(東から)



木製品(46・47)出土状況(東から)



木製品(50)出土状況(南東から)



平成17年度調査区 市道東側完掘（南から）



平成17年度調査区 市道 西側完掘（北から）



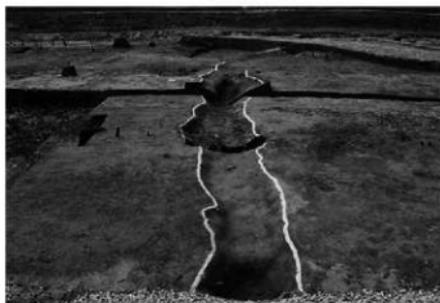
05SD1 断面 (西から)



05SD1 完掘 (東から)



05SD6 断面 (東から)



05SD6 完掘 (東から)



05SD9 断面A-A' (南から)



05SD9 断面B-B' (南から)



05SD9 完掘 (北から)



05SD9 完掘 (南から)



05SD15 断面 (南東から)



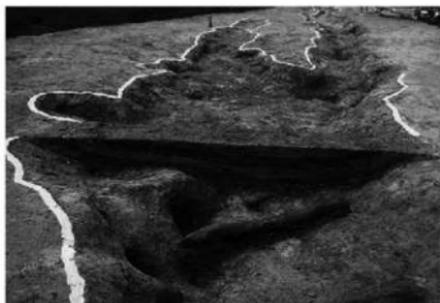
05SD16 断面 (南東から)



05SD15・16 完掘 (南東から)



作業風景 (南から)



05SD17 断面 (南から)



05SD17 完掘 (南東から)



05SD19 断面 (南から)



05SD20 断面 (南から)



05SD19・20 完掘(南から)



市道東側 完掘(南から)



05SD24 断面(西から)



05SD24 完掘(西から)



05SD25 断面(南から)



05SD25 完掘(南から)



05SD26 断面(南東から)



05SD26 完掘(北から)



05SA5 (南東から)



05SA5 断面A-A' (北から)



05SA5 断面B-B' (北から)



05SA5 丸太 (東から)



05SA5 板材検出状況 (北から)



05SA5 板材検出状況 (北東から)



05SD9 杭列 断面 (南から)



05SD9 杭列 (南東から)



05SD22 杭列 (南から)



05SA28 (南から)



05木道11 (南東から)



05木道11 (西から)



05SK7 断面 (南から)



05SK7 完掘 (南から)



05SK18 断面 (東から)



05SK18 完掘 (東から)



05SX10・13 断面（北から）



05SX13 断面（北から）



05SX8 断面（北から）



05SX10・SX13・SX8 発掘（北から）



13F14 遺物 (59) 出土状況（西から）



6G6・7 遺物出土状況（南東から）

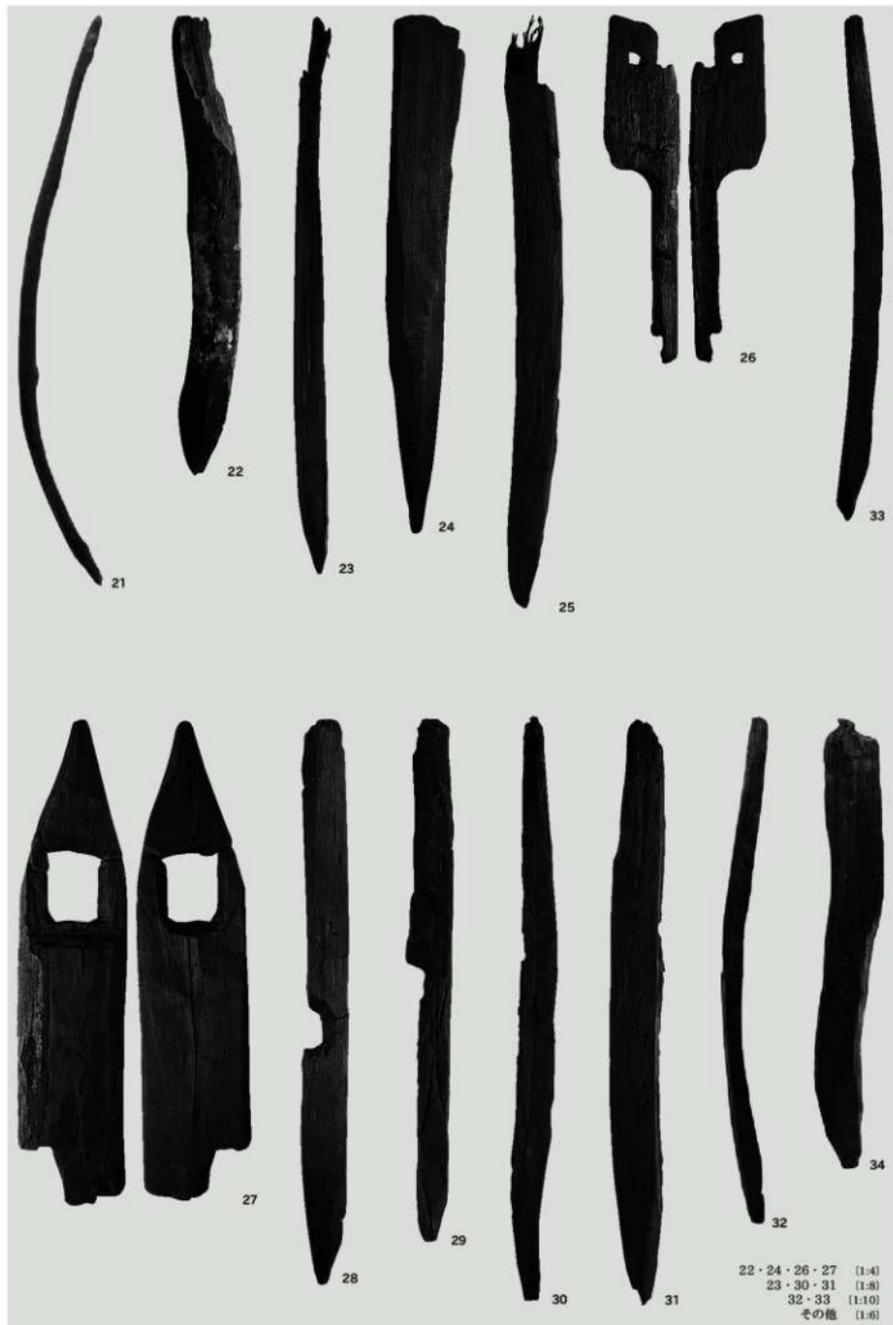


6F17 木製品 (87) 出土状況（北東から）

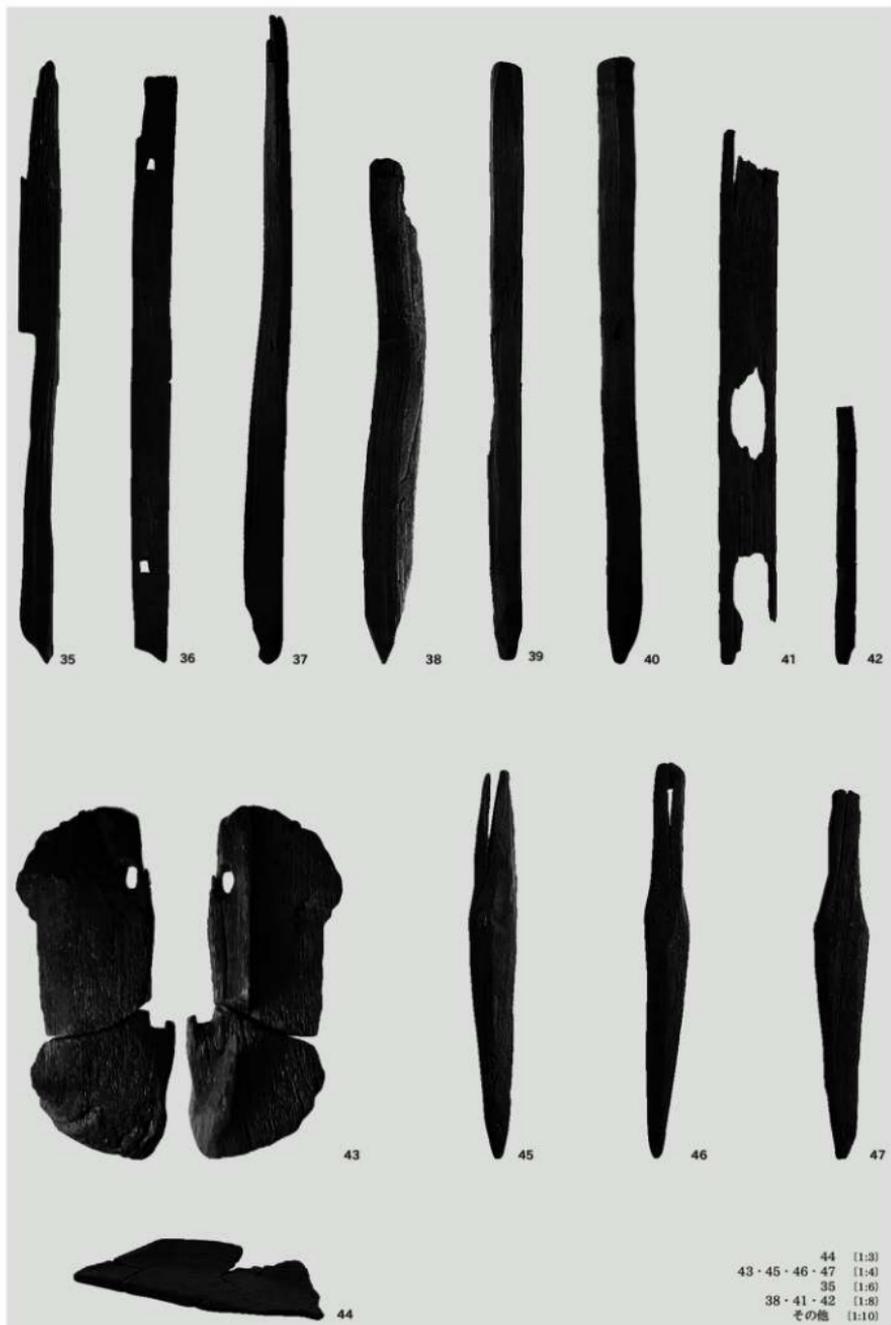


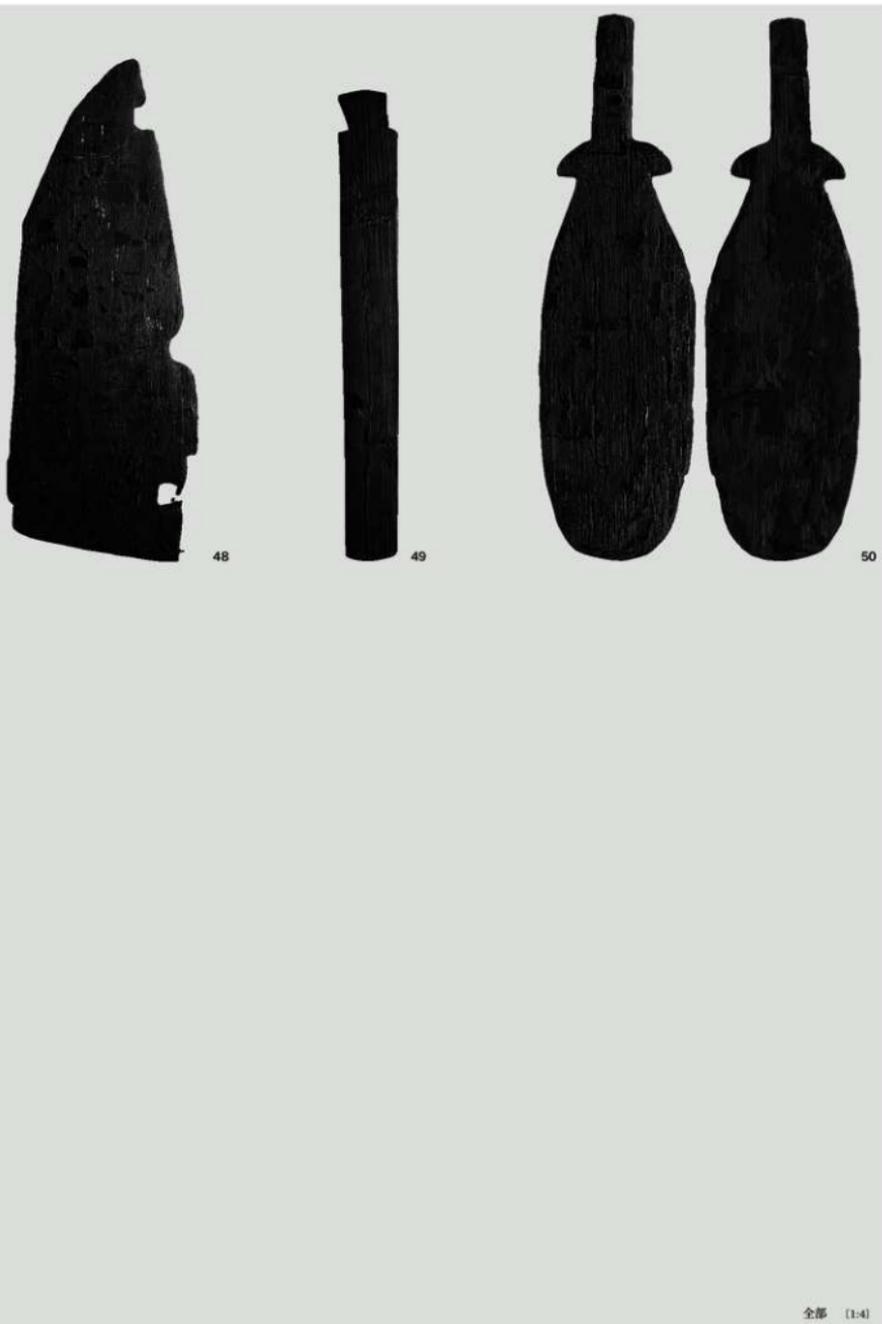
16B16・7 木製品 (98) 出土状況（北東から）





22・24・26・27 (1:4)
 23・30・31 (1:8)
 32・33 (1:10)
 その他 (1:6)







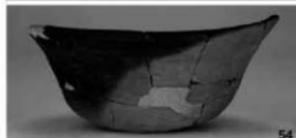
51



52



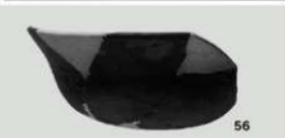
53



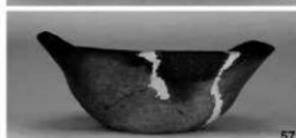
54



55



56



57



58



59



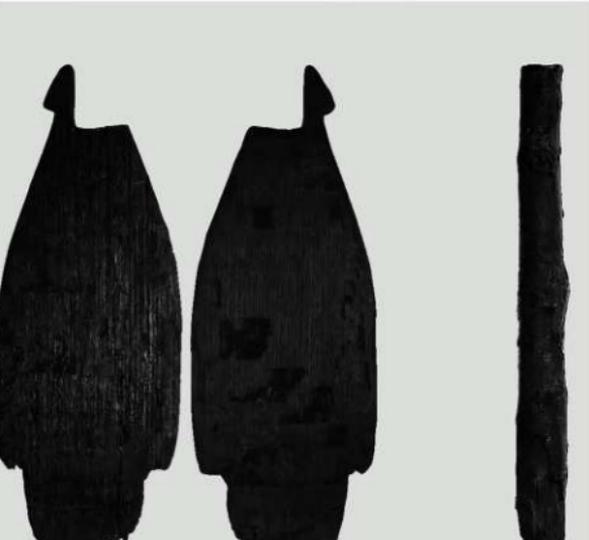
60



61



62



63

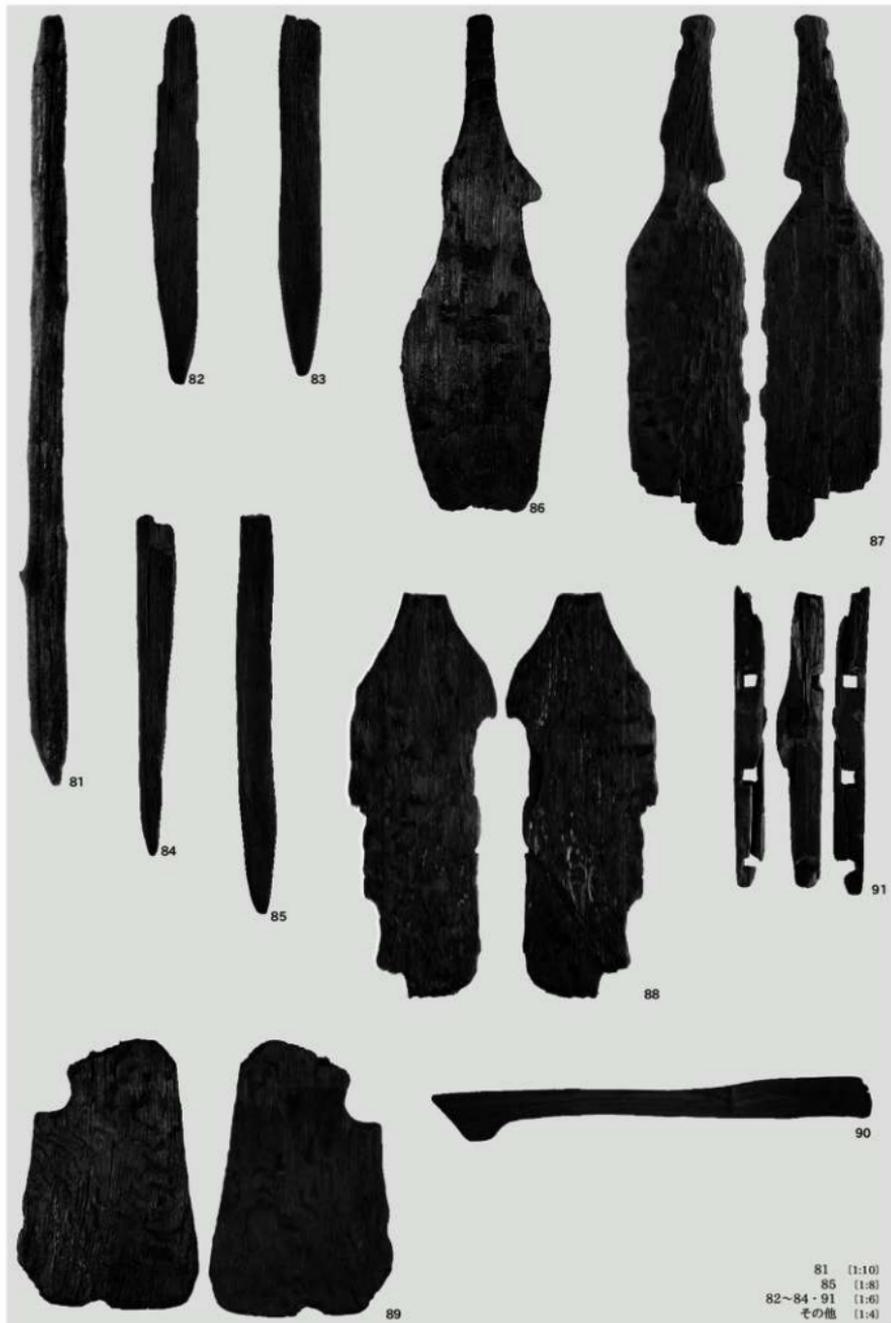


64

53・58・59・63 [1:4]
62・64 [1:8]
その他 [1:3]



73・78 (1:10)
69・75・77 (1:6)
その他 (1:8)



81	(1:10)
85	(1:8)
82~84・91	(1:6)
その他	(1:4)





長表東遺跡近景 (上空から)



基本層序① (西から)



SD3 断面 (北から)



SD5 断面 (北東から)



SD9 断面 (南から)



SD10 断面(南西から)



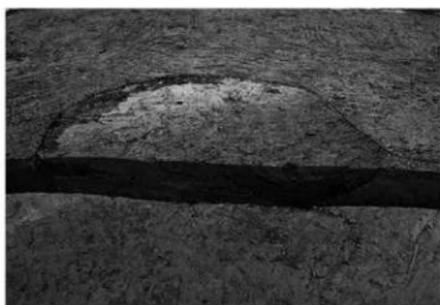
SD18 断面C-C'(南から)



SD9・10・18 完掘(北東から)



SK8 断面(南西から)



SK6 断面(南から)



SK6 完掘(南から)



SK7 断面A-A'(西から)



SK7 断面A-A'(西から)



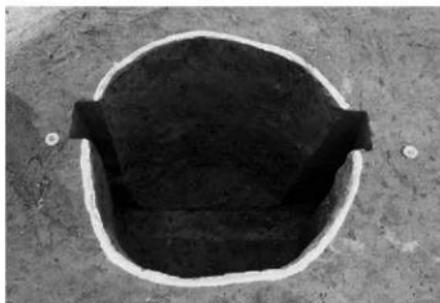
SK7 断面b-b' (北から)



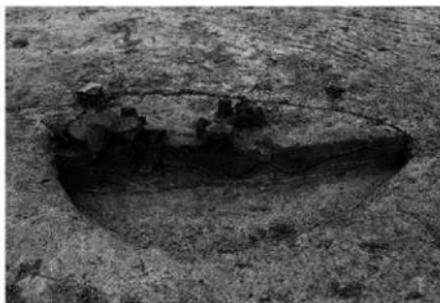
SK7 完掘 (北から)



SK19 断面 (南から)



SK19完掘 (北から)



P11 断面 (南東から)



P11 完掘 (南東から)



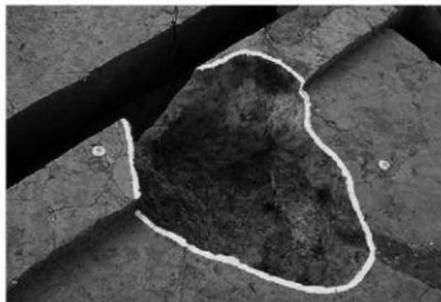
SK12 断面 (北から)



P13・14 断面 (北から)



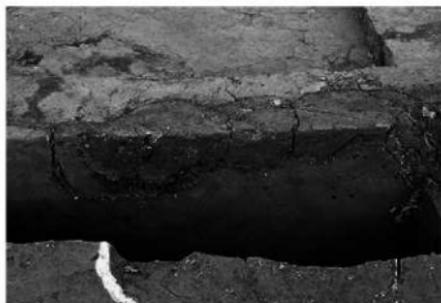
P15 断面(北から)



P15 完掘(東から)



P16 断面(南西から)



P20・21・22 断面(南西から)



SA23 検出(西から)



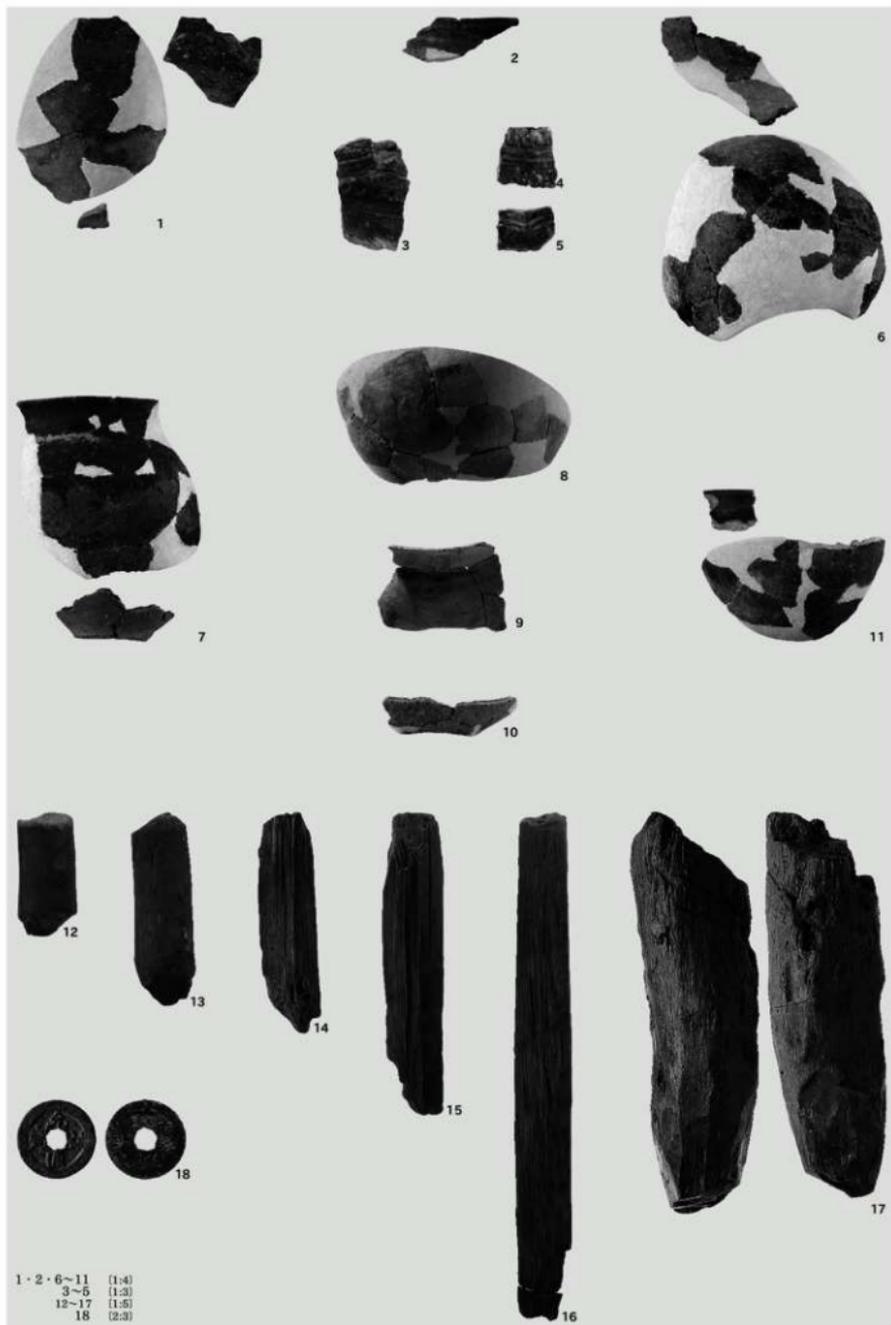
SX1 断面(北から)



SX2 断面(南から)



SX4 断面(東から)



1・2・6~11 (1:4)
 3~5 (1:3)
 12~17 (1:5)
 18 (2:3)

報告書抄録

ふりがな	きたおきひがしいせき ながおもてひがしいせき						
書名	北沖東遺跡 長表東遺跡						
副書名	一般国道17号六日町バイパス関係発掘調査報告書						
巻次	Ⅱ						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第156集						
編著者名	飯坂盛泰・山崎忠良・笹川 隆・島津賢男・入江清次(埋文事業団)・實川順一・桑原 健(株式会社みくに考古学研究所)						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250-25-3981						
発行年月日	2006(平成18)年3月31日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° '	東経 ° ° '	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
北沖東遺跡	新潟県南魚沼市 小栗山字北沖 19-3ほか	15226 300	37度 4分 9秒	138度 52分 10秒	20040906～ 20041126 20050606～ 20050916	9,300 m ²	一般国道17号 六日町バイパス 建設
長表東遺跡	新潟県南魚沼市 小栗山字長表 322-3ほか	15226 299	37度 3分 51秒	138度 52分 2秒	20050801～ 20051019	2,565 m ²	一般国道17号 六日町バイパス 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
北沖東遺跡	散布地	古墳時代後期	溝3条・川跡13条・杭列6条・木道1基・土坑2基・ピット1基・性格不明遺構4基		土師器・木製品	ナスビ形木製農具	
	散布地	古代(平安時代)	川跡7条・杭列5条・性格不明遺構1基		土師器・須恵器・木製品		
	散布地	近世	溝1条・性格不明遺構2基		陶磁器		
長表東遺跡	散布地	弥生時代後期～古墳時代前期	溝2条・川跡3条・土坑5基・ピット8基・杭列1条・性格不明遺構3基		弥生土器・古墳時代土師器		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第156集
一般国道17号六日町バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ
北沖東遺跡・長表東遺跡

平成18年3月25日印刷
平成18年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市新光町4番地1
電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986
URL <http://www.maibun.net>

印刷・製本 長谷川印刷

〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号
電話 025(233)0321